魔法少女とかマジ笑える

二足歩行犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女とかマジ笑える

【Ｎコード】
Ｎ０９１２Ｚ

【作者名】
二足歩行犬

【あらすじ】
リリカルな世界に転生した少年の物語。
能力は貰えなかったが、精一杯生きています。今、中学２年生の春が始まる！！

プロローグ（前書き）

どうも、二足歩行犬です。

かなりgdgdな感じですが、どうか温かい目で見てやってください。

感想をくれると、夕食のおかずが一品増えます。

プロローグ

４月。
まだ寒気が残るが、徐々に暖かさを感じるようになる季節。
そして、始まりの季節。
入学、就職、新学期、留年（笑）。
そんな始まりのイベントが、もちろん俺にもある。
西野音耶、中学二年生になりました！！

あっ、あと転生者です。

～１３年前～

「知らない天井……が、ないだと…！？」

やってくれるな、俺を嵌めるなんて。
まさか天井がないとは。
で、ここどこだ？

「ふぉ、起きたようじゃの」

死んだじーちゃんに良く似た声がした。
おいおいっ！やめてくれよじーちゃん！！
俺が幽霊嫌いなの知ってんだろ！？

下半身のダムが崩壊しそうなのを我慢して、恐る恐る振り向くと、
そこには良く見知った人がいた。

「あ、あんたは！？」

「ふぉふぉふぉ、そうじゃ。わしはｋ「山本元柳斎重國！！」万象一切灰じ、って違うわ！！！！」

ノリのいい老いぼれだった。

「で？あんただれよ？」

「神じゃ」

「へー」

「……それだけかの？」

いや、これ転生ってやつだろ？
二次創作でよく見る展開だし。
だから神が出ても、特に何も。

「なんじゃ、つまらんのぉ」

頬を膨らませてブーブー言ってくる。
うはっ、きめぇ！！

「で、能力は何くれんの？転生先は？」

「転生先は『魔法少女リリカルなのは』の世界じゃ」

ああ魔王ね。

んで、能力は？

「やらん」

「ｗｈａｔ？」

「だから、能力はやらん」

なに言ってんのこいつ？

俺に桃色バスターを生身で受け止めろと？

「じゃあ原作介入は？」

「しなければ良かろうが」

「それじゃ転生の意味なくね？」

「そうじゃの」

え？こいつ何なの？アホなの？死ぬの？

「まったく、うるさいやつじゃのぉ。いいか？わしだって能力をやりたい。しかしな、能力を授けると……減るんじゃ…」

減る？なにが？寿命か？

「髪じゃ」

「よし、つるつるになるまで能力寄こせ」

「嫌じゃ！！」

「アンタの髪の毛だって、もう疲れたんだ！！楽にしてやれ！！！」

「毛は我と共にあり」

「お前もう帰れ」

「いや、お主が帰れ」

「いやいや俺死んで、ッなんだこれ！？」

足元から黒い何かが、徐々に俺を包んでいく。

「一応、魔導師の子供になるようにしといたからの。感謝するんじゃぞ」

「あっ、ちょっ、アーーーーーーーーーーーーッ」

黒いものに全身を包まれた俺の意識は、そこでブラックアウトした。

「ふむ、やっぱり能力をやっても良かったかのぉ。……いや、あや

つにまでやるとわしの髪の毛がなくなるか」

「さて、あやつら3人がどのような物語を見せてくれるか楽しみじゃ」

第1話　俺の家族。妹はマジ天使（前書き）

聖祥は男女一緒にしました。

何か誤字がありましたら、お教えください。

今日のうちに、あと一話いけるかな？

第1話　俺の家族。妹はマジ天使

現在、午後7時。
枕元に置いた目覚まし時計が、不快になるほど電子音を鳴らしている。
けど俺は起きない。
いや、実際起きているのだが寝たフリをする。
否!!しなければならないのだ。

その時、扉をノックする音がした。

「……おにいちゃん？」

聞こえてくるのは、甘いロリボイス。
憎き早朝を清清しい朝に変えてくれるＡｎｇｅｌ　ｖｏｉｃｅ。
しかしまだ起きない。

「入るよ？……起きて。学校遅れる」

そう言って俺を揺さぶる。
仕方ない、起きるか。
泣かれても困るしな。

「んっ…おはよぅ、雪音」

「おはよう」

ニコニコしながら挨拶を交わすＭｙ　Ａｎｇｅｌ。
あまりの可愛さに撫でてやると、気持ち良さそうに目を細めた。

朝から俺を殺す気ですか？

「おにいちゃん、お腹すいた」

「ああ、今作るから待ってな」

そう言って雪音に先に降りてもらう。

俺は制服に着替えると、朝食を作るためリビングへ向かった。

「おっす、兄貴！！」

「朝からうるせー」

「兄貴が、テンション、低いだけだよ！！」

リビングで朝っぱらから逆立ち腕立て伏せをしているこいつは、弟の紫音。

別名、イガグリ紫音。

坊主頭の熱血男子だ。

坊主なのに紫音。

坊主なのに紫音。

大事なことなので二回言った。

「紫音、シャワー浴びとけよ」

「えー、めんどくせー」

「モテないぞ？」

「なんか無性にシャワー浴びたくなった！！」

風呂場に向かって走っていく紫音。

ふっ、単純な奴だ。

「おにいちゃん、ご飯」

クイクイっと服を掴む雪音。

雪音は俺の妹で、紫音の姉。

黒いツインテールが可愛さを倍増させている。

基本、俺と紫音と両親以外には口数の少ない女の子。

しかし、それがいい…。

ちなみに両親は管理局員をしているため、家には不在。

なので、俺たち3人で家庭を切り盛りしている。

まあ、主に俺だけだけど。

「雪音は何が食べたい？」

「…パン」

「じゃあ、パンと目玉焼きとサラダでいっか」

俺は裾を掴む雪音に名残惜しいが離れてもらい、キッチンへと向かった。

「「「いただきます」」」

朝食を作り終え、３人で食卓を囲む。

「兄貴、最近たるんでない？」

「いきなり何を言うか、イガグリ」

「イガグリじゃねえよ！！坊主だよ！！」

「で？何がたるんでるって？」

「修行だよ修行！！」

あー、確かに最近やってないかも。

時間もあんまり取れなかったし。

「まあ、俺は家族を守れればそれでいいからな」

「……わたし、守ってくれるの？」

「ああ、頼りないかもだけど、母さんと雪音は俺が守るよ」

「……あれ？俺と父さんは？」

「野郎は知らん」

ガックリしているイガグリを放っておいて、向かいに座る雪音を撫

でようとしたが……出来なかった。
原因はコイツ。
西野家名物、食パンタワー。
見上げるほどの食パンが、俺と雪音の間の壁となっている。
お陰で人形のような雪音フェイスが見えない。
ああ忌々しい。

「しかし、姉ちゃんは良く食べるよな～」

「…食べるの、好き」

「俺は雪音の食べる姿が好き」

「……兄貴って本当に姉ちゃんが好きだよな」

「ああ、もう胸が満腹だ……」

「「いってきます（！！）」」

「おう、いってらっしゃい。あ、イガグリ、雪音の弁当落とすなよ」

「これくらい大丈夫だって！！」

そう言うイガグリの手には重箱2つ。
どちらも雪音の分だ。
雪音はかなり食べるのに非力なので、弁当持ちはコイツの仕事。

ちなみに2人は小6と小5です。
学校は私立聖祥大付属小学校。
俺はそこの中学2年。来年は雪音が上がってくる。
考えただけでも涎が出そうだ。

さて、俺も支度をして行くかな。

第1話　俺の家族。妹はマジ天使（後書き）

出ました、西野ファミリー！！

読みは…

音耶（おとや）
雪音（ゆきね）
紫音（しおん）

です。

紫音とか絶対に付けられたくないですよね？
俺だったらグれます。

第2話　新クラス。魔王はマジやばい（前書き）

今日で3話。
頑張った俺。
そんな俺には一品おかずが増えます。

ガーリックトースト

神の作りし聖なる食物。

美味でした。

第2話　新クラス。魔王はマジやばい

着きました中学校。
え？展開が早い？だって登校しただけだよ？

まあそんなこんなで、俺は掲示板の前にいる。
目的は新クラスを確認するためだ。

さてと、まずは２－Ａから…
秋本…
川井…
立川…
内藤…
ぬこ…

……ないか。Ｂ組は…
あああ…
エ口…
鬼山…
クレス…
屍人…
豚々…
ぬこ３６０…

……突っ込まんぞ。Ｃは…
アリサ…
海堂…
高町…
月村…

西野…
フェイト…
八神…

ふむ、どうやらC組のようだ。
しかしなんだ、原作キャラ纏められているな。
まあ、関わらなければいいだけだけど。
桃色バスター喰らいたくねぇし。

で、着きました教室。
知ってる奴いないな。まあ、元から友達なんていないけどね、ハハハ。
俺は広く浅くの関係を望んでいるのだよ、ワトソン君。
今、水深0メートルくらいだけど。
あ、原作キャラもまだ着てないようだ。

俺はＭｙデスクの場所を確認して席に着いた。
場所は窓側の一番後ろから二番目。まあまあなポディション。
俺は席に着き、鞄からある物を取り出した。
ふむ、朝はこれがないと。

～なのはｓｉｄｅ～

今日から新学年！！
わたしは新しい出会いを楽しみにしながら、通学路を歩いていた。

「お～い、なのは～」

「あ、アリサちゃん！！」

「おはよう、なのはちゃん」

「アリサちゃんとすずかちゃん、おはよう」

「おはよ。それにしてもなのは、なんか楽しそうね」

「うん、だって新しいクラスだよ？楽しみに決まってるよ！」

「いっしょのクラスになれるといいね」

「うん！！」

わたしは親友のアリサちゃん、すずかちゃんと共に学校へ向かいました。

「なのはっ」

「みんな、おはよ～」

「フェイトちゃん、はやてちゃん」

学校に着くと、校門前にフェイトちゃんとはやてちゃんがいました。
どうやら、わたし達を待っていてくれたみたいなの。

「さて、クラス分けを見にいきましょ」

アリサちゃんの一声で、私達は学校の掲示板へと向かいました。

「うわっ、人が多いわね…」

「しょうがないよ、新学期なんだし」

掲示板前の人ごみを見て、アリサちゃんは凄く嫌そうな顔をしました。
わたしもあの中に突入する勇気はないの…。

「おっす、みんな」

と、わたし達が困っていると人ごみから1人の男の子が近づいてきました。

「海斗くん、おはよう」

「おはっ、今日もええ髪しとるのぉ、すずか嬢」

「あんた、すずかを口説いてんじゃないわよ!!」

「ツンデレええわぁ～、君のデレを見せてくれないか（キリッ）」

「きもっ！！」

「口の端がにやけとるよ、海斗君」

「はやて嬢か、……特になし」

「あ、ちょっとカチンときたわ」

「は、はやて、抑えて抑えて」

「フェイト嬢、結婚してください！！」

「えぇぇぇぇぇぇ！？」

「フェイトを困らせんじゃないわよ」ドゴッ！！

「ぐはぁ！！」

アリサちゃんに殴られた海斗君は、きれいに半円を描いて吹っ飛んだの。

痛そぉ～。アリサちゃんも手加減しないなぁ。

「大丈夫、海斗君？」

「…な…なのは嬢…すまんのぉ…」

海斗君は差し出した手に掴まり、なんとか起き上がりました。

海斗君は生まれたての子鹿のように、足をプルプルさせてる。

わ、笑っちゃ駄目っ、耐えないとっ。

「……なのは嬢」

「なっ、なにっ？」

柔らかな顔でわたしを見つめてくる海斗君。
けど下を見ると、足がプルプルしてるのっ。

「ありがと、なのは嬢（ニコッ）」

ゴッ！！！！

「「「「「あっ」」」」」

何故か私の拳が、前に突き出されていました。

「……なのは嬢、ジムに通ってみる気はないか？」

「うぅ、ごめんなさい」

あの後、復活した海斗君の額には大きな青あざが出来ていました。

「で、でもねっ、なんか海斗君の笑顔を見ると手が勝手に…」

「「「「わかる」」」」

「全員同意!?まあええけどさ」

「そんなことより、クラス分け見に行かない？」

「……フェイト嬢って、偶にワシの扱いがひどい」

しょうがないよ、海斗君だもん。

わたし達が掲示板の前に移動しようとすると、今度は別の男の子が駆け寄ってきました。

「おはよう、なのは（ニコッ）」

「あ、うん、おはよう」

来たのはクレス君。
キレイな金髪と中世的な顔立ち。
向けてきた笑顔は、なんだか絵になります。
けど、わたしは何故か寒気を感じました。

「なのは、今年は違うクラスだね……」

「やっ…！！」

「や？どうしたの、なのは？」

「や、やだね？べ、別のクラスなんて～」

「そうだね……」

危ないの…。
思わず喜びそうになっちゃった。
クレス君は寂しそうだけど、わたしはちょっと嬉しい。
だって、クレス君ってちょっと苦手だから。

「でも、なのはは他の皆と一緒だから安全だね。僕も昼休みとかはC組に行くから」

「え……。あッ!?うん是非!!」

昼休みも来る気なの…。
と、わたしが気落ちしていると、海斗君がクレス君に声をかけました。

「あんさん、ワシは何組やった?」

「なのは、何かあったら呼んでね?直ぐに駆けつけるから」

「あ、うん」

「なあなあ、だからワｓ「それじゃあ、そろそろ行くね?また後で」」

クレス君はそう言って、校舎へと歩いていった。
無視されていた海斗君は、へらへらしながら「もう慣れたわ」と言っている。
海斗君かわいそうなの。
そういうところが苦手なんだよ?クレス君。

「ほんま空気読めへんな～、クレス君は」

わたし達はクラス分けを見に行かず、教室へ向かった。
海斗君はクラス分けを見に行くらしい。
わたし達が確認しに行かないのは、単にネタバレされたから。
はやてちゃんも不満みたいなの。
他の皆も不満そうな顔をしている。
そうだよね。クラス分け確認するのも楽しみだったんだもんね。

「で、でも、またみんな同じクラスでよかったよ！」

場の空気に耐えられなかったのか、フェイトちゃんがわたし達に言った。

「そうだね、みんな1年間よろしくね」

「そうね、こんな空気じゃやってられないわ。みんな、またよろしく」

「よろしゅうなぁ」

「うん、また楽しい1年になるよ、きっと！」

私達は新たな1年に期待を寄せて、教室へと向かった。

教室に着くと、みんな自分の席を確認して席に着く。
わたしの席は窓側2列目の、後ろから2番目。
斜め後ろ、窓側最後尾には海斗君の名前があった。
同じクラスなんだ、海斗君。
他の皆は少し席が離れている。
わたしは自分の席に着くと、隣に目をやった。

どうやら隣は男の子ようだ。
席表には西野って書いてあったから、西野君か。
隣の席なんだし、仲良くなれるといいな。

わたしは西野君に話しかけようとしたが、一瞬踏みとどまる。
理由は、西野君の真剣な表情。
西野君は手に持ったファイルを真剣に見つめていた。
勉強かな?真面目なのかもしれないの、西野君は。
でも『極秘ファイル』って、なんなのかな?
知られちゃいけない勉強?
ううん、気になるぅ。

わたしは意を決して話掛けようとするが、またもや踏みとどまる。
というよりは、絶句して固まった。

だって、西野君の頬に一筋の涙が出来ていたから。

なんで泣いてるの!?
ううぅ、内容が凄く気になるのっ!!

「あ、あの!!西野君!!」

「……」

あ、あれ？もしかして無視された？
いや、きっと集中して聞こえなかっただけなの！！

「西野君！！」

「……」

ま、また！？
む、無視するなんて酷いの！！

「に、西野君！！」

わたしはお話するために、西野君が持っているファイルを取ろうとした。
そうすれば、話してくれるかもしれないから。
そして、ファイルに手が触れそうになった瞬間…

「触るな小僧ッ！！！！！！！！」

「にゃっ！！？？」

突然、大きな声を発した西野君に驚き、わたしは尻餅をついてしまった。
な、なんなの！？突然！？

「小僧…貴様は罪を犯そうとした…」

「わ、わたし、小僧じゃな「だまらっしゃいッ！！」ひぃ！！」

まるで、幽鬼のように立ち上がる西野君。
わたしは恐怖のあまり動けなくなっていた。

「これはなぁ、貴様のような薄汚れた小僧が触れていいものではない！！！！言わば聖典なのだッ！！！！」

「よ、汚れてないもん！！毎日お風呂入ってるもん！！！！」

「身体ではない！！心だッ！！！！」

「こ、心！？よ、汚れてないよ！？……たぶん」

「汚れてるねッ！！風呂のタイルのカビくらい！！！！」

「カ、カビ！？」

「ああ、そうだ。お前の心は根が深い汚れなんだ。落とせないくらい深いな」

「わ、わたしは汚れてなんか…」

「いーやッ、汚れてるね。人の持ち物に無断で触るとか、汚れている証拠。しかも人が見ている最中に」

「そ、それは西野君が…」

西野君が気づいてくれないからだよ…。

「仕舞いには人のせいか？とことん汚れてるな、お前」

「よ…よごれてないよぉ…」

「いや、きっとお前の心は茶色だ」

「き…汚なく…な…い…」

なんでだろぅ、すっごく苦しいの…。
なんでわたしがここまで言われなくちゃ…。

「汚い。そして席に着け。なんか目立ってる」

「きっ…グス…たなく…んっ…ないよぉ…グズッ…」

「ちょっ、泣くとか。しかし俺は動じない。きっと俺の心は鋼で出来ていた。そして去れ小僧、…いや、タイルの汚れ」

「ふぇっ、ふぇぇぇぇぇぇぇん!!」

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

なんか、目の前の女が泣き出した。
お前が悪いのに何故泣く?理解不能だ。
って、良く見ればコイツ高町なのはじゃん…。
俺は原作キャラを泣かしたのか?
やべぇ、チートなしで勝てたよ。

「あんた、なのはに何したのよ!!!!」

ここで現れるお仲間達。
全員、俺に敵意の視線を向ける。
って、なんか男混じってね？
こんな奴、原作にいたっけ？

「なのは！？大丈夫！？」

「ふぇ、フェイトちゃぁん…」

「お前、なのはに何をしたッ！！！」

今にも掴みかかってきそうな金髪ちゃん。
あれ？なんで俺が悪い事になってんの？

「俺は悪くない。勝手に泣いたのもそれだ」

「ちょぉ～まて、女の子をそれ呼ばわりか？」

「それ、悪人」

俺は高町を指差す。
だって本当だよ？
俺、悪くない。

「悪人って！？だから、なのはが何したって言うのよ！！」

「ちょお落ち着き、アリサちゃん」

狸がどうにかアリサをなだめている。

「で、なのはちゃんが何したって？」

狸は静かに訊いて来るが、絶対切れてる。

だって目が据わってるもん。

「そうだな…よし、そこの男子」

「なんや？」

「お前の大事なもんは何だ？」

「そら、エロ本や」

「エロ本か…やるなお前…。じゃあ、もしエロ本を見ている時に母親が入ってきて、エロ本を強奪したら？」

「切れる」

「だろ？こいつはそれをやろうとした」

「なッ！？ア、アンタが朝からそんな物、読んでるからいけないんじゃない！！」

「エロ本がそんな物とはなんじゃ！！」

「海斗君…少し黙ってよう？」

「あ……ご、ごめんなさい…」

「エロ本は例えだ。つまり大事な物を取られそうになった。説教したら泣いた。お前ら登場」

「え？大事な物取ろうとしたって本当なんか？なのはちゃん」

「べ、別に取ろうとはしてないよ？ただ、お話がしたくて…」

「話がしたいから強行手段か？どこの魔王だお前は？」

「なのは……」

フェイトを見ると、ちょっと引いてた。
苦労したんだな、お前。

「とりあえず俺は悪くない」

「まあ、確かに悪いのはなのはちゃんやな。そこは勘違いしとった、ごめんな」

「まあ、分かればいいんだけど」

「因みに大事な物ってなんや？」

さすが狸。さりげなく探ろうとしている。
くだらない物だったら、アリサ辺りが逆切れするんだろうな。
仕方ない、俺の平穏のためだ…。
ごめん、俺の宝物……お前を…人の目にさらす。

「……これだよ」

「『極秘ファイル』？なんやこれ？……ああ、言わんといていいわ。大体予想ついたわ」

「なっ！？あんたやっぱり！！」

「勘違いするな。中身はこれだ」

俺は極秘ファイルを奴らに見えるように開く。
中身は…

「絵？」

そう、中身は雪音が小さい時に書いてくれた、数々の俺の絵だ。
うまいとは言えないが、一枚一枚に愛を感じる。
これを見て、雪音に会えない時間を耐え抜く。
言わば俺にとっての強壮薬。
金には替えられない俺の宝物だ。

「これはな…昔、妹が書いてくれた絵なんだ…」

脳裏に浮かぶのは、雪音が小さい時に記憶。
まったく…気づいたらあんなに成長してやがって…。
兄ちゃんは嬉し悲しいぞ…。

俺は後に思う。
あの時の俺はどんな顔をしていたんだろう。

「……そっか。なんかごめんな…」

「いや、俺も言い過ぎたかも」

「はやて…。あたしも悪かったわ、ごめんなさい」

「気にすんな」

「わたしもごめんね。大切な物なんだね、それ」

「ああ、宝物だ」

「すまんかった、ワシも疑ってたわ」

「過ぎた事だ。エロ本で手を打ってやる」

「その……ごめん、疑ったりして。私も気持ちはよく分かるよ…」

お前妹いたっけ?姉さんじゃないの?

あ、シスコンってことか。

「ありがとう、君とは仲良くなれる気がする。良かったら、今度話をしよう」

まさかフェイトが妹の良さについて分かるとは…。

いや、お前は姉か。

「え…う、うん!!」

さて、最後は…。

高町を見ると、顔を青くして今にも泣きそうだった。

やっとお前も、この聖典の神聖さに気づいたか。

「わ、わたし…そんな大切な物を……ほ、本当にごめんなさい…」

しかしまぁ、謝られて許さない俺じゃない。

汝の罪、我が許そう。

「いいよ。俺も言い過ぎたしごめんな」

「…許してくれるの？」

「ああ、話がしたいのならいくらでも話してやる」

「……ありがとう。西野君のこと誤解してた…」

誤解？はて、なんのことだ？

「あの、西野君。その…良かったらお友達になってくれるかな？」

「だが断る」

「……え？」

魔王と友達とか一寸先は闇。むしろ地獄。

俺を堕とすつもりだろ。

騙されんぞ、ブルータス。

第2話　新クラス。魔王はマジやばい（後書き）

出ました！！
原作キャラと転生者2人。

補足ですが、ニコゴッ！！について。

海堂海斗の能力。
相手の目を見てマジで微笑むと、鉄拳が飛んできます。
海斗は常に笑っていますが、あくまでニコニコではなく、へらへらしているだけです。
なので、普段は発動されません

第3話　昼食。マジもんの厨二患者だ（前書き）

疲れた…。
眠いお。
けど、仕上げた。
僕頑張った。

第3話　昼食。マジもんの厨二患者だ

朝の事件。
強奪未遂犯が身内の弁護士を騙し、見方に引き入れた事件。
被害者までも仲間にしようとしたが、それを阻止。
しかし被告人は女の武器を行使し、被害者は嫌々友好関係を気づいた。
なお、この事件をＭＹＫＫ（魔王はやっぱり心が汚かった）事件と名づける。

そして、現在昼休み。
俺は魔王御一行に拉致られ、屋上へと連れて行かれた。

「神は私を見放したッ！！！！」

「なに言っとるん？弁当冷めるで」

屋上ってなんか叫びたくなるよね。

「音耶君、こっちこっち」

高町が隣を開けながら手招きしている。
つうか、いつの間にか名前で呼ばれてる。
さすが魔王。図々しい。
しかし、まさか魔王御一行と食事を取るなんて…。
どんな地獄の晩餐会になるのだろう。
あ、昼食だから昼餐会？

とりあえず高町と海堂の間に座り、鼻歌を歌いながら弁当を取り出す。

「なんだか機嫌いいね、西野君」

「今日の弁当が楽しみでな」

今日は奮発した弁当を持ってきたため、気分は最高にいい俺は、弁当箱であるタッパーを開いた。

「き～み～が～あ～よ～～は～」

「って、日の丸弁当やないかっ！！」バシンッ！！

いつの間にか後ろに移動していた八神が、ハリセンで叩いて来る。お前、絶対狙ってたろ。

「なあ、自分。なんでそんな弁当なんじゃ？」

「俺が日本国民だからさ。日本バンザーイ」

「で、おかずは？」

スルーされた。

「家計が苦しいから、おかずなんて贅沢な物はない」

主に雪音の食費で。

可愛いから許すけど。

事実を言ったら、なんか皆が暖かい眼差しを向けてきた。
やめろよ…照れるじゃないか。

「音耶、私のおかずあげるよ」

フェイトから、から揚げを貰った。
って、あんたも呼び捨てかい。
まあ、犬は飼い主に似るって言うしな。

「私のもお裾分けや」

八神からアスパラのベーコン巻きを貰った。
うむ、これは好きだぞ。

「わたしのも食べて」

月村から肉を貰った。
血肉にさせてもらおう。

「感謝しなさいよね」

アリサから、なんか黒いつぶつぶを貰った。
おそらくタピオカだろう。

「はい、音耶君」

高町から人参を貰った。
きっと、マンドラゴラだろう。

「ワシのも食ってなぁ」

海堂から、食べかけのハンバーグを貰った。

「高町、あーん」

「へっ!?あ、あーん…って、きゃあッ!!」パシンッ!!

ハンバーグは叩き落された。

「ワシのハンバアアアアアアグッ!!!!」

海堂が泣いた。

そんなこんなで続いた昼食は、ある者が現れる事によって終止符を打つ。

そいつは突然やってきた。

「なのはッ!!!」バンッ!!

突然響く重低音。

発信源はドア。

「うっ、クレス君…」

高町が嫌そうな顔をする。

その男は高町に近づくと、いきなり高町の手を握った。

「なのは!!良かった…無事だったんだね…」

「い、いきなり何?」

「なのはが暴行を受けたって聞いて心配したんだ!!頭がおかしくなりそうだったよ」

「へ、へぇ、そう…」

「で、誰なんだい?なのはに暴行を加えたクズは!?」

「暴行なんてされてないよ…」

「そんな訳ないだろ!?こんなに目を腫らして……んっ、見ない顔がいるな」

半狂乱になって叫ぶ奴と目があった。
やめて、そんなに見つめないで。

「んっんんっ!突然すまないね、君は?」

なんか人懐っこい笑みで見てくる。
今更遅いぞ。

「名乗る時は自分から。小学校で教わらなかったか?」

ピクッと、相手の眉が動いた気がする。

「そうだね、では名乗るよ。僕はクレス・レオンフォード、なのは達の幼馴染だよ」

金髪。
赤と青のオッドアイ。
クレス・レオンフォード。
僕…。

俺は優しくクレスの肩に手を置き、温かな目で見る。

「大丈夫。誰だって一度は通る道だから」

「…は？」

「金髪は染めたのかい？瞳もカラコン？偽名は出来るだけ隠したほうがいいよ。恥ずかしいから」

「き、君はいったい何が言いたい！！？？」

言ってしまうのか？
しかし相手が望んでいるんだ。心苦しいが、ズバッと言ってあげよう。

「厨二は卒業しなさい」

「「「ブフォッ」」」

アリサ、八神、海堂が吹いた。
笑うなよ、可哀想だろう。

「……き…」

き？

「…き、きさまあああああああああああ！！！！」

厨二病患者がいきなり殴りかかってきた。
速いが避けられる。
俺はしゃがんで紙一重で避けると、落ちていたハンバーグを厨二の顔面へ投げつけた。

ベチャッ！！

「あっ」

どうやら豆腐ハンバーグだったらしい。
見事に顔面に付着している。

「ぶぁっはははははははははッ、ははははッゲホッ、ゴホッヒィーーーーッ！！！」

なんか笑いすぎて過呼吸になってる海堂。

「…くくっ…あ、アリサちゃん…笑っちゃプクッ…だめだよぉ…」

「そう言うあんたこそ…クッ…」

「～～～～～～っ！！！」

「なのは…フフッ…笑いすぎ…」

「あんた、ええ芸人になれるわ、ククッ…ブハッ！！」

お前ら酷いな。特に高町。
あいつだって頑張ってんだぞ。

「き、きさまっ！！もう許さん！！！！」

怒り狂った厨二は、胸元から青い宝石のついたペンダントを取り出した。

「なっ！？あれは不味いで！！」

「レオンハート！！セットアッ「やめんかッ！！！」ッチ！！離せ！！！！」

厨二が変身しようとするが、海堂に押さえつけられ、宝石を八神に奪われる。
てか、あれってデバイスだよな。

「悪いけど西野君。このバカと話があるから席を外してもらってもええか？すずかちゃんたちも」

「わかった、がんばれよ」

「おおきに。頑張って説教したるわ」

俺たちは屋上を後にした。

階段の踊り場でしばらく雑談していると、屋上のドアが開き厨二が降りてきた。
俺の前まで来ると、俺を睨み付けてきた。

「絶対に許さないからな」

いや、ハンバーグを装備して凄まれても…。
厨二の間ではハンバーグが流行っているのか？

「てな事があったんだ」

「おにいちゃん…大変」

「つうか兄貴、そいつデバイス持ってたの？」

俺は本日の出来事を、夕食時に話した。
あの後、八神達から謝られ、後は特に何もなく帰宅した。
で、現在それを話している。

「ああ、レオンハートって厨二くせー名前だった」

「レオンハートって……兄貴！！もしかしてこの人か！？」

イガグリが服の中から雑誌を取り出す。
お前はヤクザにでも狙われているのか、イガグリ？

「兄貴これだよ！！これ！！」

「ふむ、どれどれ……最強の魔導師『クレス・レオンフォード』、あいつミッドでも偽名なのか」

「やっぱりこの人！？かぁーー！！すげぇ！！こんな近くにいたんだ！！」

「どんだけハイテンションなんだ、きもいぞイガグリ」

「だって最強だぜ！？俺、この人に憧れてんだ！！」

マジか。
頼むから厨二にならないでくれ。俺が恥ずかしい。

「つうかそれ、地球の雑誌じゃないよな？」

「ああ！！父さん達のお土産！！『月刊　魔導師』！！」

なんて分かりやすいタイトルなんだ。
って、おいおい魔王も写ってるぞ。

「ああこれ？この人は今話題のエースだよ。地球出身なんだって！！」

「エース？魔王じゃないのか？」

「魔王？なに言ってんの兄貴？」

「その人は見習っちゃだめだ。いつか、下僕Ｇって呼ばれるぞ」

「えーーー！？この人の砲撃に憧れてるのに」

「手遅れか…。雪音はいつまでも綺麗でいような」

「…うみゅ？」

胸が満腹です。

第3話　昼食。マジもんの厨二患者だ（後書き）

第４話　なまえをよんで。マジで名前なんだっけ？（前書き）

こんにちは、二足歩行犬です。

今回はかなりgdgdになってしまいました。

あと、１話くらいいけるかな？

第4話　なまえをよんで。マジで名前なんだっけ？

新学年になり1週間。
あの日から、やたらと絡んでくる魔王御一行。
俺の精神は魔王の微笑みでどんどん擦り減っていく。
否、現在進行形で擦り減っている。

「わたし、音耶君のお弁当も作ってきたんだ。良かったら食べて（ニコニコ）」

現在は昼休み。
場所は最近、新たなテリトリーとして使っている屋上。
食事時は皆の顔が見えるように円になっている。
そして俺は海斗と高町の間が定位置とかしていた。
実に不満だ。意義を申し立てる。

「なのはちゃんの手作り弁当か～。モテモテやな西野君」

「もぅ～～、そんなんじゃないよ～はやてちゃん」

「なんか最近嬉しそうじゃのぉ～、なのは嬢」

「あ、それ私も思った」

「食事（俺）を前にして喜んでいるんだろ？」

「そんなに食いしん坊じゃないもんっ」

「じゃあ、何かいい事あったの？」

「うん！最近クレス君の顔を見ないんだっ」

クレス君？……ああ、厨二か。
つうか高町。お前何気にひどいな。

「うわっ、ハッキリ言うわねぇ」

「なのはちゃん…」

見ろ、２人が若干引いてるぞ。
そこまで厨二が嫌いか、高町。

「そういえば音耶、今日はどんな弁当持って来たじゃ？」

「本日のメインディッシュは１０秒チャージ」

「よし、なのはちゃんの弁当もらっとき」

「あ、そうだった！はい、音耶君」

高町から青い包みを渡された。
中々重量のある代物だ。
微かに焼いた肉の香りが漂う。

「ひだりへ受け流す～～～～」

「おお！なのは嬢…ワシのために愛妻弁当を…」

「ちがうよっ！？それは音耶君の！」

「人肉は食えんとです」

「人肉!?ソーセージだよ、人肉じゃないの!!」

「ふむ、なら頂こう。海斗、お前に人間の食物はまだ早い」

俺は海斗から弁当を奪取した。
海斗は眉の下のダムが崩壊した。

「その…あまり美味しくないかも…」

「なに、人間の食い物なら食べる」

高町を横目に恐る恐る弁当を開く。
中身はミートボール、ソーセージ、卵焼き、ハム、レタス、プチトマト、フルーツと、意外と普通の弁当だった。

「UMAは出て来なかったか…」

「未確認生物扱い!?」

「しかし、何か可愛らしい弁当だな」

「あの、もしかして嫌だった…?」

「いや、正直助かる。死んでしまった豚に感謝して、いただきます」

「ピンポイントで豚かいな」

とりあえず、盛り付けたフルーツを一口。
ふむ、甘い。

「ちょっとあんた、普通デザート先に食べる？」

「甘いものはいちごミルク以外好かんとです」

「あっ、だからいつもダルそうなんだね」

「糖分不足って言いたいのか、このヤロー」

「音耶は嫌いなものは先に食べる派なんだね」

フェイト嬢は中々の観察眼を持っているようだ。
ふむ、では卵焼きを頂こう。

「……甘くない」

「お父さんが甘い卵焼きは苦手なの。だから塩を入れたんだけど…。
でもちょうど良かった、音耶君は甘いもの苦手なんだもんね！」

「そこに直れ、このヤロー」

「ふぇ？」

「いいか、甘くない卵焼きは卵焼きとは言えん。塩？アホかお前。
卵焼きを辱めるのもいい加減にしろ」

「えええぇぇぇえ！？」

「なんやコイツ、めんどくさっ！！」

甘くない卵焼きなんぞ、俺は認めん。

「音耶、この前のアレどうじゃった？」

食事も終わり、今は雑談タイム。

海斗が俺に話しかけてきた。

「アレか…。意外と良かったな。まあ、Ｍｙ　Ａｎｇｅｌには遠く及ばないが」

「そかそか、音耶はええ趣味してるのぉ」

「やめろよ、照れるじゃねぇか」

「……あんたら、何の話しとるん？」

「「なに…ってそりゃあ、…なあ？」」

「あんたらホンマ仲ええな」

まあ、話が合うしな。

主にあっち方面で。

「そういえば、いつの間にか名前で呼びあってるしね」

「親友じゃからな！！」

「切っても切れない仲だ」

「ふ～ん……ねえ西野」

「なんだアリサ？」

「あんた、なんでなのは達は苗字で呼んでるの？」

何を言ってるんだコイツは？
いきなり名前で呼ぶとか失礼だろ。
常識を勉強しなさい。

「なんかムカつくわね…。でも、あたしやフェイトは名前じゃない」

「え？」

「え」

「名前なの？」

「そうよ、フェイト・Ｔ・ハラオウンにアリサ・バニングス。名前じゃない」

「……」

「？」

「嘘だッッッッッッッ！！！！！！！！」

「きゃあっ！！」

「騙されんぞブルータス。お前の名前はバ…バ…バウィングだろ！！」

「バニングスよ！！それにバニングスはファミリーネームだわッ！！」

「ファミリーネームって……お前外人だったのか！？」

「ハーフよ！ハーフ！！金髪見れば分かるでしょ、普通！！」

「いや、てっきり厨二病患者かグれてるだけだと…」

「あんた…殺すわよ」

おー、怖い怖い。
しかし、まさかハーフだったとは。
最近、原作知識が無くなってきてるな。

「じゃあバニング「はぁ、アリサでいいわよ」…んじゃ、アリサ」

「なあ、もしかして西野君って私達の名前知らん？」

「なにを言う、早見優。これでも記憶力には自身あり」

「ネタが古いわ！！……じゃあ、私の名前言ってみ？」

「八神狸だろ？」

「たぬッ！？ちゃうわ！！八神はやてや、は・や・て！！」

「借金執事か…」

「あ、あれおもろいな」

「ああ、俺も好きだぞ」

「って、名前違いや！！」

うるさい狸だ。

カチカチ山再現すっぞ、このヤロー。

「もうええわ…。それじゃあ、すずかちゃんのフルネームは？」

「お前アホだな、自分で言ってるぞ。月村・すずか・チャン、だろ？」

「……アンタも相当アホやな」

「私は月村すずかだよ……」

「ｏｋ。記憶完了」

最近の名前はややこしいのが多いからな。

覚えるのも大変だ。

「音耶、私の名前は？」

「ああ、フェイトか…。お前の名前はインプットされてる。いい名だからな」

「え！？そ…そう？ありがと」

何故赤くなる？
事実を言ったまでだぞ。

「性がフェイト、名がテスタロッサ、字がハラオウンだろ？珍しいよな、今の時代まだ字を持ってるなんて」

「……？？？」

「フェイトは中国人じゃないわよ…」

フェイトは良くわからないみたいだ。
アリサはさすが優等生。
憧れも痺れもしねぇけど。

「冗談だ、気にするな。フェイトのフルネームはアレだろ、Ｆａｔｅ／ｔｅｓｔａｒｏｓｓａ　ｈａｒａｏｕｎだろ？」

「あ、うん。なんか違う気がするけどそれでいいよ」

「ちなみに私はバーサーカーが好きや」

「わたしはライダーかな？」

「ワシは兄貴や」

「お前らやるな。俺はアーチャー一筋。今度、はやてん家でバトろうぜ」

「おお、ええで。ってあんた、私の名前…」

「類友だからな。てなわけでよろしく、はやてとすずか」

「うん、よろしく」

「よろしゅう」

俺は仲間をゲットした。
いつか魔王の元から開放してあげよう。
と、クイクイっと俺の服を引っ張る何かがいる。

「あの、わたしも名前…」

「魔王だろ？」

「魔王じゃないよ！？」

いやいや、お前が魔王じゃなかったら誰が魔王なんだよ。
お前はラスボスだろ？
よくＲＰＧに出てくるだろ？

「音耶君…わたしのフルネームわかる？」

「わかるに決まってんだろ。何年一緒にいたと思うんだ」

「1週間や」

「音耶君…」

「魔界脊策魔物門脊椎魔物亜門人肉食網魔人目魔王科戦闘民属、高町なのはだろ？」

「なんか違うの！？」

「あんたって実は頭いいでしょ…」

「いいってよりは、頭の回転が速いだけなのかもね」

「ねえ、わたしも名前でよんで？」

「わかったよ、魔界脊「なのはっ」……魔お「なのは」……m「なのは」…」

なんだろう、高町の目から光がなくなっている。
遂に本性を現したか。
ここで選択肢を間違えるとＢＡＤ　ＥＮＤ直行だな。
俺は…

1．素直に名前で呼ぶ。
2．バトルを挑む。
3．魔法の呪文
4．脱ぐ

ふむ、とりあえず2は捨てるか。

勝てるわけないし。
4…は、社会的に死ぬな。
後は1と3か…。
なら選ぶほうは決まっている。

「高町…確かにお前は強い…」

「けどなぁ!!僕にだって守りたい世界があるんだッ!!!!」

「何言ってるの?」

「行くぞ!!俺の魔法の呪文を喰らえ!!!!」

「え!?魔法やて!?」

「なのは!!逃げて!!」

「すずか嬢!アリサ嬢!ワシのそばから離れるな!!」

「え!?ちょっとどういうことっ!?」

「まさか西野君も!!??」

「これで俺は最強となる…さよならだ高町…」

俺は右手を前に突き出し、左手を右手首に添えた。
高町はどうやら混乱しているようだ。

「行くぞッ!!!!」

「「「「「なのは（ちゃん）（嬢）！！！！」」」」」

「ゆうて　いみや　おうきむ　こうほ　りいゆ　うじとり　やまあ
きらぺ　ぺぺぺぺ　ぺぺぺ　ぺぺぺ　ぺぺぺぺ　ぺぺぺ　ぺぺぺ
ぺぺぺぺ　ぺぺッ！！！！！！」

「「「「「「へ？」」」」」」

なんか皆、面食らった顔をしている。
なんでやねん。

「これで俺のレベルは４８だ。最後くらい抗わせてもらう」

「あ、あの…音耶？」

「俺は音耶ではない。もょもとだ！！」

「じゃあ、もょもと。今のなに？」

「復活の呪文だ」

「復活の…呪文？」

「知らないのか？」

俺は驚き、フェイトへと身体ごと振り返る。
アレを知らないなんて。
これだから現代っ子は…。
俺が時代の変化について考察していると、突然背後から強烈な寒気が襲ってきた。

「ねぇ…音耶君…」

振り向いちゃだめだ！振り向いちゃだめだ！！振り向いちゃだめだッ！！！！

しかし、振り向いてしまうのが人間の性。

後ろには目が逝ってる魔王がいたとです。

「音耶君……なまえをよんで…」

ドクンッ！！

な、なんだ！？この胸の鼓動は！？

身体は全身鳥肌なのに、心が熱くなっていくだと！？

まさか……恋？

次週『真剣で魔王に恋しなさい！！』

なんてね。

こんな状況でも、冗談を言える俺の心はきっと鋼で出来ていた。

「ねえ？音耶君…？」

「…なんだ？」

「なまえを…よんで？」

「だが断ｒ「なまえをよんで」…いｙ「なまえをよんで」…ｋ「なまえをよんで」……神は私を見放したッ！！！！」

「さあ、なまえをよんで？」

「……なの…」

「聞こえないよ？もっと大きな声で…」

「な…なの…」

「うん、あと少し…」

「なのっ」

「なの？」

「ナノインパクト！！」

後の俺は言った。

弁当箱は鈍器にもなる。よい子は真似しないでね。

「なあ、因みにワシの名前は？」

「何言ってるんだ？お前には名前なんてないだろ」

「……え？」

第5話　翠屋。マジ笑えない（前書き）

今回は、突撃翠屋！！

さよなら、音耶君…。

君はきっと死ぬ。

第5話　翠屋。マジ笑えない

『喫茶　翠屋』
別名　戦闘民族の巣窟。
数々の人間を破壊、蹂躙してきた戦闘民族の村。

「あそこだけは近づいてはならん……近づくと引き込まれるぞ……
ああ…わしの妻も…あやつらに…クッ…ばぁあさあああああああ
あああああああああああんッ！！！！」

って、じいちゃんも言ってた。

近づいたら死。
そんな場所に俺はいた。
俺も好きでいるわけではない。
あれは昨夜のことだっだ…

～回想・昨夜～

「さてイガグリよ、雪音は寝たか？」

「ああ、今は寝床でぐっすりさ」

場所は海鳴市に存在する一軒の家。
そこのリビングで今、重大な会議が起ころうとしていた。
出席者は二名。
真っ暗なリビングではテーブルの上に置いたケータイだけが、妖しい光を放っていた。

「さて、イガグリよ。今回の議題…わかっておるな？」
碇ポーズで尋ねる俺に、イガグリも碇ポーズで答えた。
「ああ、明日の事だろ？」
「ふっ、分かっているではないか。そう、明日は……」
「「『雪音、初めてハイハイしました記念日』」」
「って、やっぱり必要なのこれ？」
イガグリは立ち上がり、リビングの電気をつける。
雰囲気は大事だと教えたはずだが？
ちっ、これだから野郎は。
「で、兄貴。明日の記念日って必要なの？」
「当たり前だろう。妹が成長を遂げたという素晴らしい記念日。家族なら当然祝うだろ」
「俺のは無いんだけど…」
「野郎は知らん」
何言ってんの、このイガグリ。
お前がハイハイできたくらいで祝わんわ。
「で、イガグリ。問題はプレゼントを何にするかだ」

「やっぱり食べ物じゃない？」

「それには同感だ」

「あ…そういえば、姉ちゃんがこの前言ってたんだけど…」

「ｋｗｓｋ」

「なんか、翠屋ってとこのケーキが食べたいって言ってたよ」

「ふむ、ケーキか…祝いの場にはぴったりだな。しかも雪音が御所望ときた。決まりだな、今年のプレゼントはケーキだ！！」

「じゃあ、兄貴買って来て。俺は出前頼みまくるから」

「よし、では今回の議会を閉幕する！！」

～回想終了～

「ミスった。あの時、気づいていれば」

俺が思い出したのは、ここに着いてからだった。

俺としたことが…なんてミスを。

しかしなんだ？結構、普通の喫茶店だな。

はっ!?騙されるな。
これはきっと罠だ。
平凡を装いながら店内は謝肉祭、酒池肉林、人肉取引…。
クソッ!!さすが魔王の家族。汚いぜ。

しかし俺は行かなければならない。雪音のために。
絶対ケーキを持って帰るからな。
たとえ四肢が無くなろうとも。
だから、俺を見守っていてくれ雪音。

いざ……出陣!!!!!!!

「いらっしゃいませ～!!」

むっ、意外と挨拶も普通だな。
てっきり「ギャキュウヒョアガヒヒヒヒッキシャーーーーーーッ!!!!!」かと思った。

「お1人様ですか?」

なんかメガネが話しかけてきた。
しかも疑問系。
お前には、俺のほかにも人が見えるのか?

「1人です」

「かしこまりました。カウンター席でよろしいですか？」

「はい」

「ではこちらにどうぞ」

通されたのはカウンター席のど真ん中。
なんとなく辺りを見回す。
店内には俺以外の客がいない。
店内に1人って、ちょっと優越感。

「いらっしゃい」

と、店の奥から若い男が出てきた。
この人は覚えてるぞ、士郎さんだろ？

「ちわっす」

「今日は一人かい？」

「ええ、まあ」

「そういえば、その制服。ウチの娘と同じ学校なんだね」

来ると思ったよ、その質問。
しかし面倒な事に巻き込まれたくないので、ここは他人のふりをしよう。

「へー、そうなんすか？偶然ですねー」

「ははっ、そうだね。それで、ご注文は？」

「コーヒー、ブラックで」

「おっ、渋いね。少々お待ちは」

「甘いもんは苦手っすから」

「そうか。そういえばうちの娘、高町なのはって言うんだけど知らないかな？」

「聞いたことはありますね。なんでも聖祥五大美女だとか」

「ほう、そんな噂をされているのか。はい、コーヒー」

「ども、……うまいっすね。こんなの生まれて初めてだ」

「そりゃあ、ありがと」

マジでうまい。おそらく今までで一番。

なんか、ここの店に通いたくなる味だ。

「そういえば君……名前は？」

「阪東っす」

ここで本名を出すほどバカじゃない。

呪術に使われんのもやだしな。

「阪東君に聞きたい事があるんだけど、いいかな？」

「なんなりと」

「君……西野音耶君って知らない？」

「知りません。聞いた事もありません。妖怪かなんかですか？」

「人間だよ。最近娘が事あるごとに、音耶君音耶君と話していてね。この前なんか手作り弁当を渡したみたいだよ。ははは」

士郎さん、笑いながらグラスを握り締めないでください。ヒビ入ってますよ。

こりゃあ、さっさと用事を済ませるべきか。

バレたら挽肉にされそうだしな。

「マスター、お土産用にケーキ２０個包んで貰えます？」

「２０個！？凄い量だね…」

「うちには大食いがいるんで」

「そうか…。種類は？」

「適当にお願いします」

俺がそういうと、士郎さんは奥に消えていった。

「あの…なんすか、これ？」

「サービスだよ、うちの娘が作ったんだけどね。味は大丈夫。ちょっと甘いけど」

俺の目の前には少し大きめのケーキ。
見た目はショートケーキだ。
つうか士郎さん、俺さっき甘いの苦手って言いましたよね？
とりあえず、残すのも悪いので一口。

！？甘えええええええ

とりあえずサムズアップしました。

「…え!?お父さん、まずくないって!!」

「良かったな、美由希」

ほのぼのしんじゃねぇよ。
こっちは地獄との瀬戸際だっての。
さすが、高町家。
やる事が汚い。

「…クソッ…甘えよ…甘すぎるよ…」

「お、お父さん!!私のケーキで涙を!!」

「……よかったな、美由希」

ごめん雪音…。
兄ちゃんは逝くよ…。

「クフォ～…しょっぺえ…甘じょっぺ～よ…」

「しょっぱいのは君の涙だ」

先程から、約３０分。

俺の死闘はまだ続いていた。
半分残るケーキを見て、更に涙が溢れ出す。
もう…ゴールしていいよね…。

と、その時…死にそうな俺に、天の声と地獄行き決定の声が聞こえた。

「ちぃーーーす!!」

「ただいま、おとうさん」

「「こんにちは」」

「おかえり。海斗君とフェイトちゃんとアリサちゃん、いらっしゃい」

魔王御一行が帰ってきた。

「ってあれ?音耶君!?来てたんだ!!」

「……音耶…君…?」

俺、終了の合図。

「って、こいつ泣きながらケーキ食べてるわ!?」

「どうしたの、音耶!?」

「うぼぉおおおおおおおおおお」

「すまん。何言ってるかさっぱりわからん」

「なになに？ケーキが甘い、死んじゃう？」

「分かるんか！？フェイト嬢！？」

「え？分からないの？」

「普通わかんないわよ」

いいから助けてぉ。

俺が助けを求めていると、高町がケーキのホイップを指で掬い取り舐めた。

「甘っ！？おとうさん！！これ凄く甘いよ！？」

「やっぱりか…」

「おとうさん、まさか味見は？」

「すまん、する勇気がなかった」

「もう！！大丈夫、音耶君！？」

「ぼぉぉぉぉぉぉぉぉ」

「えっと…じいちゃんが手を振ってる…」

「音耶君！？死んじゃだめぇ！！」

こうして俺は死……なずに開放してもらえた。
この時だけ、高町が天使に見えた。
この時だけ。
大事な事なので2回言った。
ちなみに、ケーキは高町印のゴミ箱へ消えた。

「ううん、ごめんなさい…」

メガネが頭を下げてくる。
本当に申し訳なさそうに謝っている。

「だが許さない」

「ええ!?」

「冗談だ。しかし高町、助かった。あのままだったらきっと、地獄行きの片道切符を買うところだった」

「こっちこそごめんね。2人が変な物食べさせちゃって…」

「ああ、私からも謝罪するよ」

「いえ、別にもういいですって」

さて、色々あって少し長居しすぎたかな。
そろそろ帰るとするか。

「じゃあ、俺は帰るんで」

そう言ってを背を向けると、何故かガシッされた。
犯人は……あなたですね、士郎さん。

「少し君と話があるんだ…西野音耶君」

「俺はありません」

「ははははっ、私にはあるんだよ」

「あなたは俺に、細菌兵器入りケーキを食べさせました」

「それはすまなかったね。けどそれとこれとでは、話は別だ」

俺は首根っこを掴まれ、引きずられてく。
高町と目があった。
助けを呼んだ。

「なまえをよんで」

ま・た・そ・れ・か。
しかし、背に腹は変えられない。
オーケー、取引成立だ。

「行けなのは!!滅びのバーストストリーム!!」

「それはできないの」

あっ、引っ張る力が強く。
もう無理ぽ…。

なんとか助かった俺は、ケーキを受け取り帰宅した。
ケーキを雪音に渡したら、凄く喜んでくれた。
兄ちゃん冥利に尽きる。

後日、俺は高熱を出し寝込んだ。
やはり、あのケーキは兵器だった。

第5話　翠屋。マジ笑えない（後書き）

士郎さんってこんな感じだっけ？

う～ん、よくわからん。

第6話　学力テスト。マジで語ろう（前書き）

まさか、もう1話仕上げてしまった…！！

がんばった俺。しかし明日学校。

電車で一時間…。

どうして遠い大学選んだんだろう…。

今回は長くなるので、2つに分けました。

しかも今回の前編は、異常に会話が多いです。

第6話　学力テスト。マジで語ろう

五月。
梅雨の季節。
または、うつ病増加の季節。
新しい環境に疲れた者たちがダメになる季節。
ここ、聖祥中学の生徒も例外ではなかった。

「欝や……死のう…」

「欝じゃぁ……死のう…」

「欝なの……死ぬの…」

「なのはが死ぬなら死のう…」

「……なんだこれ…」

いつもどおりの朝。
学校へ登校すると教室がホラーと化していた。
多くの生徒がテーブルに突っ伏し、死ぬ死ぬ連呼している。
魔法少女3人とアホも欝っていた。
うつ病の感染率は高いらしい。覚えておこう。

「で？どういう状況だこれは？」

俺は後ろのほうで呆れた顔をしているアリサと、心配そうな顔をしているすずかのもとへ向かった。

「あっ、おはよう、音耶君」

「おはよう、音耶。見ての通りよ」

「見て分からないから聞いてるんだが？」

「うつ病に罹ったらしいのよ」

「うつ病？いつも、はな垂れ坊主のように元気なこいつらが？」

「音耶君、いいすぎだよ」

すずかに注意された。
しかし魔王までも罹るとは意外だ。
何があった？聖水でも浴びたのか？

「原因はあれみたいよ」

アリサの指差す先には、一枚のプリント。
『第１回　学力テスト』と書いてあった。
なるほど。アレのせいか。

「うう、絶対赤点なの…」

「歴史が…」

「全部やばいわ…」

「右に同じじゃぁ…」

「休みすぎだ。お前達が悪い」

そう。こいつらは良く休む。
理由は知ってるが、俺には関係ナッシング。
管理局に入ったお前らが悪い。
海斗については知らんが、おそらくコイツも管理局員だろう。

「すずかちゃん、助けて～～」

「自業自得なのに人に縋るとか。その図々しさに脱帽」

「いいよ、勉強見てあげる」

「すずかの人の良さにも脱帽」

「ありがとぅ～！！すずかちゃん！！」

「はあ、仕方がないわね…。あんた達！！今週の日曜は図書館で勉強会よ！！」

どうやらこいつ等は休日も勉強するらしい。
やる気のある奴らだ。
敬意をはらってこの言葉を贈ろう。

「ガンバッッッ！！！！」

「あんたも参加ね」

何故だ。

時は過ぎ日曜日。
場所は図書館、自習室。
幸い俺達以外に、人はいないようなので存分くつろげる。

「さて、お前達。パーティーステーションポータブル、略してＰＳＰは持ってきたか？デビルハンターやるぞ。爆弾の貯蔵は十分か？」

「って、なんでアンタはゲーム持ってきてんのよ！！」

「あ、アリサちゃん……実はわたしも…」

「すずかまで！？」

さすが類とも。
図書館でやることを良くわかっている。

「俺とすずかは狩りに行ってくるから、お前ら勉強な。なに悔しがるな、これが平民と貴族の違いさ」

「いいからあんたも手伝いなさいよ」

「だが断る。さあ、すずか、狩りの時間だ」

「ごめんね、わたし勉強見てあげないと」

「お前もかあああああああああっ、ブルゥゥゥゥウウウタァァァァアアアアスッ！！！！」

「うっさいッ！！！！」ドゴッ！！

理不尽だ。

「なあ、そういえば音耶君は勉強しなくてええんか？そんな頭良くないんやろ？」

1人寂しくＰＳＰをピコっていたら、狸が聞き捨てならないことを言いやがった。

「はん？頭が悪い？現代のピカソと言われた、この俺が？」

「いや、それ芸術家やから」

「ふむ、俺に向かって頭が悪いと言った狸に問題だ」

「……頭かち割ったろか？」

「トゥルンッ！！問題、鎌倉幕府はいつ出来たか？」

「１１８５年やろ？簡単や」

「え？」

「え？」

「お…おう、正解」

「あんたも勉強追加」

何故だ。

「ううん、歴史がまったく分からない…」

勉強会に追加され３０分。

フェイトが音をあげた。

忍耐力の無い子。お前は忠犬のはずだろ？

ハチ公見習えや。

「記憶するだけだろ？」

「それが出来れば苦労しないんだけど…」

「そういえば自分の好きなものに例えると、覚えやすいって聞いた

で?試しにほら、本能寺の変を想像してみ」

「本当?えっと…私の好きなもの……」

~フェイトの愉快な頭の中~

巨大な寺の前に、馬に跨ったある男がいた。
名は海堂海斗。
後に有名となる武将である。

「皆のもの!!敵は本能寺にあり!!行くぞッ!!!!」

海斗の一声で大勢の兵が、本能寺を包み込もうとした。

「……クソっ…ここまでなの…」

燃え盛る寺の中、1人の女が今窮地に立たされていた。

「まさか海斗君が……ここまでやるなんて…」

思い浮かぶは彼が部下だった時の記憶。
しかしそれも過去。
今は現実を見なければ。
だが、現状は変わらない。自分はきっと殺されるだろう。

「しかしこの、高町なのは!!決して敵になど殺されないのッ!!

！！」

なのはは、短刀を取り出し正座する。
そして息を大きく吸い込むと、その短刀を……。

～妄想終了～

「なのはあああああああ！！！！！」

「にゃ！？」

「ど、どうしたんじゃ急に！？」

「海斗、お前は絶対に許さないッ！！！なのはを返せえええええええええええッ！！！！！」

「え？ちょ、えグフォオオオオオオオッ！！！！！」ズドンッ！！！！

「フェ、フェイトちゃん！？どうしたの！？」

「え……な…のは？」

「うん、なのはだよ」

「な…のは……なのはあああああああ！！！！！」ガシッ！！

「にゃわ！！く、苦しいよ、フェイトちゃん…」

「良かった、無事で、なのは、なのは！！」

「一体なんなの～～～～！！」

「アホだな」

フェイトは正気を取り戻すと、顔を真っ赤にして海斗に謝った。
海斗は「ええんじゃ」と言ってフェイトを撫でた。
次の瞬間、海斗は宙を待っていた。
不思議だ…。
ナデポならぬナデゴッ！！か？

色々あったが勉強会は再開された。
俺はなのはと勉強していたが、なぜかアリサに追い出された。
アリサ曰く「あんたがいると、なのはが集中できないの。ほら、バカ2人に混じって勉強してなさい」
理不尽だ。

「そういう訳で、この部署へ配属された、西野音耶軍曹であります」

「よう来たな、音耶軍曹。私は部隊長の副官をしとる、八神はやて少佐や」

「そしてワシは部隊長の、海堂海斗大佐じゃ」

「よろしくおねがいします」

「ふむ、さっそくじゃが、この部署についての説明をする。八神少佐」

「はい。この部署は、女体に関する考察を主に担当しております。世界には様々な女体が存在しますが、我々は数ある女体の内、どれがいかに素晴らしい女体なのかを選定するために、設立された部署であります」

「ふむ、ご苦労じゃ。理解できたかの軍曹？」

「はっ！私は素晴らしい部署に配属されたのですね」

「ええ、ここより上はあらへんよ」

「では、さっそく今回の議題を発表する。今回は『巨乳の素晴らしさについて』じゃ」

「意義ありッ！！」

「ふむ、発言を許す」

「はっ、巨乳の輝きなどほんの一瞬。言わば流れ星のような物。将来は垂れます！」

「意義あり！」

「発言を許す」

「その一瞬の輝きが、美しいのではあらへんのか？確かに垂れるかもしれへんけど、それは昔、輝いていた証拠です。なので私は巨乳を推します」

「はんっ！将来垂れる物になんの意味がある」

「……何が言いたいんや、軍曹？」

「私はペチャを推します」

「何を言う、揉めない乳などに意味はあらへん！！」

「垂れるよりはいい！！」

「静粛にッ！！！ここはもめる場ではないぞ？」

「「すみません」」

「ふむ、では軍曹の意見から聞こうかの」

「はい。私はあくまで巨乳を否定します。巨乳など、少女には不釣合いです」

「ふむ、しかし今はそういう需要もあるのだろ？」

「それは堕ちた者たちの意見です。彼らは忘れてしまっている、少女はナイチチという教えを…」

「ひとつええですか？」

「なんじゃ、八神少佐」

「先程から少女と言う言葉を耳にしますが、まさか軍曹はロリコンですか？」

「なッ！？ロリコンって言うやつがロリコンなんだッ！！」

「図星のようやね。音耶軍曹はロリコンっと…」

「違う！！あくまで父性本能だ！！」

「ほお。……軍曹、取引せぇへんか？」

「取引？……何ですか？」

「我が家にはヴィータっちゅう娘がいる。軍曹の好きなロリロリや」

「ふんっ、それがどうしました？」

「しかもツンデレ属性。私にはデレるんやけど、そらぁ可愛ええで～」

「なっ…つ、ツンデレロリ…だと？」

「ああ、しかもその娘はちょっと特別でなぁ、なんと……エターナルや」

「！！？？……おお、神は存在したのか…」

「どや、会ってみたいか？」

「ふふっ、負けたよ少佐。取引成立だ」

「あんがとうな、軍曹」

「しかし、何故そこまで巨乳を？」

「乳は私にとって全てなんや…」

「素晴らしい…そこまで…」

「いや、あんたのペチャに対する気持ちもよう伝わったわ。これからは手を取り合おうやないか」

「はっ、どこまでも着いて行きます少佐！！」

「うむ、決まったようじゃのぉ。では、判決『乳に上下関係なし！！全て平等！！』じゃ」

「「異議なし」」

「うむうむ、ではこれで議ｋ「あんた達……何してる訳？」っく！総員撤退！！ワシもｎ「何処行くの？海斗君」す、すずか嬢…」

「あかん！！部隊長が捕まった！！はよ逃げｒ「はやて、逃げちゃだめだよ」ふぇ、フェイトちゃん…」

「八神少佐ッ！！」

「来たらあかん！！軍曹は逃げえっ！！そして、世界に乳の良さを！！！！」

「く、くそおおおおおおおおッ！！！」

「頑張ってな、軍曹。私は世界中の乳を愛し、そして、世界をｔ「なに言ってるの？はやて」ちょ、辞書はあかんてっ！フェイトちゃん！！」

「ありがとう少佐。あなたのお陰で大切なものに気づけた。だから、俺は貴方の想いを世界にッ！！？？」

「何処行くつもりなのかな？音耶君」

「魔王か…。しかも目に光が灯っていない。バーサーカーモードか……最悪だな…」

「魔王じゃないの。なのはだよ」

「悪いがここは通らせもらうぞ。少佐の想いを無駄には、ッグハァ！！」

「逃がさないわよ…」

「辞書は反則だろ……って、お前は！？魔王の配下、四天王が１人、金髪緑眼炎の守り手、アリサ・バーニング！？」

「……」

「ふっ、どうやらここまでみたいだな…。すみません少佐…。約束…守れませんでした…」

「「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩよ（なの）…」」

この日、３人の命が散った。
しかし彼らの想いは、きっと誰かの胸に残っているだろう。

続く！！！！

第6話　学力テスト。マジで語ろう（後書き）

音耶君はロリコンのようです（笑）
本人は否定してますけどｗｗｗｗ

しかし、今回の話の後半。
はやてと海斗と音耶で、凄くやりたかった話なんですよね。

ちなみに作者はロリコンではありません。

第7話　学力テスト2。マジでやればモーマンタイ（前書き）

今回は後編です。

書くのに1時間半かかった…。

一日一話が限界かな？

頑張れば二話行けるかも。

第7話　学力テスト2。マジでやればモーマンタイ

海鳴市の惨劇から早1時間。
時刻は昼。
俺たちは某ファミレスへと来ていた。
ファミレスはいいよ。安いしくつろげる。

「のう音耶、ワシがピンポン押してええかの？」

隣に座る海斗がガキっぽいことを言ってきた。
因みに席は4人がけ席をドッキングさせた、簡易8人席だ。
席順は窓側が、海斗、俺、はやて
通路側はフェイト、なのは、すずか、アリサとなっている。

で、話を戻すが海斗が実に子供っぽい事を言ってきた。
ピンポン…それを押せば店員が駆けつけて来るという、画期的な機械。
幼稚園児、小学校低学年に絶大な人気を誇るボタンだ。
しかし、俺たちは中学生。
そんなボタンなど興味ないわ。

「と、引き下がる俺ではない。ピンポンは俺が押す」

「嫌じゃ、ワシが押す」

「黙れ。そのボタンはお前にはまだ早い」

「嫌じゃ！！ワシが押す！！」

「ダメだ、俺が押す」

「ワシじゃ！！！」

「俺だ」

ピンポ～ン

「「あ」」

「あ、あれ？もしかして押しちゃだめだった？」

「いや、ナイスよフェイト」

「ボタン１つで恥ずかしいの」

俺たちが聖なるピンポンを取り合っていると、あろうことか金髪忠犬フェイ公が押しやがった。

「～～～！！フェイト嬢のバカッッ！！」

「きっとお前の心はヘドロで出来ていた。そして泣くなバカ、きもい」

「そういう音耶君も、目に水が溜まってるで」

「いや、これは心のあｓ「おまたせしました。ご注文はお決まりですか？」喋ってる途中に入ってくるとか。いったいどうゆう教育をされてる、店員？」

くそっ、ちょっと可愛いからって許されると思うな。
ドリンクバー制覇すっぞ、このヤロー。

「すみません、こいつらは気にしなくていいです」

「は、はぁ」

「えっと、ドリンクバー7つ。あたしは、たらこスパゲティで。すずかは？」

「わたしも同じものを」

「私は日替わりランチお願いします」

「私はサンドイッチで。なのはは？」

「わたしは、おろしハンバーグで。あとランチセットBお願いします」

「そちらのハンバーグは人肉ですが、よろしいでしょうか？」

「はい…って、何言ってるの！？音耶君！？」

「はい、って言ったよこの人。あ、俺リブステーキ、ランチセットAで」

「か、かしこまりました。…あと、当店は牛肉ですので…」

「そんなこと分かっている。ジョークも分からんのか？今時の店員

は」

「す、すみません！！」

「あの、本当にこいつは気にしないでください…」

「は、はい。ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「はい、お願いｓ「ワシがまだじゃ！！」いたのか虫」

「虫！？まあええわ。ワシはえびグラタン。えびとマカロニ抜きで」

お前もう帰れ。

「さあ、アリサとはやて、ドリンクバーを持って来い」

「自分で行きなさいよ！！」

「何を言う？端に座った奴はドリバ係りだろ」

「聞いた事ないわよ！！もういいわ、はやて行きましょ」

「ええよ、なのはちゃん達のも持って来るわ」

さすがはやて、良くわかってる。

アリサとは大違いだ。

「ありがと、はやてちゃん。わたしはコーラお願い」

「私もコーラで」

「わたしは紅茶をお願いしていいかな？」

「俺はｋ「わかった、ほな行って来るわ」お前もか、少佐」

信じてたのに裏切ったな、少佐。

仕方ない、行って来るか。

「おい虫。おまえのも持ってきてやる」

「まじか？なんじゃ、音耶最高じゃな…。目頭が熱くなってきたわ…」

「親友だろ？で、何にするんだ？」

「親友……。なんでもええわ…親友の持ってきたもんなら何でも飲んじゃるッ！！」

「任せろ。心を籠めて注いできてやる」

こうして俺はドリバコーナーに向かった。

親友のためだ、一肌脱ぐか！！

「で、なんじゃこれ？」

「ミックスジュースだ」

俺は親友のために頑張った。
親友の目の前には、七色に光る飲み物が置いてある。
これを作っていた時は、周囲の目が凄く痛かった。

「色々ミックスしすぎじゃろ！！」

「ミックスジュースだからな」

「うわぁ…さすがにやりすぎなの」

魔王御一行は可哀想な眼差しを、海斗に向けている。

「お前、親友の作ったもんなら飲むって言ったよな？」

「け、けど…これはあかんて」

「飲むよな？」

「くう…ええけん！！飲んじゃるわ！！」

海斗はグラスを勢い良く持ち上げ、立ち上がった。
やる気だな、こいつ。
そんなお前に、敬意を籠めてこの言葉を贈ろう。

「お前にレインボー！！！！！」

「あ、あれ名作やな」

海斗は逝った。

その後は普通に食事を取り、再び図書館自習室。
海斗？
ご想像にお任せします。

「ねえ、アリサちゃん。ここ分からないだけど…」

「ああ、ここは…」

「すずか、ちょっといいかな？」

「うん」

「すずかちゃん、私もええか？」

「……」

皆、黙々と勉強をしている。
さすがに危機感が湧いたか？
1人だけ顔色がゾンビになっているが。

しかし、あれだな。
人が真面目に何かをやっている時って、邪魔したくなるよな？
なるだろ？
よし、邪魔しよう。

～音耶ｉｎアリサ＆なのはコーナー～

「捗ってるか？」

「音耶君。うん、まちまちかな」

「あんた、何しに来たのよ？邪魔するなら、あっち行ってなさい」

「失敬な奴だな。俺も手伝いに着たんだよ」

ふむ、なのはは国語が苦手か。

日本人として恥だな。

「俺も国語は得意だ。なんでも聞いてくれ」

「ありがとう。じゃあ、この文の尊敬語の部分なんだけど……」

「孫・圭吾？」

「え、うん。尊敬語」

孫・圭吾？

中国人か？いや、圭吾は日本人だよな。

孫はきっと、三国時代に活躍した孫家のことだよな。

じゃあ、圭吾は？

やっぱ日本人だよな…。

孫…三国時代…日本人…圭吾…

…はッ！？まさか……。

よし、答えは導き出された…。

「なのは、答えがわかった」

「本当？教えてもらってもいい？」

「ああ…。孫・圭吾…三国時代に呉軍で活躍した武将で、孫家の１人。孫権の弟であり、日本人とのハーフ。享年３７歳。若くして病でこの世を去った、悲劇の武将……。わかったか？」

「意味わかんないわよッ！！！！」

追い出されました。

何故だ。

～音耶ｉｎすずか＆フェイト＆はやてコーナー～

「うぃ～す」

「……何しにきたん？」

なんだ、その帰れって目は？
俺は邪魔などせんよ。

「ああ、お前達に勉強を教えにきた。アリサとなのはには好評だったぞ？」

「ほんまか？アリサちゃんの怒声が聞こえた気がするんやけど…」

「怒声じゃない喜声だ」

「音耶、ここ分かる？」

フェイトが見せてきたのは、社会の教科書だった。
『第一次世界大戦』
戦争か？けど、第一次？
第二次が最初じゃないの？
けど、一ってついてるしな…。
知られざる戦争ってことか…。

「ふむ～…」

「やっぱり、わからない？」

「ん～…戦争…第一次…知られざる戦争……はッ！？」

「わかったんか？」

「…第一次…聖杯戦争…」

「なんやて！？」

「え？あ、あれ？」

「聖杯戦争がどうかしたの？」

「すずかか…。聞いてくれ、過去に第一次聖杯戦争が行われていたらしい…」

「えっ！？」

「まさか、現実で行われていたんか…」

「じゃあ、時期的にそろそろ第五次聖杯戦争が？…」

「ああ…、既に始まっているかもしれない…」

「「ッ！？」」

「ね、ねえ…三人は何話してるの？」

「すまんな…フェイトちゃん。今は勉強どころの話やないんや」

「そうだね、戦いは既に始まってるんだよ…」

「それで？2人はこれからどないするん？」

「俺は遠坂家に行く。アーチャーに無限の剣製を習いたい」

「わたしは桜ちゃんの所かな？助けてあげたいし」

「私はイリヤの所や。バーサーカーの漢気に惚れた」

「全員別々か…」

「悲しいね…」

「仕方あらへん…。これも聖杯のためや…」

「ッ！？見ろ！！海斗が！！」

「なッ！？海斗君！！」

「生気を感じられない…。まさか…キャスターが？」

「柳桐寺か！キャスターめ…」

「皆、予定変更や。柳桐寺に行くで」

「うん、海斗君の仇を…」

「ああ、よし！柳桐寺に行くぞ！！キャスター、海斗のｋ」ガッ！！

なんか、ガッ！！された。
後ろを向いてはいけない気がする。
けれど向いてしまうのが人の性。

「おお…まさかアリサ…、お前がアヴェンジャーだったとはな…」

片手に何故か俺のバックを持った、アリサもといアヴェンジャーがいた。
笑顔だが眉がピクってるぞ。

「だが捕まるわけには行かぬ。俺は海ｔ「あんた、もう帰れ」意義を申し立てる」

帰されました。
何故だ。

時は過ぎ、月曜日。
今日は学力テスト。
勉強を頑張った奴が報われる日。

「さて、今日は学力テストよ。皆、気合入れなさい！」

ホームルームで担任の三十路が話している。
と、なぜかフェイトが手を挙げた。

「どうしたの？ハラオウンさん？」

「あの…海斗が来てないんですけど…」

そういえばいないな。
なんだ？昨日のミックスジュースで腹でも壊したか？

「ああ、海堂君ね。海堂君は昨日、急性胃腸炎で倒れたらしいわよ。
3日ほど入院だって。皆も気をつけさい！」

ま・じ・か。

そして、テスト返却日。
俺たちは放課後、翠屋に来ていた。
士郎さんは意外と俺に対して普通だった。
別にブルってた訳じゃねぇよ？

席に着きケーキやら飲み物を頼んだ。
俺は勿論コーヒーだけ。

「さて、テストの結果を発表し合うわよ！！」

ケーキや飲み物が運ばれた後、アリサが今回集まった目的を口にした。
因みに海斗は復活し、後日テストを受けた。

「あたしは平均９２点！！赤点は勿論なしよ！！」

「「「「お～！」」」」

「じゃあ次はわたしだね。平均９１点。アリサちゃんに負けちゃったな」

「「「「お～！」」」」

「次は私だね。平均７０点、赤点は回避できたよ。ありがとう、すずか」

「うん。おめでとうフェイトちゃん」

「次はわたしなの。平均５２点、赤点なし！ありがと、アリサちゃん！」

「どういたしまして。次は、はやてよ」

「私は微妙やな。平均４６点。赤点はなかったわ」

「ま、赤点がないなら良いじゃない」

「そうだよ、はやて。……海斗に比べればマシだよ…」

「言わんといて！？フェイト嬢！」

「……あんた、そんなにやばかったの？」

「……平均１２点…。全教科赤点や……」

「「「「うわぁ～」」」」

「ワシなんか、笑えば良いじゃろうが！！」

「ははははははははははははッ！！！！」

「ほんまに笑うん！？」

「で？そこで優雅にコーヒーを飲みながら笑ってる奴。あんたは何点よ？」

アリサがニヤニヤしながら聞いてくる。
俺が赤点だらけだと思っているな。
しかし甘い！甘すぎるよアリサ君！！

「ほら、高貴なる点数だ」

俺は鞄から答案用紙を取り出し、机に放り投げる。
理科の答案用紙が、海斗のケーキに刺さったが気にしない。

「えっと…国語９８点！？」

「数学１００点なの！？」

「社会は９８点！？」

「英語は８８点や！」

「理科は９６点じゃ…化け物じゃ！！」

「えっと……平均９６点っ！すごいね、音耶君」

「どうせ中学生程度の問題。真面目にやればモーマンタイ」

俺の一言で何人かが崩れ落ちた。
中卒とは違うのだよ、中卒とは。

第7話　学力テスト2。マジでやればモーマンタイ（後書き）

意外と頭が良い音耶君。

所詮、中学生の問題だから。

これが高校の問題になると、おそらく赤点があります。

そして海斗。ドンマイッ！！

番外編　海斗の過去（前書き）

こんにちは！

今回は海斗の過去についてです。
過去といっても、原作組との出会いについてですが。

因みにギャグは少なめです。

それと皆様にご報告！！

今日、なんとなくアクセス数を見たんですが、見た瞬間、驚いてコーヒーを吹きそうになりました（笑）

なんと、ＰＶ１３万突破！！ユニーク１５０００突破！！しかも、お気に入り９００件突破！！

うぅぅぅひゃっほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！！！！！！！

まさか執筆４日目で、ここまでいくなんて思ってもいませんでした！

これも皆様のおかげです！！
本当に応援ありがとうございました！！

これからも、精一杯精進していきます！！

番外編　海斗の過去

やあ、こんちゃあ！！
ワシの名前は海堂海斗。またの名をダブルシーじゃ！！
かっこええじゃろ？

「お～いっ、海斗～いつまでも寝てんじゃね～ぞ～」

おっ、姉御がお呼びじゃ！
急ぐかの！

「はよ、姉御」

「お～、さっさと飯食っちまえよ～」

この人はワシの姉御。
ワシが言うのもなんじゃが、中々の美人じゃ。
ただ、２４歳になっても彼氏が出来ない可哀想な姉御じゃ。

「海斗～……殺すぞ」

「なんでじゃっ！？」

「いや、なんかバカにされた気がした」

感が鋭い怖い姉御じゃ。
くわばらくわばら。

「じゃあ、先に行くからな～」

「気張ってなぁ～」

朝、ワシより早く家を出る姉御。
目的は出勤。あれでも一応まじめなんじゃ。
ワシは学校へ行く準備をするため、一度部屋に戻る。

『おはようございます、マスター』

「おはっ、カラミティ！！」

部屋に入ると、ワシのデバイスであるカラミティが挨拶しとうくれた。
こいつは父ちゃんから譲り受けた、インテリジェントデバイスじゃ。
堅っ苦しいが、良い奴じゃ。

『マスター、早くしてください。遅刻は許しませんよ』

ただ、母ちゃんみたいな奴じゃ。

「ちょっと待ってな。今ふたりに挨拶するわ」

ワシの机の上に置いてある両親の写真。
毎朝、挨拶するのが日課じゃ。

「母ちゃん、父ちゃん、行ってくる。今日も見守っててなぁ」

挨拶を終えると、早速学校へ向かう。
今日も1日頑張るかの!!

「虫、春巻き寄越せ」

「虫!?まあええけど。ってもう食ってるんじゃ!?」

昼休み。
いつもの場所で、いつものメンバーと昼食をしている。
最近は1人メンバーが加わって、一層賑やかになったんや。
名前は西野音耶。
不思議な奴で、なに考えてるかようわからん。
けど面白い奴で、今やワシの親友じゃ!

「なあ、私気になってたんやけど、海斗君はなんでこのメンバーにおるん？」

……え？

つまり、ワシは邪魔だと…？

何故じゃ…目頭が熱くなってきたわ…。

「おい狸。なに虫を泣かしてんだよ」

「ちょ、ちょおまちぃ！そういうことやなくて、海斗君が何でなのはちゃん達と、仲がいいのか気になって！」

「あっ、それ私も思った」

「せやろ？全然タイプ違うやんか、なのはちゃん達と」

「言われてみればそうだな。魔王と虫だから、食う側と食われる側だしな。全然タイプが違う」

「ひどい！？わたし虫なんかたべないの！！」

なのは嬢との出会いか…。

懐かしいなぁ、確か9歳の頃やったっけ？

「聞きたいんか？なのは嬢との出会い」

「うん、聞かせてほしいな」

「そか、なら少し長くなるで？」

「なら、言わなくていい」

「聞いてやっ！？」

あれはワシが9歳の頃…

「おいおい、なんか語りだしたぞ、この虫」

～海斗・9歳～

「はあ、今日もつまらんかった…」

ワシは、最近お気に入りの神社へと来ていた。
神社の裏手にある大木に腰を下ろす。
姉御が帰ってくるまでは、いつもここにいた。

両親がこの世を去ってから1年。
ワシは抜け殻のような生活をしていた。

「こんなことなら、転生なんぞしなければよかったのじゃ…」

そう、ワシは転生者じゃった。
事故死したはずのワシは、いつの間にか何もない空間にいて、神とか名乗る爺さんに会った。
爺さんは、ワシを転生させてくれると言った。
転生先は『魔法少女リリカルなのは』の世界。

ワシはそういう知識が無かったため、原作など分からなかった。
そして神の爺さんはワシに、2つの能力をくれると言った。
だからワシは、
『守れる力』と『ニコポとナデポの能力』が欲しいといった。
『守れる力』は、ワシは原作介入するつもりが無かったので、最低限自分だけは守れるように、この能力を選んだ。
結果、ワシは結界やら防御やらの魔法適正が非常に高く、今や結界魔導師として魔導師登録されている。
『ニコポとナデポの能力』は、まあ、若気の至りじゃ。
けど、あの時はまさか、こんな変な能力に変えられるんなんて、思ってもなかったのぉ。

そんなこんなで転生したワシは、ミッドで幸せに過ごしておった。
管理局員の父ちゃんと母ちゃん。同じく管理局員で、おっかないけど優しい姉御。
父ちゃんからはライフルによる射撃技術を、母ちゃんからは魔法を教えてもらった。
おかげでワシは7歳で管理局員となり、天才などと言われていた。

けど、局入りから1年。事件は起こったのじゃ。
とあるロストロギア捜索任務を父ちゃんと母ちゃんが受けた。
しかし捜索の途中、偶々違法魔導師の組織と遭遇してしまい、母ちゃんと父ちゃんは殺された。
ワシにとって、衝撃的な出来事じゃった。

それからワシは心を閉ざしてしまい、姉御はワシを心配して管理局をやめた。
ワシも管理局をやめて、姉御と静かに暮らす事にした。
そしてここ、海鳴市へとやってきた。

海鳴市へとやってきて1年。
ワシは姉御のお陰で、ここまで精神的に回復した。
けれど、なぜか毎日が昔のように楽しくない。
理由は分かっとる。
2人の死という事実を、まだ受け止められてないんじゃ。
1年も過ぎたのに前に踏み出せないなんて、ほんまワシは弱虫じゃ。

「ワシはどないすればええんじゃろ…」

ため息をついた、その時だった。

「ッ!?魔力反応!?」

突然、神社内で大きな魔力反応を感知した。
ワシは驚きながらも急いで表へ周った。
したら、あらびっくり。めっさデカイ犬っころがいたんじゃ。
しかも女の子に襲いかかろうとしている。
ワシは即座に魔法を使った。

「チェーンバインドッ!!」

土色のチェーンが犬っころを縛りつける。
女の子は突然の介入に驚いたのか、その場で呆けていた。

「はよう逃げえ!!」

ワシの言葉で我を取り戻した女の子は、否定するように首を振り、
なんやリリカルマジカルなんていい始めよった。
ちょっと笑ってしもうたのは内緒じゃ。

その女の子はなんや魔導師らしく、速攻で封印魔法を使った。
犬っころはミニサイズに戻り、一件落着した。
と、女の子がワシに近づいて来た。

「あのっ、ありがとうございました！！」

「気にしなくてええんじゃ。君、魔導師よな？」

「え？魔導師？」

「え？」

女の子の事情を聞くとどうやら、この子はできたてホヤホヤ魔導師らしい。
しかも、つい最近まで一般人だったらしい。
なんやってそんな子が、魔法を？
答えは、大体フェレットのせいらしい。
とりあえずフェレットを地面に叩き付けてやったわ。
当たり前じゃろ？
何、一般人巻き込んどるんじゃ。

「仕方ないのぉ、ワシも手伝ってやるか」

「えっ！？いいんですか！？」

「ああ、こう見えても凄腕の結界魔導師じゃっ！！」

「あ、僕も結界魔導師です」

なんやて。

～回想終了～

「これがワシとなのは嬢の出会いじゃ」

ワシは魔法の事を隠して、大体の経緯を話した。

「ほ～、中々衝撃的な出会いやな」

「それでその後、色々あって仲良くなったんだよね」

「せや、アリサ嬢とすずか嬢に会ったのも、なのは嬢に紹介されてな」

「しかし、暗い虫か…。想像できねぇな」

「確かにあん時は暗かったのぅ。ま、なのは嬢見てたら吹っ切れたけんど」

「それわかるよ、なのは見てると和むよね！！」

「百合は黙ってろ」

「百合!?違うよ、私は……」

フェイト嬢が必死に抗議している。

しかし、あれから4年かぁ。
ほんま色々あったわ。

なのは嬢の手伝いをしたり…
アリサ嬢とすずか嬢に出会ったり…
フェイト嬢と戦闘したり…
そういえばクレスと出会ったのも、そん時やったな。
たしか、アースラに乗ってた管理局員だっけ?
そんで、フェイト嬢の母親が逝ったり…
フェイト嬢と和解したり…
ほんま色々あったわ…。

「フェイトちゃんは、ほんまなのはちゃんＬＯＶＥやなぁ」

「も、もう!はやてまで!!」

そういえばはやて嬢と出会ったのも、その後じゃったな。
守護騎士との戦闘…
はやて嬢との出会い…
防衛プログラムとの戦闘……あっ、確かあん時はムカつくことがあったな。
皆が頑張ってる時に、いきなりクレスが出てきて防衛プログラム破壊したからなぁ。

あん時のドヤ顔はウザかったわぁ。
今まで一度も手伝わんかったくせに。ひとりだけいいとこどりやで？
マジむかついたわぁ。

「おい、虫。お前も百合犬に何か言ってやれ」

「また虫！？フェイト嬢」

「海斗、私百合じゃないよね！？」

「……百合もアリじゃっ！！」

「海斗まで！？」

色々大変なこともあったけど…

母ちゃん、父ちゃん、ワシは今幸せじゃ！！！！

第8話　厨二襲来。マジで帰れ小僧（前書き）

死んだ…。
明日からバイト4連勤…。
冗談抜きで死ぬぉ…。

第8話　厨二襲来。マジで帰れ小僧

新学年になり、早1ヶ月。
学力テストという戦場を乗り越えた兵士達（生徒）は、思うがままに学園生活を満喫していた。
それは、我がクラスも例外ではない。

「アリサちゃん、がんばれー！！」

「バニングスさん、ファイトー！！」

「西野、気張れやああ！！」

「高町さんだけは守れぇ！！」

ドッジボール。
遥か昔、世界を侵略した悪魔達が考え出したゲーム。
捕まえてきた人々に、生を賭けてやらせた魔の球技。
アウトになった者から殺されるという、残酷な遊び。
それがドッジボールだ。
我々はオリエンテーションで、その忌まわしき闇のゲームを行っている。
チームはクラスを半分に分けた総力戦だ。

「ど、ど、どうしよう！？音耶君！？」

「どうするんじゃ？音耶」

「とりあえず、絶体絶命だ」

現在クラスのほとんどの者が死んでしまい、我がチームで残るは俺、なのは、海斗の三人だ。
はっきり言って不安で仕方がない。
対して相手チームはアリサ、フェイト、すずかという運動神経抜群の3人娘だ。
はやて？
ああ、あそこで応援してる奴？

「さあ、もう諦めなさい！あんた達じゃ私達に勝てないわよ！！」

「諦めたら試合終了、って安西先生が言ってた」

バーニングアリサが何か言っているが気にしない。
そう、諦めたら試合終了だからな。

「だったら死になさい！！」

「ちっ、魔王！今こそ覚醒の時だ！！」

「ええ！？」

くそ、魔王は役立たずか…。
と、アリサがボールを投げてきた。
狙いは…魔王か！！

「きゃあああ！？」

「なのは嬢！？」

「ちっ！聖なるバリア、ミラーフォース！！」

「え？ちょっ、音耶なにｓゴフォォッッッッ！！！」

なのはに迫っていたボールを、海斗が身を挺して防いだ。

海斗…良くやった…お前は虫の中の虫だ！！

「お、音耶君？」

「何、気にするな。女を守るのが男の使命だ。お前は俺の後ろに隠れていろ」

「～～～～！？音耶君……」

そんな見つめんなって、照れるじゃねえか。

さて、尊い犠牲を払ってここまで来たんだ。

絶対に負けられん！！

「アリサ、一騎打ちだ」

「ふん、かかってきなさい！！」

「残念だがお前の負けだ。俺のショットは１０８式まである！おおおおおおおッ！！！」ビュンッ！！

「くっ！！」バシッ！！

と、止められた…だと…。

俺の１０８式が？おいおい冗談はやめてくれ。

「ふふっ、全然ちょろいわよ！！」

「くっ！C組のモビルスーツは化け物か！？」

「意味がわかんない、わよッ！！」ビュンッ！！

「音耶君！？」

俺に狙いを定めてきたか！？
しかし、遅すぎる遅すぎるよアリサ君！！

「ローリングッッ！！」

「え…きゃん！！？？」バコン！！

「「「「「あ」」」」」

「……何故魔王が俺の後ろにいる」

「あんたが隠れてろって言ったんでしょ！！」

言ったっけ？

「なのは、大丈夫？」

「ううっ…鼻がいたいの…」

「反省はしている。しかし後悔はしてない」

「してよ！？」

昼休み。

ボールにキッスしたなのはは、そのまま気絶してしまい保健室へと運ばれた。

戻ってきたのはいいんだが、今だ鼻を押さえている。

まったく、軟弱な奴だ。

「まったく、アリサが本気で投げるから…」

「あんたが避けたんでしょ！！」

「うわっ、人のせいとか。親の顔が見てみたいわ」

「あ、あんたねぇ…！」

「まあまあ、アリサちゃん落ち着きい。なのはちゃんも大事なくてよかったなぁ」

「せや、ワシなんか食い物が喉に通らへんで？」

「海斗君、病院行った方がいいよ」

そんなこんなで、いつも通りほのぼのしている時、事件は起こった。

「なのはッ！！！！」バタン！！

突然、教室のドアを乱暴に開いた大きな音。
そして、魔王を呼ぶ大きな声。
振り向くと…

「ま・た・お・ま・え・か」

厨二がいた。
厨二はものすごい剣幕で、なのはに詰め寄る。

「なのは、大丈夫かい！？大怪我をしたって聞いたんだけど！？」

「く、クレス君！！近い近いっ！！」

「ああ…無事そうでよかったよ…。ッ！？なのは、鼻が赤くなってるじゃないか！！？？」

「こ、これは、ボールが当たって…」

「ッ！？なのはの顔にボールがッ！？」

「ちなみにコイツのせいや」

「ちょっ、余計な事を」

キモイほど心配する厨二に、狸が余計な事を言いやがった。
厨二はホラーばりに首をグリンッして、俺を見てきた。

「また貴様かッ！いったい貴様は何がしたい！？」

「生きていたい」

「「ぶはっ！」」

おい、何故笑う、狸と虫。

「貴様ッ！また僕を馬鹿にしてぇ！！」

「俺はいつだって真剣だ」

なんかもう厨二の顔が放送禁止になっている。

「大体貴様は何なんだ！！何故なのは達と一緒にいる？！」

「俺に聞くな。俺は被害者だ」

こいつらが俺に付きまとうんだ。
いや、別にいいんだけどね。
何気に話合うし。
けど、魔王はちょっと…。

「なのは！何故こいつと仲良くしてるんだい！？」

「えっと、友達だからだよ？」

「ッ！？友達…だって？」

厨二は驚きに満ちた表情をしている。
お前あれだよ、きっと顔芸で食っていけるよ。

「友達……ッ？！…そうか、貴様もなのはを…」

何1人でブツブツ言ってんの？
はっ！？これも厨二特有の症状か！

「おい貴様」

「なんだ厨二？」

「っち！本当にムカつくやつだな…。まあいい…貴様は、なのはが好きなのだろう？」

「にぁ！？」

ｗｈａｔ？
ナノハガスキ？
おいおい、冗談は厨二病だけで勘弁してくれよ。

「貴様はなのはが好きだからこのグループに近づいた。違うか？」

「全然ちげぇよ。なんだお前、頭でも湧いてんのか？」

「はっ！それは僕の台詞だ。煩悩にまみれた俗物が」

「あ？てめぇ人の話聞いてたか？ちげぇって言ってんだろ」

「言葉ではそう言っているが、中身はどうなんだろうね？に・し・

の・君」

あ、今のはイラッてきた。
大体なんなのコイツ。いきなり出てきてペチャクチャと。
シューズの中にクワガタ入れとくぞ、このヤロー。

「あれ、図星かい？」

「てめぇ、人が黙ってれば言いたい放題言いやがって。なのはが好き？はっ、誰が魔王なんか好きになるか。自ら魔王の下僕になるほどMじゃねぇんだよ。つうか、なのはの事を好きなのはテメェだろ？もしかして俺への嫉妬で、今まで絡んできたのか？うわっ、男の嫉妬とかマジきめぇ。大体、俺が魔王を好きになるなんてありえねぇんだよ。俺が愛する女性は雪音だけだ。雪音マジカワユス。つうかお前、魔王に好かれてぇなら厨二卒業しろや。てめぇが近くにいるだけで恥ずかしい思いをするってわかんねぇのか？さすが頭沸いてる厨二だな。そんな事もわからないなんて。わかったらさっさと失せろ。てめぇが近くに居っとk「ちょ、もうええやん！！ストップストップ！！」……ちっ」

「ふ、ふん！貴様が何を言おうと、僕は騙されないぞ！！」

「あ？まだわかんねぇのか？」

「ちょお落ち着きいや、音耶君！！確かにコイツがうざったいのは、ようわかるけど！！」

「言っておくが、君になのはは渡さないからな！！なのはは僕のものだ！！」

そう捨て台詞を残して、厨二は教室から去っていった。
つうか、なのはは僕のもの、だって。
マジキモす。

「……魔王も災難だな。あんな奴にす……何故泣いている」

振り向くと魔王が泣いていた。
しかもマジ泣きだ。

「ふぇっ…グス…えぐっひくっ…」

「音耶君、いいすぎだよ…。なのはちゃん可哀想…」

「アンタ最低ね」

「ストレートに、お前にチャンスなど存在しない、って言われたも同然じゃからな」

「なのはを泣かせたなのはを泣かせたなのはを泣かせたなのh…」

何故、俺が悪者になっている?
つうか、忠犬フェイトがやばい。

「自分の胸に聞いてみい。そういえば、音耶君の言ってた雪音って誰や?」

「ワシも気になっとったわ。愛する人言うてたもんな」

「雪音は俺だけの聖女だ」

「いや、わからへんから」

「ふむ、雪音は愛しい愛しい妹だ」

「え？アンタの妹さんって亡くなったんじゃ…」

「勝手に殺すな。現在進行形で元気だ」

「「「え？」」」

何故驚く。

「はあ…今日は本当に面倒だった…」

現在俺は、マイホームのリビングに居る。

結局、いつまでも泣き止まなかった魔王に、俺はＤＯ☆ＧＥ☆ＺＡをした。

マジで理不尽だ。

「おにいちゃん…」

おお、Ｍｙ　Ａｎｇｅｌ雪音。
俺を癒してくれるのか…。
とりあえず雪音を膝の上にセットする。
甘い香りが俺の心を癒してくれる。
逝った時のネロのような気分になった。

「おにいちゃん…社会のテスト…百点だった…」

「お、良く頑張ったな。今日は雪音の好きなもの作ってあげるよ」

「……やた」

ああ、マジかわゆす。
一生雪音に抱きついていたいぉ。

その時、ケータイの着信音がなった。
誰だ、俺の至福の時間を邪魔する汚物は。
ケータイを開き、ディスプレイを恨めしく見る。
ディスプレイに出ている文字は、
『半狸（早く狸になりた～い）』だった。

ピッ

「汚物は消毒だぁ！！ヒャッハーーーーーーー！！！」

『ちょっ、世紀末とか』

「で、何のようだ？」

『いきなり普通になったな。突然やけど明日暇？』

「暇じゃない。雪音を一日愛でないと」

『よし、暇やな。明日私ん家で鍋パーティーするから、よかったら参加せえへん？勿論妹さんも連れてきてええで』

「全ての判断は雪音に委ねる。雪音、狸が話たいって」

「狸さん…？」

「ああ、狸さんだ」

俺はケータイをスピーカーモードにして、雪音に近づける。

「……こんにちわ」

『ああ、妹さんやな？こんにちわぁ』

「狸さん…？」

『たぬッ！？音耶君…後で覚えときぃ…。雪音ちゃん、狸ちゃうで。はやてさんや』

「覚えてたらな」

「はやて…さん？」

『せや。それでなぁ、明日鍋パーティーするんやけど、よかったらウチに来いひん？』

「鍋……食べ放題？」

『うん、たんまりあるでぇ』

「……行く」

『そか、ほな待ってるわ。じゃあ、兄ちゃんに代わってもらってもええか？』

「……うん」

俺はスピーカモードをオフにして、再び耳に持ってくる。

「てな訳で、明日参加な」

『わかったわ。それにしても音耶君』

「なんだ？」

『雪音ちゃんの声たまらんなぁ。まさにＡｎｇｅｌ　ｖｏｉｃｅや』

「よし、肉は俺に任せろ」

『え？あ、おおきに。ほな、また明日な』

「おお」

ピッ

「雪音、明日は鍋パーティーだ！」

「…わーい」

可愛いなぁ、雪音は。

しかし狸よ。良くわかってるじゃないか。

第9話　鍋パーティー。マジで幼女だ（前書き）

こんにちわ、二足歩行犬です！！

皆様には様々なご感想をいただき、本当に感謝しています。

その中でも多かったのが、なのはフラグについてです。

なので、補足として説明しておきます。

なのははまだ、音耶君のことが気になってるだけです。

まだなのは自身、好きという気持ちに気づいていません。

泣いたり構ってもらおうとしているのは、あくまで音耶君にボロクソ言われたり、もっと音耶君を知ろうとしているからです。

なので、なのはは『まだ』純粋な少女です。

なのはについての詳しい事は、近々予定している番外編にてご確認ください。

では、本編へどうぞ～。

第9話　鍋パーティー。マジで幼女だ

土曜日。
本日は八神家の鍋パーティーへと、ご招待されました。
で、現在リビング。

「お前達！鍋は食いたいか！？」

「おーーーー！！」

「おー…」

「よし、いい返事だ！！イガグリ、肉は持ったか！？」

「うっす！！」

「雪音、今日も可愛いぞ！！」

「…おにいちゃんも、かっこいい…ぞ…」

「ヒャッハーーーーー！！気分は最高潮だ！！イガグリ、今の時間は！？」

「2時っす！！」

「2時だな！迎えの人との待ち合わせの時間は！？」

「1時半っす！！」

「完全に遅刻だ」

「どうすんだよ兄貴！？」

「お前が素振りしてたから遅れた」

「兄貴だって姉ちゃんとイチャイチャしてたろ！！」

「雪音分を補充してただけだ。なー？」

「…なー」

「もう！早く行こうぜ兄貴！！」

「うむ、これ以上待たせるのも悪いか。では、出陣だ！！」

俺たちは迎えの人との待ち合わせ場所である、図書館へと向かった。

「さて、この辺のはずなんだが…」

図書館に着いた俺たちは、目的の人物を探している。
はやてから聞いた話では、迎えに来る人はピンクの髪をしたボインさんらしい。
きっとニート侍のことだろう。

「なあ兄貴、あの人じゃない？」

隣にいたイガグリが指差す先には、ベンチに座り目を閉じたピンクボインがいた。
一見、落ち着いた雰囲気で座っている。
だが、俺にはわかる。
あいつは切れている。
だってオーラがパネェっすもん。

「イガグリ、確認して来い」

「え、俺が？やだよ」

「いいから行け。何か言われたら「とりあえず、そうっすねｗｗ」って応えとけ」

「だから俺はや「素直な男子はモテるらしいぞ？」オーケー。俺に任せな！！」

ふむ、俺らは傍観させてもらおう。
逝って来い、イガグリ。

「あの、すんません」

「む？貴様が西野音耶か？」

「とりあえず、そうっすねｗｗ」

「遅れてきた者の態度とは思えんな。貴様、今何時か分かっているのか？」

「とりあえず、そうっすねｗｗ」

「……からかっているのか？」

「とりあえず、そうっすねｗｗ」

「主はやてから聞いていたが、本当に度胸のある奴だな」

「とりあえず、そうっすねｗｗ」

「どうやら私の剣の錆になりたいようだな？」

「とりあえず、そうっすねｗｗ」

「ほう、ならばその望み叶えてやろう」

「とりあえｚって？！なんで木刀もってんすか！？あ、やｍがあああああああ！！！」

「で、本物の西野音耶だ」

ボコボコにされるイガグリがあまりにも不憫なので、仕方なく姿を現してやった。
ピンクボインは心なしか肌がツヤツヤになっている。

「ああ、分かっている。先程まで物陰で見ていたろ？」

む、さすがニート侍。
まさか俺に気づいていたとは。

「しかしコイツは一体誰なんだ？」

「イガグリ紫音。俺の愚弟だ」

「本当に変な奴だな。普通、家族が殴られたら怒るものではないか？」

「コイツは痛いのが好きなんだ」

「そ、そうか」

ピンクボインが、紫音に可哀想な眼差しを向ける。
ドンマイ紫音！君の評価はガタ落ちさ！！

「では自己紹介しよう。私はシグナムだ」

「西野音耶とは俺の事だ」

「……雪音…」

ふむ、やはり雪音は恥ずかしがり屋さんだな。
だが、そこがいい！！

「では八神家へと案内しよう。着いて来い」

「うい。おら、さっさと起きろやイガグリ」ドゴッ！！

「あう！？はッ！？ここは一体？」

イガグリも起きたようだし、さっさと行くか。
俺たちは、ピンクボイン改めシグナムの後を追った。

「主はやて、ただいま戻りました」

「主はやて、ただいま戻った」

「主…はやて。ただいま……戻り…ました…」

「主はやて!!ただいま戻ったっす!!」

「おかえりシグナム。いらっしゃい音耶君、雪音ちゃん。で、あんたは誰やイガグリ」

「イガグリじゃないッ!坊主だ!!」

「似たようなもんやろ。で、あんたは誰や?」

「西野紫音!!兄貴の弟だ!!」

「ぶはっ!ちょっ、坊主なのに紫音とかっｗｗ」

「笑ったな!俺だって恥ずかしいんだよ!!」

「まあ怒んといてな。歓迎するで紫お、っぶはッ!!ｗｗ」

「いつまでも笑ってんなや、狸」

「ああ～、久々にこない笑ったわ。みんな改めていらっしゃい」

こうして八神家に着いた俺たちは、狸に歓迎されてリビングに通さ

れた。
リビングに入ると、そこには…

「あっ、シグナムおかえり。随分遅かったな」

幼女がいた。

「くっ！実際目にすると、なんて破壊力だ！？」

「変なことしたら怒るで？ヴィータ、紹介するわ。こちらが西野音耶君。そんで妹の雪音ちゃんに、弟の紫音くんや…ククっ…」

「ああ、はやての言ってた奴？あたしはヴィータ、よろしく」

「…よろ」

「よろしく！！」

「……」

「？？どないしたんや、音耶君？」

俺の目の前には幼女がいる。
気の強そうな目に、背伸びしたかのようなしゃべり方。
ツンデレ幼女か！？
ああ、八神家のモビルスーツは化け物か！？
これは……愛・で・な・く・て・わ！！

「ぬぁ～、なんだお前かわゆいなぁ～」

「あっ、頭を撫でるな！！」

「お菓子食うか？アイスもあるぞ？」

「アイス！？食う！！」

「そかそか。ほら、ハーゲン〇ーツだ」

「おお、これギガうまだよな！なんだお前、いい奴だな！！」

「ありがとよ、俺のことは音耶って呼んでくれ。または兄ちゃん、にいにいでも可」

「そうか、よろしくな音耶！」

「ああ、よろしくヴィータ」

いつかヴィータの兄になりたい、今日この頃。

「こっちがシャマルで犬の方がザフィーラや」

「よろしくね～音耶君」

「……」

「ああ、よろしく。しかしあれだな。デカ犬、お前無愛想だな」

「…ッ！？」

「デカ犬やのうて、ザフィーラや」

「……わんわん」

「こんなデカイ犬はあまり見ない。お前アレだろ？もののけ姫に出てたよな？」

「……」フルフル

俺の問いに犬は首を振った。
ちょっ、人の言葉理解してるとか。
そういえばこの犬、元は人間だっけ？
確か…た…縦の主語銃だっけ？忘れちまったよ。

「そういえばこの後、なのはちゃん達も来るで？」

「ま・た・ま・お・う・か」

「それまでは寛いでてやぁ」

なんだ魔王も来るのか。

となると、他のメンバーも来るな。
ちっ、雪音に悪影響を及ぼさなければいいんだが…。

「なあ音耶君」

「なんだ？」

「雪音ちゃん…抱いてもええか？」

「だが断る」

「このっ！音耶、はやてが邪魔する！！」

「おｋ。ヴィータにハンマー取らせろやぁ！！」

「ちょっ、ゴリラ邪魔や！！」

「コロコロ転がってるてめぇの方が邪魔なんだよ！！」

俺たちは八神家にあった大乱闘なゲームをしている。
俺はゴリラを。
ヴィータは大食い丸男を。
はやてはオレンジ機械女を使っている。
しかし機械女、コロコロしまくってウゼェ。

ちなみに雪音はデカ犬と戯れている。
イガグリはシグナムに剣の稽古をつけて貰うんだって。
魔法の事は言わないって約束で了承した。
リミッターも掛けて来たし、まあ、ばれないだろう。
シャマル？
ああ、いたなそんな奴。

「よっしゃあ！ハンマー取ったぜ！！」

「よし、はやてを潰せ」

「任せろ！！轟天爆砕！！」

「ちょっ、ヴィータはそんな事せえへんよな！？ええ子やもんな！？」

「ギガント…シュラーク！！！」

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

ヴィータの一撃は文字通り粉砕…いや、飛ばした。
はやてはコントローラーを持ったまま、チーンってなってる。

「「いえぇい！！」」パシン！

「2人がかりなんて卑怯や…」

ヴィータとハイタッチを交わす。

何だろう。凄くヴィータとの距離が縮まった気がする。

ヴィータに兄ちゃんって言われる日も近いか？

うへへ…。

続く！！！！

第１０話　鍋パーティー。マ・ジ・か（前書き）

今回は長めです。

では、本編へＧＯ！！

第10話　鍋パーティー。マ・ジ・か

「へぇ、包丁の扱いうまいなぁ」

「家でやってるからな」

6時。

八神家の食卓に参戦することになった西野家。

長男という重い役職に就いている俺は、鍋パーティーの準備を手伝っていた。

因みに、次男は汗を掻いたため風呂を借りている。

西野家のマリア様こと雪音は、遊び疲れたのか、デカ犬に寄りかかって夢の中へ行っている。

しかし可愛いぉ、雪音。

眠ってる姿はまるで天使のようだ。いや、むしろ天使が霞むくらい美しい。

もうダ・ヴィンチに描いてもらいたいくらい。

「西野、少し尋ねたいことがあるのだが」

「あん？なんだよ」

「紫音に剣術を教えたのはお前か？」

「いや、あいつの我流だ。俺は剣術なんてできねぇし」

「そうか？しっかりとした太刀筋をしていたから、てっきりお前が教えたのだと…」

「だから剣術はできねぇって」

マジでイガグリのは我流だしな。
太刀筋がしっかりしているのは、きっと修行の賜物だろう。
つうかシグナムが、さっきから何か探ろうとしているのは気のせいか？

「シグナム、紫音君凄かったん？」

「はい、まだまだ青いですが、将来はいい使い手になるかと」

「へ～、意外やなぁ。そういえば、紫音君って何で剣術やっとるん？」

「最近は物騒だからな。自衛手段としてやってんだろ」

「自衛手段か…。すまん、つまらぬ事を聞いたな」

「気にすんな」

俺に質問を終えたシグナムは、リビングのソファーへと戻っていった。
シグナムがあんな事聞いてくるなんて、イガグリがなんかやらかしたか？
つうかシグナム、てめぇ暇なら手伝えや。
所詮はニート侍だった。

「あっ、白菜買い忘れとったわ…」

「なんだと」

「「「お邪魔しま～す」」」

「邪魔すんなら帰れ」

「いらっしゃい、みんな」

7時。
ちょうど鍋の準備が終わった頃、魔界生物御一行がきた。
メンバーは魔王に魔犬に魔虫。
バーニングと類友は用事で来れないらしい。

「はやてちゃん、これお母さんが持っていきなさいって」

「ケーキやないか。ありがとうなのはちゃん」

「はやて嬢、お土産じゃ」

「のり…。お歳暮の残りやな」

どうやら魔王と魔虫は土産を持ってきたようだ。
ケーキを持ってきたこと褒めてつかわす。
雪音が喜ぶだろう。

「で？お前は？」

「え？私？」

「おいおい、まさか貢物持ってきてねぇのか？」

「あ、うん。持ってきたほうが良かった？」

「当たり前だろ。人の家にお邪魔するのに土産がねぇとか。常識考えろや。それとも、飼い主が持ってきてるからいいってか？はっ、育ちの悪さが手に取るようにわかるな」

「気にせんでええで、フェイトちゃん」

「……育ちが悪い…」

「どうすんねん！フェイトちゃん落ちこんどるやないか！？」

「しかし俺も鬼ではない。犬、お前にチャンスをやろう。お前が見事こなせば、さっきの言葉は撤回してやろう」

「ど、どうすればいいの？」

「5分以内に白菜と焼きそばパン買ってこいや」

「白菜と焼きそばパンだね？うん、すぐに行ってくるよ！！」

バタンッ！！

「アンタ最低やな」

「鬼なの」

「フェイト嬢がパシリになってるんじゃ」

俺は悪くない。あくまで教育だ。

八神家の人たちと挨拶を交わした魔界生物コンビは、見かけぬ二人に首をかしげた。

ちなみに雪音は眠りから目覚めて、２人を凝視している。

イガグリは絶賛スクワット中だ。

「ああ、この子達は音耶君の弟君と妹さんや」

「音耶君、弟もいたんだ。はじめまして、わたしは高町なのは」

「ワシは音耶の親友の海堂ｋ「虫だ」虫じゃないけん！？」

「俺は、弟の、フンッ、西野、紫音、っす！！」

「…雪音…妹…」

恥ずかしがる雪音、かわいいぉ。
イガグリはスクワットやめろや。

「よろしくね雪音ちゃん、紫音君」

「親友の家族や、可愛がってやるんじゃ！」

「うっす！虫の、兄貴と、魔王の、姉さん！！」

「…ぅん…虫のおじちゃんと…魔王さん…」

「虫のおじちゃん！？」

「魔王！？」

ふむ、さすが我が家族。
いい感じに教育されてる。

「音耶君……。２人とも、魔王じゃないよ？なのはさんだよ」

「…な…のはさん…？」

「はぅ！」

魔王は雪音の上目遣いの餌食になった。
さすが雪音、魔王をも浄化させるとは。

「雪音ちゃんかわいいなぁ…。紫音君もなのはさんって呼んでね？」

「うっす！！、なのは、のッ！、姉さん！！」

「…にゃははっ、まぁいいか」

「今度はワシのことじゃ。呼び方はなんでもええよ」

「…虫のおじちゃん」
「虫の、兄貴！！」

「やっぱりそれ！？」

虫だしな。

「お前らさっきから何言ってんだ？」

「あ、ヴィータちゃん」

エターナル幼女ヴィータが話に加わった。
音耶の精神力が８０上がった。
スキル発動『撫で回す』

「だから撫でんじゃねーよ！！」

「ツンデレかわゆす」ナデナデ

「ロリコンじゃな」

「ロリコンなの」

「ロリコンやな」

「失敬な、あくまで父性本能だ」

「あたしはロリじゃねえ！！」

「「「「いや、ロリだろ（なの・やろ・じゃろ）」」」」

ヴィータがロリじゃなかったら何になる？

あ、幼女か。

「で、お前ら魔王とか虫とか何言ってんだよ？」

「そうなの！聞いてヴィータちゃん！！音耶君ってば、いつもわたしのこと魔王って言うんだよ！？」

「ワシは虫って言われるんじゃ」

「海斗はどうでもいいけどよ……音耶、なのはは魔王じゃねぇぞ？」

「ヴィータちゃん…」

「ワシはどうでもええんか…」

「どっちかと言うと悪魔だ」

「ヴィータちゃん!?」

まさかの悪魔でくるか。
さすがヴィータ。良くわかってる。

「把握。すまんな今まで勘違いしてた、デビルなのは」

「!?音耶君のばかッ!!」

「音耶君、デビルなのははさすがに可哀想やで」

「結構いいと思うんだが…。しかしあれだな、魔犬も飼ってるし魔王の方がしっくりくるか…」

「どっちもやめてよ!!」

「ったく、協調性のない奴だな。わかった、好きなほうを選ばしてやるよ」

「あれ?わたし悪くないよね?」

「5…4…3…」

「ちょ、ちょっと待って!ええっと、w「ただいま!!はあはあ…」ふぇ、フェイトちゃぁん…」

「0…。決まらなかったようだから魔王な」

「ううぅ…」

「なのは？どうしたの！？」

「お前のせいだ、犬。で？白菜は買ってきたか？」

「え、私のせい？うん、白菜は買ってきたよ」

「よくやった。褒めてつかわすぞ」

「ありがと。あと、はい。焼きそばパン」

「は？」

「え？」

焼きそばパン？何買ってきてんの、こいつ。
白菜買って来いって言ったよな、俺？

「さて、グループ分けを決めるか」

フェイトも帰ってきたので、俺たちは鍋パーティーを開始すること

になった。
大きいテーブルを引っ張り出し、ソファーの前に設置する。
つまりテーブルは2つ。
だから2つのグループに分かれなければならない。

「俺と雪音とヴィータが一緒なのは決定事項だから…あと2人か」

ここにいるのはデカ犬を除いて10人。
つまり5・5に分かれる。

「適当でええんちゃう？みんな仲ええし」

「バカ野郎、適当でいい訳ねえだろ。雪音に悪影響及ぼす奴が一緒だと困るんだよ。そんな事も分からないのか。だからお前は狸なんだ」

「よう分かったわ。とりあえず一発殴らせろ」

「だが断る」

「早く決めて飯食おーぜ」

「だな。じゃあヴィータが決めていいぞ」

「あたしははやてがいい」

「よし狸、お前はこっちだ」

「まあええけど」

狸が仲間に加わった。
あと1人か。
と、俺が誰にするか考えていると、魔王が期待を籠めた瞳で見つめてくる。
簡単に言うとあれだ。
捨てられてる子犬の目だ。

「だが俺はスルーのできる人間」

「兄貴、俺シグナムの姉さんとがいい！！」

「よし、イガグリはシグナムと一緒な。と、なると残るは…」

「ワシはどっちでもええんじゃ」

とりあえず虫は却下。
なんか危ねえ。

「私もどっちでもいいですよ」

「ん？……誰だお前？」

「シャマルです！！」

「ああ、マル子ね。つうかお前いたんだ」

「ずっといたわよ！？ってマル子！？」

うるせえ奴だな。影薄いくせに。
とりあえずお前も却下。

存在の薄さが感染しても困る。

「わ、わたしもどっちでもいいかな～？（チラッ）」

「じゃあ、あっちな」

「ふぇ！？」

なに残念がってんの？どっちでもいいって言ったじゃん。
つうか、こっちには来させない。
お前は色んな意味で危ないからな。
となると、残りは…

「フェイト、こっちに来い」

「私？うん、わかった」

「な、なんでフェイトちゃんはそっちでいいの！？」

「なんでって…一番無害そうだし、ピュアだから」

「確かにフェイトちゃんは純粋やもんな」

「へ？あ、ありがと／／／」

「な？ピュアだろ？」

「た、確かにそうかもだけど…。じゃあわたしは？」

「言っていいの？」

「…あっちで食べるの」

なんだ、言ってやっても良かったのに。

てな訳で完成！

心がキレイなチーム＋狸と、なんか危ない奴チーム。

こうして鍋は始まった。

～心がキレイなチーム＋狸～

「てな訳で鍋を始める。肉の貯蔵は十分か？」

「ええで、というかもう出来とるわ」

「ならいただきますだ。皆さん手を合わせましょう」

「ん？なんやそれ？」

「は？何って…小学校の時やったろ？」

「やったことないわ」

「私も初めて聞いた」

「マ・ジ・か。ったく、最近の小学校は…」

「なんや知らんけど、いただきます」

「「「いただきます」」」

「…わんわんおねえちゃん…あれ食べたい…」

「うん。……はい雪音」

「…ありがと」

うむ、懐かれてるなフェイト。
雪音は何故かフェイトに懐いている。
ちなみに呼び方は、わんわんおねえちゃん。
実に良く分かっている。
どうでもいいが、イガグリにはフェイトの姉さんって呼ばれてる。
本当にどうでもいいけど。

「雪音、こっち向いて」

「……？」

「口元にご飯がついてるよ」

「…うみゅ……ありがと」

「あぅ、雪音は可愛いなぁ」

……本当に、良く懐いてるなぁ…。

「ちょっ、音耶君！！血ぃ、手から血ぃ出とるから！！」

「ああ…本当だ…。こりゃいけねえ、ははは」

「笑っとるけど、顔がおっかないで…」

「なにを言う。俺はいつだって優男だ。なあ、ヴィータ？」

「おっかねえよ！！こっち向くな！！」

皆してなんだよ…。

グス…お兄ちゃん寂しい。

～なんか危ない奴チーム～

「……はぁ…」

「なのはちゃん？」

「シャマルさん…」

「さっきからため息ばかりついて、どうかした？」

「たいしたことじゃないんですけど……音耶君ってホントわたしには意地悪だな～って、思ってたりしてました」

「ああ、音耶君…。あの子って意外と皆にひどいわよね…」

「マシなほうですよ。わたしなんて…毎日魔王…魔王…魔王魔王魔王魔王魔王m「なのはちゃん落ち着いて！！」にゃっ！？わたしは一体…」

「何やってるんじゃ？」

「海斗君。音耶君について話してたのよ」

「うむ、音耶か。ホンマなのは嬢は音耶が好きじゃなぁ」

「ふぇ！？／／／」

「あら！なのはちゃん、音耶君のこと好きだったの？」

「ち、違うの！好きというより、気になるだけなの！！／／／」

「それを世間では好きと言うんじゃ」

「ほう、高町は西野のことが好きなのか？」

「シ、シグナムさんッ！？だ、だから……」

「そうじゃよ、シグナムの姉御。なのは嬢は音耶にホの字じゃ」

「だから…」

「えーーーー！？なのはの姉さん、兄貴のことｓぎゃあああああ！！」パキンッ！！！！

「……なのは嬢、卵は投げるもんやないんじゃ」

「みんなが、わたしのことからかうからいけないのっ！」

「なのはちゃん…」

「高町…」

「そんな目でわたしを見ないでぇ～」

「ふう、食った食った」

「美味しかったね、雪音」

「……うん」

「はやて、アイス食べていい？」

「ええで～」

食事が終わり、みんなで寛いでいる。
なのはとマル子は後片づけだ。
しかしイガグリよ。
お前は何故卵を装備している？防御力なんて上がらんぞ？

「ねえ音耶」

「なんだ？」

「雪音って可愛いね。私、あんな妹欲しかったんだ」

「やらんぞ、雪音は俺の天使だ」

「ふふっ、わかってるよ。でも妹っていいよね。私、お兄ちゃんな

らいるんだけど…」

ああ、そういえばコイツも妹だっけ？
ん？妹？

「フェイト、ちょっとこっち来て」

「どうしたの？」

「ふむ」なでなで

「お、音耶！？／／／」

「おお、案外悪くない…」なでなで

「きゅぅ～…／／／」

「……何やっとるん？」

「いや、フェイトも妹だったな～、と思って」

「あんたシスコンやったな…」

「それは認める。妹ＬＯＶＥ」

妹はいいよ。癒される。
しかしあれだな。
結構フェイトも癒されるな。
純粋で素直で金髪の妹……アリだな。

「フェイト」

「な、なに？／／／」

「俺の妹になれ」

「妹！？」

「ぶッ！！あんた何言っとるん！？」

「フェイトが妹ってのもアリだと思う」

「あんた妹居るやないか！？」

「妹は何人いても困らない。あっ、勿論一番は雪音だが」

「妹萌えのロリコン……いつか捕まるで？」

「やましい気持ちなどない。あるのは父性本能だ。てことで、今日からお前はフェイト・T・西野だ」

「ど、どうすればいいの！？助けてなのは！！」

っち、飼い主を呼んだか。

だが、あたふたするフェイト……アリだな。

「どうしたのフェイトちゃん？」

「お、音耶が妹って…」

「?? はやてちゃんどういうこと?」

「実はな、音耶君はロリコンで妹萌えだったっちゅうことや」

「ロリコンじゃねえ。妹好きは認める」

「で、妹属性を持ってるフェイトちゃんを、毒牙にかけようとしてたんや」

失敬な。
やましい気持ちなど一切ない。
ただ、お兄ちゃんって呼ばれたいだけなんだ。

「妹萌え……音耶君、わたしも妹だよ?」

「魔王が妹とかｗｗ一寸先は魔界ｗｗ」

「なんでわたしだけ…」

「む、もうこんな時間か」

時計を見ると、１０時になっていた。
随分話し込んでしまったようだ。
そろそろ帰るか。

「じゃあ、そろそろ帰るわ。雪音、帰る…ぞ…」

「……んにゃ…」

雪音は既に夢の中のようだ。
つうかフェイト。
誰に断って雪音を膝枕している。

「ごめんね。撫でてたら寝ちゃった」

「いや、背負って帰るから別にいい。イガグリ、帰る…ぞ……お前もか」

「がー……うへへ…」

イガグリも夢へと旅立ったようだ。
つうかニヤけんなや、きめぇ。

「っち、雪音は背負って、イガグリは蹴って帰るか」

「そんな石やないんやから」

「頭が石っぽいだろ？」

「確かに…。そや、今日は泊まってけばええやん」

は？泊まる？八神家に？

まあいいか。

俺の辞書に遠慮の文字はないしな。

「なら好意に甘える。今日は世話になるぞ」

「わかったわ。みんなもどうや？」

「私も泊まらせてもらおうかな？」

「ええで。なのはちゃんは？」

「わたしもお泊りするの！」

「やっぱ帰るわ」

「急に何言っとんねん」

「いや、魔王がいるし寝込みを襲われたらたまらん」

「そ、そんなことしないもんッ！！／／／」

「勘違いしてるようだが、食われるって意味だぞ？それに服がない」

「あ～偶然やな～、なぜか家に男物の服があったわ～」

「謀ったな孔明」

「てな訳で泊まりは決定やな」

マ・ジ・か。

続く！！！！

第１０話　鍋パーティー。マ・ジ・か（後書き）

てな訳で次回に続きます。

次回はお泊り編！！

音耶は無事に家に帰ることができるか！？

第１１話　予定変更！お泊り会。なんか…マジですまん（前書き）

八神家編も今回で終了です。

ちょっと長めかも。

そして今回は、残念な頭をしている患者さんが登場！！

では、本編へどうぞ！！

第１１話　予定変更！お泊り会。なんか…マジですまん

八神家に泊まることになった西野家＆魔王御一行。
泊まると決まれば、当然することもある。
それは入浴。
己の身体を清めるという聖なる儀式。
しかし、事件は起こった！！
あれは…私が中学二年生の時、友達の家へ泊まりに行ったときのことです。
トゥルルル～ル～～♪

～ついさっき～

「じゃあ皆、先に入浴してええで」

「そう？じゃあ雪音、一緒に入ろうか」

「……うみゅ…」

「にゃははっ、凄く眠たそうだね」

「雪音かわゆす」

「行こっか雪音」

「……ぅ…」

こうして雪音とフェイトは風呂へ向かった。
しかしその数分後…事件は発生する…。

「男共、覗いたらあかんで？」

「覗くか。俺たちは紳士だ」

「せや。ワシ達以上の紳士は見た事ないんじゃ」

「まあ、ならええんやｋ「「ひゃあああああ！！（～～～～～～！！？？）」」ッ！？」

「はやてちゃん、今の！？」

「悲鳴やな、ちょっと見てくるわ！男共は来んなや！！」

「もう遅いんじゃ」

「雪音えええええええええええええええ！！！！！」

「あんのっアホ！！行ったらあかんて！！」

雪音、無事でいろよ！！
今、兄ちゃんが行くからな！！

～フェイトｓｉｄｅ～

あうっ、びっくりした。
まさかシャワーが水だなんて。

故障かな？

「びっくりしたね？」

「……びっくり…」

本当に驚いた。

悲鳴もあげちゃったし…／／／

はやてが来たら言っておこう。

ダダダダダダッ！！！！

あっ、はやてかな？

でも、ちょっと慌てすぎじゃない？

バタンッ！！！

「はやて、シャワーがｍ「雪音えええええええええええええええええ！！！！」～～～～～～！？音耶！？」

はやてかと思ったら音耶だった。

音耶は雪音を見つけると慌てて抱きつく。

あれ？私達、今……～～～～～～～～～～！！？？／／／

「雪音、無事だったか！？」

「おにいちゃん……くるしぃ…」

「ああ、すまん。慌てすぎた。しかしどうしたんだ？」

「シャワー…水だった…」

「水？故障かな…。あの狸…雪音を驚かせやがって」

「それで…わんわんおねえちゃんと…雪音……びっくり…」

「だから悲鳴をあげてたのか。……ん？わんわんおねえちゃん？」

「……そこ…」

「……おお…」

「～～～～～～～～～！！！！／／／／」

おおおおお、お、音耶に見られた！！？？／／／／

どどどど、ど、どうしよう！！？？／／／／

「……ひゃ…きゃ…」

「きゃ？…ああ、そのパティーンね」

「きゃ、きゃ…」

「散る前に１つ言っとおく」

「きゃ…」

「妹は貧乳じゃないとイカンッ！！！！！」

「きゃあああああああああああああああああああ！！！！／

／／」バシンッ！！！！

～ｅｎｄ～

で、風呂が壊れてたらしく、俺たちは現在銭湯へと来ていた。

「季節は春終盤。しかし今の俺は秋」

「せやな。顔に大きな紅葉がついとるわ」

「痛そうじゃのぉ」

そう、俺の顔には大きな紅葉がついている。
しかも数十分前にできた、できたてホヤホヤな紅葉だ。

「……／／／」

「フェイトちゃん、犬に噛まれたと思えばええんや」

「俺は犬の裸を見たと思えばいいんだな？」

「気にしないほうがいいよ、フェイトちゃん」

フェイトはさっきから真っ赤になっている。
魔王の言うとおり、気にしないほうがいいぞ。
俺も気にしてないし。

「フェイトちゃん、漫画でこういうシーンは良くあってな。殴られた主人公は、大体記憶が飛んどるんや。だから、きっと音耶君も忘れてるで。なあ～音耶君？」

なるほど、そういう事か。
つまり記憶がないと嘘をつけってことだな。
そしたらフェイトも元気になるし、今回のはなかった事にできる。
まさに一石二鳥だ。

「だが俺は素直な日本人。細部までじっくり覚えてます、ごっつぁんです！！」

「あんｔ「いやあああああああああ！！！！／／／」バシンッ！！！！

紅葉が１つ増えました。

「音耶、ホンマ度胸あるなぁ」

「やめろよ、照れるじゃねぇか」

「兄貴、ねみぃ～～～」

「黙れイガグリ、そしてさっさと服脱げや」

現在、脱衣所。

男メンバーは入浴のために、自らの装備を脱ぎまくっていた。

「なあなあ、どっちがデカイか勝負せぇへん？」

「はっ！海鳴市のスカイツリーと言われた、この俺に勝てるとでも？」

「おお。ワシの如意棒が火を噴くで」

「なに？兄貴達勝負すんの？俺も勝負してぇ！！」

「ばかやろー、ガキにはまだ早い」

「さあ、勝負じゃ！！」

ふふふ、残念だったな海斗。

俺の息子は強いぜ？

「俺のターン！！俺はパンツを生贄にし、息子・ジョニーを召喚！！」

「ワシもピンクパンツを生贄に、息子・清二を召喚じゃ！！」

今、俺たちのスピリット・サンが放たれる！！

「なっ！？攻撃力５３００じゃと！？」

「俺の息子はアタッカーだからな。そういうお前こそ、防御力４９００か…やるじゃねぇか」

「ち、やるしかないんか…」

「ああ、いざ尋常に…」

「「決闘！！！！」」

結果は引き分けでした。

いいライバルを見つけたぜ。

「うむ、見事に普通の銭湯だな」

「時間も遅いから、ワシら以外誰もおらへん……いや、おったわ」

海斗の視線の先には、配置されている小さな台に座りながら、目の前の鏡を見て（、・ω・′）ってしている金髪がいた。

「音耶……ワシ眼科行ったほうがええんかな？」

「現実逃避すんな。アレは間違いなく厨二だ」

「兄貴、あの人なんで鏡に向かって（、・ω・′）ってやってるの？」

「きっとキメ顔の練習をしてたんだ。可哀想に…そこまで病気が進んでいたか…」

「なあ音耶」

「なんだ？」

「ここは風呂や。そんで風呂には知り合いがおった……もう、わかるじゃろ？」

「把握。ｏｋ、先手は俺に任せろ」

ジョニー、もう一度出番だ。

厨二は俺が近づいてることに気づかず、まだ（、・ω・´）をしている。
なんというか、アホだ。

「おい厨二」

「ッ！？何故貴様がここにいる！？」

声をかけるとビクッ、ってなって振り向いた。
例えると？（・ω・´ノ）ノ！！ってな感じだ。

「それはこっちの台詞だ。それとキメ顔の練習なんてしてんじゃねぇよ」

「家の風呂が故障したから来たんだ。それと、キメ顔なんてしていないッ！！」

「偶然だな、俺たちもだ（、・ω・´）」

「真似をするな！！本当に貴様はムカつく奴だな…！！」

「ほう、俺がムカつくか？ならば勝負してやろう」

「勝負？…ククククッ…貴様ごときが僕に勝てるとでも？」

厨二はイタイ笑みを浮かべながら、顔を手で隠している。
簡単に言うと厨二病のポーズだ。

「さっさと勝負しろよ」

「ああ、いいだろ。ハンデだ。先手は貴様にやろう」

「後悔すんなよ……。俺は腰に巻いたタオルを生贄に！！ゆけ！ジョニー召喚！！」

「なっ！？貴様、何を見せる！？」

「何って…。風呂で勝負つったらこれだろ。漢王デュエル息子モンスターズ」

「知らん！！ぼ、僕はそんな変態じみたことはやらんぞッ！！」

「言うと思ったよ。トラップカード、オープン。『虫のタオル下ろし』」

「任せんしゃい！！」

隠れていた虫が飛び出し、厨二のタオルを下ろす。
因みに事前に決めていた作戦だ。
厨二は分かりやすくて助かる。

「クレスの息子、強制召喚じゃあああああああ！！！」

「や、やめろおおおおおおおおおおお！！！」

虫の手によって厨二の息子は強制召喚される。
さあ厨二よ！！
いざ尋常に…

「デュエ…ル……海斗…」

「……わかっとる…」

「うわっ、俺のよりちっちぇえ！！」

「言うなイガグリ。俺も予想外だった」

「…あ……あぁ…」

「攻撃力1、防御力2ってところか。すまんクレス、軽率じゃった」

「しかも皮のホルスターまで装備してやがる…。……いい病院を紹介してやろうか？」

まさかワイトよりも弱いとは。

なんかすまん。

「…あぁぁぁぁ…」

「許せ厨二。これも勝負だ」

「せやな。勝者…音耶の息子・ジョニー…」

「き、貴様らあああああああああああああッ！！！！」

俺たちが慰めてやると、いきなり厨二が切れだした。

厨二は右の拳を振り上げ、俺に迫ってくる。

「やっぱ、そういうパティーンね。イガグリ！」

「うっす！！せやぁあああああああああああああああ！！！！」

イガグリは俺たちの間に移動し、厨二の右手を掴んで放り投げた。
良くやったイガグリ。
伊達に修行バカじゃない。

「うわあああああああああああああ！？」

バッチーーーーーーンッ！！

「うわ、痛そうじゃ…」

円を描いて飛んだ厨二は、背中からモロに湯船に着水した。
しばらくすると、スゥーっと厨二が湯船に浮かんでくる。

「…身体洗うか…」

「せやな」

俺たちはプカプカ浮かんでる厨二に合掌し、身体の洗浄を始めた。

「すまん、遅くなった」

「ホンマ遅いわ。何やってたん？」

「聞くな。ただ…1人が天に帰っただけだ…」

「よう分からんけど。大変だったな」

「ああ…」

俺は、今だプカプカしているであろう厨二に敬礼して、八神家へと歩を進めた。

「とりあえず部屋割りは、男組と女組でええな？」

八神家へと帰還した俺たちは、早速寝るための部屋割りを決めていた。

まあ、男と女は普通別だよな。

しかし俺は意義を申し立てる。

「意義あり！！」

「却下。どうせ、雪音ちゃんとヴィータと寝たいって言うんやろ？」

「分かってるじゃねえか。とりあえず虫とイガグリ、雪音とヴィータをトレードだ」

「絶対嫌や。あんたに渡すと何されるかわからん」

なんだと？
それじゃあ俺がまるでロリコンじゃないか。

「ロリコンやろ」

「とうとう心の中まで読むか、狸よ。俺は久々に雪音と寝たいんだ。雪音、お兄ちゃんと寝るか？」

「…うん…」

「よし！ヴィータも俺と寝ような？」

「ん～…はやてと寝る…」

「ちっ、つけ込めなかったか」

寝ぼけてるから行けると思ったんだが…。
仕方ない。今日は雪音と２人で寝るか。

「という訳ではやて。もう一部屋プリーズ」

「まあ、雪音ちゃんがいいって言うならええけど……変なことしたらあかんで？」

「俺はロリコンじゃない。ただのシスコンだ」

俺を何だと思ってるんだ、コイツは。

まあ、雪音と一緒に寝れるから許す。

「…おにいちゃん…」クイクイ

「ん？どうした？」

「…わんわんおねえちゃんも…いっしょ…」

「ッ！？」

「私も？」

フェイトも？

まあ、妹属性あっからいいけど。

「てな訳でフェイト、お前もこっちだ」

「む、無理無理無理！！お、音耶と寝るなんて…／／／」

「何もしねーよ。つうか俺じゃなくて雪音と寝ればいいだろ」

「……おねえちゃん…」↑涙目＆ａｍｐ；上目遣い

「うっ……わ、わかった。一緒に寝ようか…」

落ちたかフェイトよ。
まあ、雪音のあれは破壊力抜群だからな。
俺だったら失神ものだ。

「音耶君、フェイトちゃんに何かしたら……わかっとるな？」

「オーケー。だから包丁はしまえ」

「ならええんや。ほな、私達は先に行くわ。おやすみ～」

「……おやすみ…」

ヴィータとはやては去っていった。
シグナム達？
あいつらはもう寝たよ。

「ワシも寝るんじゃ。ほなな～」

「おやすみっす！！」

今度はイガグリと虫が去っていった。
残るは俺たちか…。

「さて、俺たちも寝ｒ「音耶君…」ま・た・お・ま・え・か」

くそっ、気づかないフリしてたのに。
魔王はモジモジしながら俺を見ている。

背のせいか、若干上目遣いだ。

「……その、わ、わたしも一緒に寝ても…いいかな？」

「だが断る。エデンが地獄と化すのはごめんだ」

「ううっ…また断られたのぉ～」

おいおい、冗談は存在だけにしてくれよ。

「はぁ……おやすみ、みんな…」

魔王は去っていった。

「ねえ、音耶」

「なんだ？」

「なのはにもう少し優しくしてあげたら？」

「俺は優しくしているつもりだ」

「あ…そう」

何故ため息をつく。

「俺たちも寝るか」

「そうだね……って、部屋はどこ使えばいいんだろ？」

「あ」

俺たちは狸を叩き起こしに行きますた。

「……むにゃ…」

叩き起こした狸に部屋を案内させ、部屋に布団を引かせ、俺たちはやっと寝ることができた。

布団に入って数分。

雪音は既に寝てしまっている。

因みに俺、雪音、フェイトと川の字で寝ている。

「音耶、起きてる？」

「…おお」

ぼー、っとしているとフェイトが話かけてきた。

雪音が寝ているので、若干声が小さい。

「音耶はさぁ、雪音のことが本当に好きだよね」

「当たり前だろ。いつだって雪音ＬＯＶＥだ」

「ははっ、……何か溺愛する理由があるの？」

何言ってんだコイツは？

溺愛する理由？そんなの決まってるだろ。

「家族だからだよ」

「……え？」

「理由なんてないようなもんだ。家族だから、妹だから大切にする。溺愛する。愛情をたっぷり注ぎ込む。当然のことだろ？」

「家族だから当然……。…そうだよね…」

そういえばコイツって訳アリだったな。

死んだ娘の変わりに作られたんだっけ？

……ああ、思い出した。

確かビリビリ母ちゃんに嫌いって言われたんだっけ。

で、母ちゃんは身投げ…と。

「あのさ、俺はお前の事よく知らんけどよぉ。お前が悩んでるって事くらいわかるぞ」

「…私ってわかりやすいかな？」

「ああ。すぐ顔に出る」

「ははっ、そっか…」

「ずばり親子喧嘩かなんかだろ？」

「……そうだね。そんなところかな…」

「ふむ。なら俺から言えるのは１つだ」

「なに？」

「子を、家族を愛していない親なんていない」

「！？……どうしてそんな事が言えるの？」

「簡単だ。子を愛すつもりがないなら、最初から子をつくろうとは思わない」

「……けど…子供をつくった後に、愛は消えたりするかもよ…？」

「それもあるかも知れないな。けど、それは本人にしか分からないだろ？」

「確かにそうかもだけど……じゃあ嫌いとか面と向かって言われたら？」

「言われたことがないから分からん。ただ、不器用なだけじゃないのか？憎しみと愛は、コインの裏表のようなもんだし」

「そう……もし音耶がそんなこと言われても、音耶は相手を愛せる？」

「愛せる」

「……そっか。音耶は凄いね」

「別に凄くなんかない。つうか、今まで色んな事言ったけど、やっぱり一番大事なのは、自分が相手を愛すことだと思う」

「…自分が相手を愛す…」

「たとえ相手が自分を嫌ってても愛す。憎しみをぶつけられようが愛す。罵倒されても愛す。相手の全てを愛す。相手のありのままを愛す。相手の心を受け止めてやる。愛って漢字は、心を受け止めるって書くだろ？」

「……1画足らなくない？」

「細かいことは気にすんな。つまり大事なのは自分が愛するってことだ」

「くすっ、うまく纏めたね」

「ホント一言多いな。俺はもう寝るかんな」

「うん、おやすみ。……相手にどう思われようと、自分は愛せ…か。…うん、そうだよね」

「音耶…ありがと」

こうして、八神家での夜は過ぎていった。

「あとフェイト」

「ん？どうしたの？」

「俺の妹にならないか？」

「まだ言ってるの！？」

うるさい奴だな。

雪音が起きちまうだろ。

～午後１１時５０分・銭湯～

「ふ～、今日は店じまいだな」

「しかし、なんでウチには客が少ない？２４時までやってる銭湯なんて、あまり無いんだぞ？」

「やっぱ外見が古臭いせえなのか？」

ガラッ

「さてと、掃除でもすっか」

「フンフンフン♪あ？なんだありゃ？」

「浴槽になんか浮かん出んぞ？客の忘れ物か」

「なんかいい物だったらいいｎって？人！？」

「お、おい！！アンタ、大丈夫か！？」

「…ん……ここは…？」

「アンタ、浴槽で気を失ってたみてぇなんだ！」

「浴槽…ああ、銭湯に来てたんだったな…？はッ！？西野音耶！！あいつは何処にいる！？」

「あん？アンタ以外客はいねぇけど…」

「くっそ～～！！あいつ絶対に許さん！！！！！」

ザバァ！！

「ん？貴様、何を見ている？」

「ちょっｗｗｗ皮のホルスターｗｗｗｗ」

「貴様もかあああああああああああああああああああッ！！！！！！」

今日も平和な海鳴市でした。

第１１話　予定変更！お泊り会。なんか…マジですまん（後書き）

音耶君ミニイケメンタイム！！

主人公として初めて活躍してくれた！！

それと音耶君の中で、フェイトへの好感度がグングン上がっています。

次回はついに！！

西野家兄妹の戦闘スタイルが発覚します！！

そして、今まで登場しなかった親達も！！

次回は『西野ファミリー大集合』です！！

お楽しみに～！！

第１２話　西野ファミリー大集合。マジで家族が増えた（前書き）

今回でバトルまで持っていくつもりだったんですけど、重大な事を思い出し、次回に持ち越しにしました。
本当にすみません。

重大な事についてなんですが……

音耶のバリアジャケットもとい騎士甲冑が決まってない…。

どうしよう…。

皆様、よかったら音耶のバリアジャケット、騎士甲冑について、アイデアをお願いします！！

本編を読んだら、音耶の戦闘スタイルが分かると思うので、ご参考にしてください。

どうか、ご協力おねがいします！！

第１２話　西野ファミリー大集合。マジで家族が増えた

これは、６月のある日の出来事。

俺はいつも通り学校へ行き、魔王と虫をからかったり、妹候補のフェイトを愛でたり、類友と狩りに行ったりして一日を過ごした。

狸とバーニング？

いたな、そんな奴も。

で、放課後になり、俺はまっすぐ帰宅。

実にいい子だ。

し・か・し！帰宅後…事件は起こった。

「ただいま～」ガチャッ

「音耶ちゃん！おかえり～！！」ダダダダッ！！！

ドアを開けた瞬間、無駄乳をぶら下げた女が現れた！！

俺は…

１．避ける

２．押し倒す

３．今こそ魔法の呪文だ！！

「秘技、ムーンウォーク！！」

「きゃん！！」ベシンッ！！

女　は　たおれた。
音耶　は　５の経験値を手に入れた。
レベルアップ！！
息子・ジョニー　が　光合成をおぼえた。

「で？アンタは何をしている？」

「いった～ッ！なによ、息子にハグしようとしただけじゃない！！」

「そんなものぶら下げて、俺に抱きつくな。圧迫死するだろ」

「そんなものってなによ～。音耶ちゃんも昔はこれ飲んでたのよ～？」

「もうしゃべるな、無駄乳が」ツンツン

「あんっ！」

とりあえず、靴べらで突いてみた。
おお、なんて弾力。
だがデカ乳は認めんぞ。

「……お前達は親子で何をやっている…」

俺がデカ乳をフェンシングのように突いていると、リビングから白髪オールバックのダンディーなおっさんが出てきた。

「カイさ～ん、音耶ちゃんがいじめる～～」

「なにを言う。俺は無駄乳を駆除しようとしただけだ」

「いいからやめんか。親子そろってバカバカしい」

「ちっ、親父に感謝しろよ」

「音耶ちゃんのバ～カっ！」

はいはい、言ってろ無駄乳。

ん？紹介？

まあ、焦るなって。

とりあえず、この無駄乳もとい母さん。名前は西野夏音。黒いロングで美人だとか言われている。俺は認めんぞ。管理局ではデバイスマイスターをしている。階級は三等空尉。一応、戦闘もできる。で、白髪オールバックが俺の親父。カイ・リルウィーゼ・西野。因みに西野家の婿さんだ。管理局ではそこそこ偉いらしく、階級は一等陸佐。タバコを常に持ち歩く、ヘビースモーカーだ。

まあ、そんなこんなで西野家両親、帰宅した模様です。

「んまいっ！！やっぱ音耶ちゃんの料理は美味しいわ～～！」

「本当はアンタが作んないといけねぇんだけどな」

「え～～！？私、料理できないし～～」

「母親失格。退場を願います」

家族揃っての夕飯。
本当に久しぶりなので、イガグリも雪音も嬉しそうだ。
というか親達よ。
久しぶりに帰ってきたんだから、少しは家事手伝えや。

「お前達。学校の方はどうだ？」

飯を食べてると、親父がありきたりな質問をしてくる。
他にはないのか？
まったく、つまらんおっさんだ。

「…ふつー…」

「俺は楽しいぜ！！」

「俺は雪音に会えなくて寂しい」

「ふむ、思ったとおりの返答だな」

「というか、音耶ちゃんのシスコンっぷりも相変わらずね～」

「それは認める。雪音ほど可愛い者なんて存在しない」

「……／／／」

「照れる雪音かわゆす」

「む～……音耶ちゃん、私は？」

「帰れババア」

俺の一言が効いたらしく、母さんは親父に泣きついていた。
つうか親父。
飯ん時はタバコやめろや。

「そういえば音耶」

「んぁ？」

母さんに抱きつかれながら親父が話しかけてくる。
だからタバコやめろや。
俺は味噌汁を飲みながら耳を傾けた。

「先日、私の部隊に高町なのはという、地球出身の魔導師が入隊したんだが」

「ビュホッ！！」

「あっちいいいいい！！？？坊主だからモロ頭皮にいいいいいいいいっ！！！！」

は？親父の部隊に魔王が！？
なんだそりゃ！？
つうか親父の部隊ってなんだっけ？

「ゲホッ…それは本当か？」

「ああ、私の部隊、時空管理局本局武装隊　航空戦技教導隊に確かに入隊したぞ。ちなみに私は部隊長だ」

「説明どうも…。で、まさかバレてないよな？」

「ああ、地球出身かは尋ねられたが、ミッド出身と言っておいた。一応、嘘は吐いていない」

助かった…。
親父がもし「私の息子も海鳴市に住んでいるんだ」なんて言ったら、バレるのも時間の問題だしな。
バレたら、きっと今以上に絡んでくるはずだ。
ああ、想像しただけで鳥肌が…。

「もしかして知り合いか？」

「知らん」

「兄貴の友達だよ。この前会ったし」

「イガグリぃ、てめえは黙ってろ」

「兄貴、顔がこえぇ！！」

「友人だったのか。ならば言っても良かったか？」

「ダメだ。俺は魔導師なんて面倒なもんに関わりたくねぇ」

「でも、魔法や戦闘の訓練してるじゃない」

「それは雪音を守るためにしてるんだ。力は持ってたほうがいいしな」

そうだ、俺は雪音を守れる力が欲しいから、親父や母さんに魔法を教わってるんだ。
管理局なんて微塵も興味ねぇ。
俺は平穏に暮らしたいだけなんだ。

「ねえ、私は守ってくれるの？」

「……気が向いたらな。つうか、あんた俺より強いだろ」

「や～ん！カイさん、音耶ちゃんが私のこと守ってくれるってぇ～！！」

「話は聞いてたかババア？耳鼻科紹介すっぞ、このやろー」

「私うれしいわ～！そんな音耶ちゃんにはプレゼント！！」

ババアが懐から何かを取りだし、俺に手渡しする。
とりあえず受け取ってみる。

「……銃弾？」

「ちがうわよ～。それは…く・いっ」

「杭？俺にキリスト様になれってか」

俺の掌にあるのは、親指サイズの銀色の銃ｄ…杭だ。
杭の平らな部分には、茶色の紐が通してある。

「それは、アームドデバイスよ～」

「デバイスッ！？」

デバイスという言葉に、イガグリが物凄く反応した。
しかし、デバイスか…。
まあ、持ってて損はないな。

「ありがたく受け取っておく」

「うんうん！大事にしてあげてね～」

「母さん！！俺のは！！？？」

「紫音ちゃんは強くなったらねぇ～」

「俺は強い（、・ω・′）」

「じゃあまた今度ねぇ～」

「えええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……」

イガグリうぜぇ。
しかし杭が待機状態のデバイスか。
まあ、杭は俺の戦闘スタイルの象徴だしな。
俺がデバイスを眺めていると……

『あなたがわたしのますたーなの？』

ロリヴォイスが聞こえた。

「ッ！？こ、これは…！？」

「音耶ちゃん、そういうの好きでしょ～？だからＡＩの人格をロリロリにしてみました～」

「母さん、今ほど感謝した日はない」

「あ～ん、もっとほめて～！」

Ｇｏｏｄ　Ｊｏｂ母さん。
しかし、ロリロリか……うへへ…。

『ますたー？』

「おお。俺は西野音耶だ、よろしくな」

『ますたー…西野音耶…。うん！おっけーなの！』

「デバイスってええなぁ～（「▽｀）」

『ますたー、わたしのなまえを決めて？』

「名前？う～ん……田中」

『田中？うん、ｗ「キャンセル～！！」…キャンセルするの』

「ちょっと音耶ちゃ～ん、真面目に考えて～」

いや、いきなり名前を決めろって言われても。
つうか田中よくね？

「音耶ちゃん。この子は今日から音耶ちゃんの相棒であり、西野家の一員となる子なんだから、ちゃんとした名前つけてあげて？」

「じゃあ、母さんはなんかいい名前があんのかよ？」

「う～～～ん……おっことぬし？」

「お前もう帰れ」

「ふむ。音耶の戦闘スタイルから取ってみるのはどうだ？」

俺の戦闘スタイル？
拳でのクロスレンジだから……ゴッドハンド？

「兄貴のパンチって既に鈍器だよな」

「だまれイガグリ。俺の拳は鉄じゃねぇ」

「いや、鉄で殴られるより痛いかも…？鉄？……鉄……鉄…あ！！」

「なんだよ？」

「鋼…なんてどうかな（、・ω・′）」

「最近流行ってんのかそれ？」

鋼か…。まあ、悪くは無いな。
けど、鋼だけじゃなんか物足りん。

「……家族だから……なまえ…きょーつーの…」

「共通の名前？…お！なる。さすが雪音。母さんとは大違いだ」

「可愛いのに…おっことぬし」

となると、やっぱり音をつけたほうがいいのか？
鋼の音……鍛冶屋って感じだな。

「音に関連するものでもいいんじゃないか？」

「音に関連するもの……騒音…音色…奇声…歌…ん～、どれもいまいちだ」

「…おにいちゃん」

「ん？なにか閃いたか？」

「うん……シュタール…クラング…」

「！？…雪音……お前は天才だ！！なんて良い名前なんだ！！」

「……がんばった…」

「兄貴。シュターム何とかって、どういう意味なの？」

「知らん」

「知らないのかよ！？」

「『鋼の響き』という意味だ」

「鋼の響き……かっけえじゃん兄貴！！」

「さすが雪音。もう愛してるっ！！」

「…えへへ…／／／」

雪音サイコーーーーーッ！！！！
お兄ちゃん、なんでも買ってあげちゃう！！

「そういう訳で、お前の名前が決まったぞ」

『うん…じゃあ、わたしになまえをくださいなの！』

「おう、お前の正式名称は『シュタールクラング』、愛称は『クラン』だ」

『はいなの！これからよろしくなの、ますたー！』

「ああ、よろしく」

西野家に新たな家族が加わった、今日この頃。

「ううん、おっことぬし可愛いのに～～～～～～！！！！」

第１２話　西野ファミリー大集合。マジで家族が増えた（後書き）

音耶君の戦闘スタイルは、己の肉体を使うクロスレンジ！！

音耶君の必殺は……杭にクロスレンジ…この意味…わかりますね？

という訳で、よろしければバリアジャケット、騎士甲冑のアイデアをお願いします！！

できれば、明日中までに集まればいいんですが…。

皆様、どうか小生にアイデアをッ！！（、・ω・´）ゞキリッ

第１３話　はじめてのセットアップ。マジでグッたろ（前書き）

すみません、更新遅くなりましたｍ（＿＿）ｍ
デバイス設定にかなり時間が掛かった～ｏｒｚ

今回、音耶君のバリアジャケット＆武装が出ます。

バリアジャケットや武装について、様々なアイデアを出していただき、本当にありがとうございました！！

では、本編へどうぞ！！

第13話　はじめてのセットアップ。マジでググッたろ

両親帰宅の翌日。
今日は平日。普段なら学校に行き、教師の声をBGMに惰眠を貪っている頃だ。
しかし本日は普段のようにはいかない。
何故だって？
それは両親が帰ってきたからだ。
偶にしか帰ってこない両親が帰宅した日は、学校を休む。
西野家の暗黙の掟だ。
だからと言って、のほほんと過ごすわけではない。
西野家が揃ったというと、やる事は1つ。
魔法の訓練だ。

てな訳で西野ファミリー、無人世界へとやってきました。

いやぁ、見渡す限りの荒野。
草の一本も生えちゃいねえ。
人が住める要素ゼロだな。さすが無人世界。

「お前達、今日は一日中訓練だ。真剣に訓練に取り掛かれ」

「うっす！！」

「うい」

「…うん」

「「「はいッ！！」」」

親父の言葉に、それぞれ返事を返す。
親父も気合が入ってるのか（、・ω・′）―ζ　↑こんな感じだ。
親父はきっとニコ中で早死にするだろ。
まあ、今はどうでもいいか。
それと、先程から気になっていたんだが…。

「あんたら誰？」

俺は先程の親父の言葉に、元気に挨拶をした三人を見る。
西野ファミリーにこんな奴らはいない。

「そういえば紹介していなかったな。この者達は私の護衛だ」

「護衛？」

「はい、私達は無人世界に行く西野一佐に」

「何かあったときのため」

「護衛として派遣されたんだ」

「なるほど。とりあえず説明すんのは一人でいいだろうが。なに、その無駄なコンビネーション」

「そういう訳で、私の護衛につく3人だ。なお、この者達にも訓練に参加してもらうことになる」

ふーん。別に構わないけどね。

「俺は西野音耶。敬語は使わなくていいから」

「西野紫音っす！！今日はお互い頑張ろうっす！！」

「…雪音…」

「こいつらが私の子供だ。お前達も自己紹介を」

「はいッ！！私は局員Ａです。敬語は癖なのであしからず」

「俺は局員Ｂ！西野一佐、直々の教導を受けられて光栄です！！」

「僕はティーダ・ランスター。今日はよろしく」

モブキャラ２人に、名前有りが１人か。

ちなみにＡは女で、残りは男だ。

「ではこれから訓練に移る。雪音とＡは西野三尉の所へ。音耶はデバイスの武装の確認。残りは私の下で訓練だ」

「「「はいッ！！」」」

「うっすッ！！」

「雪音、がんばれよ」

「……うん…おにいちゃんも…がんばっ…」

雪音に励まされた俺は、魔王をも超える。

我がデバイス、クランよ。

1時間でお前を掌握してやろう！！

「で、クラン。俺は何をすればいい？」

『わたしに聞かれてもこまるの』

ちっ、ダメダメデバイスが。

まあ、可愛い声だから許す。

「とりあえず、セットアップするか」

『おーけーなの！ますたー、わたしの名前をよんで！！』

「おう。田中、セットアップ」

『だれ！？』

「すまん、間違った。クラン、セットアップ」

『真面目にやってほしいの。せっとあっぷなの！！』

次の瞬間、俺は光に包まれた。
別に爆発はしねえよ？

『せっとあっぷ完了なの！』

「だな。……で？なんだこりゃ？」

『なにって、せっとあっぷなの』

「ちげえよ。バリアジャケット？騎士甲冑？のことだ」

『それは、おかあさまが決めたの。ちなみにますたーは、ベルカ式だから騎士甲冑なの』

俺は自分の姿を確認する。
うん。盾の騎士リーズの格好です。
ベースはリーズだが、所々改良されている。
まず、胸のプレートアーマーが無く、黒のインナーになっている。
腕には、服の上から装着されている、肘から指の根元までである銀色の籠手。
外側だけを守るように、装着されている。
つまり内側は服と、籠手を固定するために半分に切った鉄の輪が２本。
左の籠手には、なんかスライドできそうな所がある。
そして脚部には銀色の脛当てがあり、表面が銀色のブーツを履いている。

腰にはリーズのようなヒラヒラマントではなく、アーチャーのような前の開いたヒラヒラマントをつけている。
色は白で変わらないが。
どちらかと言うと、騎士甲冑ってよりも騎士服だな。

『騎士甲冑について説明するの。ますたーはクロスレンジによる格闘戦が主体だから、全体的に身軽な甲冑にしたの。腕は防御も出来て、素早い打撃に特化した籠手なの。脚部は蹴りやすく、走りやすい甲冑。胴はアクロバティックな動きが可能になるように、無駄な装備を取った軽装なの』

「まあ、たしかに動きやすいわな。でも軽装だったら喰らうダメージもでかいんじゃないか？」

『ますたーは、頑丈って聞いてるの』

「把握」

まあ、俺が頑丈なのはとりあえず置いておこう。
今はもっと大事なことがある。
アレがないではないか。

「おい、俺のロマンがないぞ」

『ロマン？もしかしてパイルバンカーのことなの？』

「ああ、漢のロマンだ。で？なぜパイルバンカーがついてないんだ？」

『あの武装は別に用意してるの。今はこのフォルムから説明をする

から、後にして欲しいの』

「このフォルム？つまりモードチェンジもあるってことか？」

『当たりなの！』

「よし、なら早速そっちも…」

『ちょっと待つの。まだ1つ残ってるの』

「あ？なんだよ」

『左の籠手。そこにはカートリッジシステムが搭載されてるの。装弾数は4。大事に使って欲しいの』

このスライドってカートリッジの排出口だったのか。

フリスクを入れる所だと思ってた。

「おっけー。んじゃ、もう1つの方いくか」

『わかったの。ちなみに今のモードはゲシュヴィントフォルムなの。覚えておくの。そして今からなるモードは、ランメフォルムなの』

「おう。クラン、ランメフォルム」

『ランメフォルムなの！！』

俺はまたもや光に包まれた。

だから爆発じゃねえって。

フォルムチェンジした俺は自分の姿を見た。
まず黒のインナーが、アーチャーのしている筋肉みたいなアーマーになっていた。

そして両腕全体を覆う銀色の甲冑。
肩の甲冑の後ろ根元部分には、腰くらいまでの長さのある銀色の何かが、折りたたんで装着されていた。
右腕の肘から手首にかけて、大きな装備が装着されていた。
６連式リボルバー型の弾倉。
真っ直ぐ突き出ている銀色の杭。
色は銀一色だけど、形は完全にアルトアイゼンのステークですね。
ありがとうございます。

「なんつうか、さっきとは違い重装備だな」

『パイルバンカーを生身で撃つのは、それくらいの装備が必要なの。それでもその装備は、結構軽装なの』

「これが軽装ねえ」

肩まで覆う銀の甲冑を見る。
確かに重装備は腕だけだな。

『じゃあランメフォルムについて説明するの。ランメフォルムはゲシュヴィントフォルムとは違い、重い一撃を喰らわすために攻撃特化したフォルムなの。まずは右腕のパイルバンカーを見て欲しいの』

「撃ち抜くのみ！！だな」

『??よくわからないの。それはリボルバーステーク。名の通り、6発入るリボルバー型の弾倉が装備されてるの。弾倉には術式カートリッジという、特別なカートリッジを装填するの』

「術式カートリッジ?聞いたことねえな」

『当たり前なの。だって作者はおかあさま。その武装のためだけに作られた非公式の新システムなの!』

「……大丈夫なのか?」

『安全性は無問題なの!3年もかけて作った、おかあさまによる最高のシステムなの』

「ならいいけどよ」

『信用していいの!それじゃあ、術式カートリッジについて説明するの。使い方は本来のカートリッジシステムと同じで、魔力を溜めとくことで使用可能なの。で、ここからが本来のカートリッジシステムとの違いなの。

1. まずロードした時の魔力は、自分の魔力になるのではなく、パイルバンカーを使用するための魔力に運用されるの。

2. ロードをすると自動的に魔法が発動されるようになっているの。

3. 発動される魔法は3つあって、1つはパイルバンカーを撃つための爆発的瞬間加速術式。もう1つは威力を上げるため、ステークに魔力付与術式。最後は衝撃を緩和するための術式が組み込まれているの!』

「ふ~ん。そういえば、これって非殺傷設定できるのか?」

『一応できるの。ただ威力は変わらないから、1撃喰らったら3日は意識不明になると思うの。だから人に向けて撃っちゃだめなの』

「というか死なないのが不思議だ」

『細かいことは気にしちゃいけないの。6発しか撃てないから、撃ち終わったらカートリッジを補充するの。大切なことだから忘れないで欲しいの』

「おk。もう説明は終わりか？」

『次の武装で説明は終わりなの。最後の装備。肩の根元ら辺に設置されてるそれなの』

「ああ、これね」

『それはエナジーウイングなの』

「まじか。俺は空を飛べるのか…」

感無量とはまさにこのことだ。
まだ飛行魔法は教えてもらってなかったしな。
気分的にはアレだ。
安西先生……空を、飛びたいです…。みたいな。

『飛べるには飛べるの。けど、本来は加速のために付けられた装備なの』

「加速のため？なんでよ」

『フォルムが重装備だからなの。重装備だから普段よりも動きが鈍くなるし、相手との距離を詰めるのも一苦労なの。クロスレンジにもちこめなきゃ、パイルバンカーをつけた意味がないの。そこで、この魔力式エナジーウイングの出番なの！』

「魔力式か。つまり魔力をエネルギーに動くのか」

『そうなの。そのエナジーウイングは、直進で脅威的な瞬間加速を発揮するの』

「直進しか動けないのか？」

『全方向、動けるには動けるの。けど、瞬間加速は直進にしか使えないの』

「？もっとわかりやすく頼む」

『簡単に説明すると、飛行は一般空戦魔導師並み。直進の加速はソニックムーブ並みなの』

「なるへそ。戦いの時は避けて避けて、一気に距離を詰めるって感じか」

『そんな感じなの。そうだ、試しにエナジーウイングを出してみるといいの』

「おう。エナジーウイング発動」

『エナジーウイング展開なの！！』

肩の根元（めんどくさいから背で）に設置してあった物が開き、そこから薄い銀色のエナジーウイングが出てきた。

「こりゃあまた、どこかで見た事のある作りだな」

俺から出てきたエナジーウイングの形状。
どうみても紅蓮聖天八極式のエナジーウイングですね、ありがとうございます。
母さん、絶対ググッたろ。

『とりあえず飛んでみるの』

「童貞喪失の記念日だな」

音耶、行っきまーす！！

フワァ

「おお、浮かんだ」

『当たり前なの』

感激のあまり泣いてしまいそうだ。
これで俺も超能力者。
あ、エナジーウイングのおかげか。

「いざゆかん、彼の空へ」

ビュンッ
ヒュンヒュン

ビューーーーンッ

「わたし、飛んでるわ！！」

『？？とりあえず、ソニックブーストを使ってみるの』

「ソニックブースト？」

『さっき言った加速なの』

「ああ、ソニックブースト」

ヒュンッッ

俺は風になった。

って、ちょっとまてや。

「おい、なんで止まった。不良品か？」

ソニックブーストを使い一瞬で移動はできたが、俺が目指していた場所とは違った。

『限界距離は１００ｍなの』

「なん…だ…と…」

『とりあえず今ので、説明は全部終了なの。ご苦労様なの』

「……ああ」

なんだ、このやるせない気持ちは。
気分的には、絶望したッッッッ！！！って感じだ。

地面に降りて、騎士甲冑を解除する。
俺はクランに失望した視線を向けながら、親父達の下へ向かった。

最後に１つ。
大気圏の外へ行ってみたかったｏｒｚ

続く！！

第１３話　はじめてのセットアップ。マジでグッたろ（後書き）

ティーダ出現ｗｗ

死亡数ヶ月前のティーダさんです（笑）

第１４話　模擬戦。マジヤバス（前書き）

どうも、二足歩行犬です。

更新が遅くなってしまってすいません。

昨日パソコンが戻ってきたので、やっと執筆できます。
いやぁ、電源が入らなくなった時は鳥肌マックスでした。
今年で一番怖い思いしたかも（笑）
しかも修理に2万ってどうゆうことよ。
高すぎでしょ。

そんな感じで、諭吉が2人巣立ちました。

しかし、久しぶりにｉｎしたら驚いた。
結構、批判的な感想が来てますね（笑）
いつか来るとは思ってたけど…

本当に駄小説ですみませんｍ（＿＿）ｍ
この小説は作者の自己満足のようなものですので。

本当にすいませんでした。
できれば、これからも応援よろしくお願いします。

第１４話　模擬戦。マジヤバス

無人世界。
見渡す限り荒野で囲まれているこの世界に、１人の少年がいた。
少年の手には、数々の血が染み付いてきた鈍く輝く銀色の殺傷兵器。
この場には似合わぬ、肉の焼ける匂い。
少年はただ無言に、新たな肉塊を切り刻む。
いや、確かに無言ではあるが、少年の表情はどこか嬉しそうにも感じる。
少年は何を感じ、その凶器を振るうのか。
少年は何を思い、口角を吊り上げているのか。
その答えは少年にしか分からない……。

「音耶ちゃん、お肉なくなった～」

「暇なら手伝えや」

「…おにいちゃん…お肉…」

「今、音速の速さで準備するから待っててな！」

無人世界で向かえる昼食時。
我が家＋αはバーベキューの真っ最中だ。
俺？
ただ豚と牛の肉塊をｍｙ包丁で切ってただけだぞ。
雪音の嬉しそうな表情を見ると、ニヤニヤが止まらない。

「すまんな、音耶。お前に全部任せて」

「あんたらは家事が苦手だからな。肉を奇怪なアートに変えられても困るしな」

「どうも調理などは好かん」

親父が言ったとおり、西野家の両親は家事が壊滅的。
なので俺が家事全般を引き受けている。
因みに西野家の家計簿も俺の手の中。
そんなんでいいのか？両親達よ。

俺は心の底から、両親達のミッドでの生活を心配した。
栄養失調で倒れるとかはマジで勘弁願いたい。
収入源が無くなっちまうからな。

「音耶君」

俺が機械のように次々と肉を切っていると、優男が声を掛けて来た。
たしかティーダだっけ？

「何か用か？」

「はい、君の分を確保しておいたよ」

そう言ってティーダが肉の乗った小皿を、差し出してくる。

ふむ、ありがたい。

俺はティーダに礼を言って、小皿を受け取る。

とりあえず補充用の肉を親父に渡し、ティーダの横に腰を下ろす。

「雪音ちゃん、可愛いね」

「だろ？俺の妹は世界一可愛い」

「ちょっとまって、それは聞き捨てなら無いな」

「あ？雪音が世界一なのは世の理だろ」

「いや、雪音ちゃんも可愛いよ。けど、一番は僕の妹だ」

「ん、お前妹いたのか？」

「いるよ、雪音ちゃんと同じくらいの年の妹が」

「へえ。けど一番は雪音だ」

「いや、ティアだね」

「雪音だ」

「ティアだよ」

「「・・・・」」

こやつやりおる。
ティーダも妹主義者か。

「妹のスペックは？」

「オレンジツインテール。おそらく将来はツンデレになる」

「ッ！？やるじゃねぇか。お前に対する扱いは？」

「デレ」

「……手ごわいな…。しかし将来はツンに変わり、「兄さん！洗濯物は別にしてよ！臭いがうつるでしょ！！」とか言われるはずだ」

「ッ！！？？…ありえないぃ……ティアは僕に優しいよな…？」

「冗談だ。そこまで落ち込むな」

ティーダがｏｒｚしながらブツブツ言ってるのが、あまりに奇ｍ…
可哀想に見えた。

「ほら、顔上げろよ。今度、飲みながら妹自慢でも聞いてやるから」

「ああ…、って君未成年だよね？」

「細かいことは気にすんな。禿げるぞ？」

「禿げっ！？……僕は禿げるのか…ティア…僕が禿げても…兄さんって、呼んでくれるよね…？」

「お前めんどくさっ」

ティーダはネガティブゾーンを纏っていた。

まあ、気持ちはわからなくもない。

「さて、これから模擬戦を始める」

昼食が済み少し休憩したところで、親父から集合の合図があった。

次の訓練は模擬戦。

雪音がいるんだ、いいとこ見せないとな。

「チームは音耶、紫音チームと、管理局チームだ」

まあ妥当だな。
雪音は母さんと魔法の訓練か。

「あの、西野一佐」

「ん？どうした」

「このチーム分けで大丈夫なのですか？」

局員Ａが親父に尋ねる。
普通はそうだよな。子供対大人だし。
しかも相手は局員。
こっちの事を心配してんだろ。

「大丈夫だ。こいつらはそこそこやる。お前達も本気で戦え」

「はあ…」

「俺たちは問題ない。だから本気でこいよ」

「はは、なめられたもんだね。いいよ、本気で相手をするよ」

ティーダが俺の言葉に反応した。
子供になめられたから、イラっときたか？

「撃墜判定は私が出す。両チーム今から１０分やる。それまでに作戦を決めておけ」

「「「「はい！！」」」」

「うい」

「さて、どうするかイガグリ」

「う～ん、俺こういうの苦手なんだよね」

「俺もだ。つうか相手の事も、なんもわかんねえしな」

「あっ、俺わかるよ」

そういえばイガグリは、男2人組みと訓練してたっけ。

「ティーダさんが銃型デバイスの射撃型で、Bさんが斧を使う近接型だった」

「おk。Aって女の人は？」

「あの人はわかんない」

クロスレンジが1人にロング…いや、銃型って言ってたしミドルレンジか。

あとはスタイル不明が1人。

ん～、かなり不利じゃね？

「兄貴～、どうすんの～？」

「……よし、イガグリ」

「なに？」

「お前はティーダと当たれ。俺はBを確実につぶす。俺が終わらせるまで持ち堪えろ」

「おーけー！！倒してもいいんだよな？」

「ああ。Aについては戦闘が始まり次第、念話で対応を伝える」

「おっす！！絶対勝とうぜ、兄貴！！」

「おう。俺も親父の前で恥をかくつもりはねえ。勝ったら雪音に褒めてもらうつもりだしな」

いっちょやってやるか。

雪音、兄ちゃんに力を分けてくれ。

兄ちゃんも愛を分けるから。

「準備はいいか？」

「「「はい！！」」」

「うっす！！」

「ああ」

荒野の真ん中で両者距離をとり、開始の合図を待つ。
俺はクランのゲシュヴィントフォルムに身を纏う。
イガグリはを中国風の袖なしの赤い服に、黒い半ズボンを着ている。
そして手には赤い片手剣が握られている。

対する相手は全員、共通の防護服を身に纏っている。
デバイスはティーダが銃型。
Bは身の丈ほどある斧。
Aは青い宝石ののついた杖だ。

Aは砲撃型か？
サポートにまわられたら厄介だな。

「イガグリ、予定変更」

「なに？」

「お前はティーダとAを相手してくれ。時間を稼ぐだけでいい」

「つまり、２人の目を俺に向けさせればいいの？」

「そういうことだ。できるな？」

「任せな！！」

イガグリは気合が入ったように、剣を構える。
俺も特攻を掛けるために腰を落とした。

「では模擬戦……始めッ！！！！」

「紫音！行く…ぞ……うぉい」

「兄貴、どうする？」

「とりあえずヤヴァイ」

開始の合図と同時に、俺と紫音は立ち尽くしてしまった。
つうか、開始と同時に空を飛ぶとかどんだけ～。
しかも三人。
いきなり手が出せないとです。

「兄貴、空飛べないよね？」

「一応飛べる。けど機動力が下がる」

「どうする？」

「どうするべ」

ほらほら、俺たちが喋ってる間に相手さんはスフィアを形成してるよ。

まじで、どうすっか。

「紫音、とりあえずBを叩き落としてこい」

「俺が!?まあ、わかった。落としたら兄貴が相手してよね」

「おk、任せろ」

「それじゃあ行って来る!!」

紫音は空に浮かぶ相手に向かって走り出した。

文字通り走り出した。

空に向かって。

「うおおお

と、考えている間に紫音がBと接触したようだ。
俺も奴らの下に移動すっかな。

～ティーダside～

僕は模擬戦が開始して、直ぐに驚くことになった。
いや、僕だけじゃなくチーム全員だ。
驚きの要因は紫音君。
彼は空を飛ばず、空中を走ってきたのだ。
おそらくレアスキルか何かだと思う。
今はB相手に、クロスレンジでの戦闘を繰り広げている。

僕とAは紫音君をBに任せ、音耶君に攻撃を仕掛けていた。

「クロスファイア…シュート！！」

僕の形成した7つのスフィアが、音耶君に向かって発射される。
Aは僕の後方で詠唱中だ。
クロスファイアシュート。
僕が得意とする魔法の1つだ。
誘導性に優れていて、空間制圧を目的とした射撃魔法。
さて、君はどうするかな？音耶君。

「ったく、めんどくせぇな」

音耶君は軽くため息をつき、その場で構えた。
どうやら避ける気はないらしい。

僕は2つの魔力弾を様子見のため先行させた。
防がれたなら、他の方向から仕掛ければいい。

僕は魔力弾をシールドで防がれると思っていた。
しかし、その期待は裏切られる。

バキンッ!!
バキンッ!!

「なッ!?」

何かが割れる鋭い音が耳に届く。
僕はその光景を見て、驚きを隠せなかった。
音耶君はシールドで防いだわけでもなく、魔力弾を弾いたわけでもない。
己の拳で魔力弾を破壊したのだ。

「まったく…君達は本当に滅茶苦茶だ」

こんな戦い方をする魔導師は見た事もないよ。

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

いてぇ…、拳がヒリヒリする。

魔力弾を殴った拳が地味に痛い。

強化したといっても、あんなの殴れば痛いのは当たり前か。

もうちょい必要だな…。

俺は腕に更なる魔力を送り、固定する。

これは簡単に言えば、魔力付与のようなもの。

身体に魔力を流し、圧縮、固定する。

これをすることによって、魔力付与した部位が強化される。

威力ＵＰ、耐久度ＵＰ、筋力ＵＰと、中々使い勝手のいい技法だ。

剣とかなら魔力弾を斬ったりできるだろうけど、あいにく俺は拳。

なら、その拳を強化しなければ、まともに戦闘などできない。

「うしっ、次」

今度は前と左右から3つの魔力弾が襲ってくる。

ギリギリの場所でしゃがみ、前から襲ってきた魔力弾をアッパーで破壊する。

と思ったら、今度は後ろから2つの魔力弾が襲ってきた。

「めんどくせえ、なッ！！」

足を強化して飛来した魔力弾を、後ろ回し蹴りで破壊する。

若干できた隙を見計らうかのように、先程避けた魔力弾が再び襲ってくる。

俺は魔力弾をイナバウアーで避ける。

避けたと同時に、イナバウアーの体勢から右手を地面につき、左足を片方の魔力弾に向かって振り上げる。
破壊した音を聞きながらバク転のように、地面に着地する。
もう1つの魔力弾を確認しようとすると、既に魔力弾は消えていた。

「ははっ…随分アクロバティックな動きをするんだね」

ティーダは苦笑いをしながら銃を向けてくる。
ちっ、紫音はまだか？
俺は紫音の状態を横目で見る。

「うぉおおおおおおおおお！！！！」

「はぁあああああああああ！！！！」

ガキンッ！！
ガキンッ！！

いい感じに盛り上がっていた。
あれ？
あいつまさか、作戦忘れてねえよな？

「ははっ、楽しいっすよ！！Bのおっさん！！」

「俺も楽しいぞ、紫音君！！」

ガキンッ！！

いい笑顔でやりあってるじぇねえか、おい。
あいつ、終わったら殴ろう。

俺が軽く頭にきている時だった。

「赤竜、召喚！！」

Aがヤバさマックスのワードを叫んだ。
恐る恐る視線を戻すと、そこには…

「ガァアアアアアアアアアッッッ！！！！」

某ハンターゲームばりの赤い竜がいた。
マジでやめて欲しいぉ。
俺に死ねと？

「リオレウス、行きなさい！！」

名前まで同じかよ！？
なるほど、ハンター達はこんな気分で狩りをしてたんだな。
正直、勝てる気がしねえ。

「ギャォオオオオオオオオ！！！！」

レウスはおなじみの火の玉アタックを仕掛けてくる。
とりあえず、逃げっ！！

「シュート！！」

火の玉アタックから必死に逃げ回っていると、ティーダが空気を読めない行動をし始めた。
気分的には、モンスター側に大剣で飛ばされる可哀想な人。

「はあああ！！！」

バキンッ！！
バキンッ！！

前方から迫る魔力弾を破壊しながら、後方からバンバン撃って来る火の玉から逃げる。
ああ、このままじゃジリ貧だ。

「クラン、ランメフォルム！！」

『わかったの！！』

一瞬でランメフォルムへと姿を変えた俺は、火の玉をサイドステップで避けて、空に飛び立つ。

「そんな装備初めてみたよ！！」

ティーダは笑いながらバンバン魔力弾を撃って来る。
同じくレウスも、遠慮無用にバンバンと火の玉を放ってくる。
それらを最小限の動きで回避しながら、反撃のための隙を探っていた時…

『マスター、砲撃が来るの！避けてなの！！』

クランの声に反応してすかさず辺りを見渡すと、翠色の砲撃を今にも発射しようとしているＡがいた。

「余所見はいけないなっ！！」

一瞬だった。
わずかな隙を見せた俺に、ティーダの魔力弾が2発直撃した。
身体がぐらついた俺に、さらに追い討ちをかけるかのように、レウスが巨大な尻尾をぶん回す。

「ぐッ！！」

尻尾スイングは見事に直撃し、身体が野球ボールのように跳ね上がった。
しかも打ちあがった俺に止めをさすかのように、視界いっぱいに広がる魔力の奔流。
もちろん回避などはできず、砲撃を喰らった俺は地面に落ちた。

『ますたー！？』

「…がはッ、ゲホッ…全身強化をしといたからゴホッ…一応、無事だ…」

咄嗟に全身に強化を施して、何とかダメージは軽減できた。
だが軽減したといっても、かなりのダメージを受けたのは違いない。
あー、身体中がいてぇよ。
なんで俺が、リンチなんか受けなきゃならないんだろ。
あ、イガグリのせいか。
あいつが作戦忘れっから悪いのか。
……なんか腹立ってきた。
この魔導師達もなんなの？集団でリンチかけてきたり。
騎士なら正々堂々戦えよ。↑騎士じゃありません。

「クラン…非殺傷設定には、してるよな？」

『当たり前なの。だから杭の先で殴っても、刺さったりしないの』

「じゃあ、使うわ」

『へ…？……ま、ますたー！！人に撃っちゃ危ないの！！』

「人には撃たん。あのトカゲ野郎に撃つだけだ」

『あ、それなら大丈…夫、じゃないの！？可哀想なの！！』

「あ？可哀想？知るかそんなもん。あのトカゲ見てみろよ。何、あのドヤ顔？絶対バカにしてるだろ」

『でもダメなの！可哀想なの！！』

「パイルバンカーくらい喰らっても、あのトカゲは大丈夫だよ。なんたって、多種多様な武器で攻撃されても、平気な顔をしてるような奴だからな」

『う～ん、わかったの。でも当てるのは一発しかダメなの！』

「ｏｋ。それで充分」

さて、覚悟しろよトカゲ。

「クラン、アクセル！！」

『はいなの！！』

加速を使いレウスの懐に潜り込む。

スピードに乗って右拳を突き出すが、レウスは『は？なんやそれ』って感じで、全然ダメージを受けていない。
だが本番はここから。
お前に男の浪漫を刻み付けてやろう。

「紅玉寄越せえええええええええ！！！！」

『全てを撃ち抜くの！！』

ガショーン！！

「ガウ？」

ズガンッッッ！！！！

「ガッッ！！？？ガゥ…、アーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！！！」

おお、パイルバンカーはやっぱテライケメン。
レウスは兄貴的な鳴き声を発しながら、ゆっくりと地に落ちた。

「なあ…あれ、死んでないよな？」

『大丈夫なの。与えたのは魔力ダメージだから』

「鉄の杭を、どうやったら魔力ダメージに変換できるのか説明しろ」

『ご都合主義なの』

「把握」

しかしあれだな。
なんかパイルバンカー撃ったら、テンション上がってきた。

『わたしもなの！！』

最近のデバイスはハイテクだな。
でも残念。
もうパイルバンカーは撃てないんだよ。
俺は残った2人の魔導師に視線を移す。
Aは「は？」って顔してるし、
ティーダはめっちゃ苦笑い。

うん、とりあえず呆けているAを潰そう。
俺は瞬間加速を使用する。
加速で得たスピードを利用して、某熱血先生の技を繰り出す。

「ダイナミック、エントリー！！」

「ッ！？きゃあ！！？？」

ギリギリAはデバイスで防御したが、Aは衝撃に耐えられず地面にダイブした。

「A、撃墜！！」

親父の声が耳に届く。
残りはティーダか。
ティーダを見ると、まだ苦笑い。

「ははは…まさか、それ…人には撃たないよね…？」

パイルバンカーを指差しながら尋ねてくる。
そんなに怖いか？

「ああ、人には撃たないから安心しろ」

「それなら、いいんだけど…」

ティーダは顔を引き締めて、こちらを睨んでくる。
やる気マンマンですな。

「クラン、速攻で潰すぞ」

『わかったの！！ああ、戦いって最高なの！！』

なんかおかしいぞ、クラン。
戦闘狂のデバイス？
あれだな。某妹アニメっぽく言うと、
『俺のデバイスがこんなに戦闘狂なわけがない』
打ち切り候補上位に入れそうな題名だ。

「いくよ！！」

ティーダのデバイスから魔力弾が、次々と撃ち出される。
それを回避しながら徐々に距離を詰める。
弾幕を回避しながら進む俺は、さながら某シューティングゲームの戦闘機にでもなった気分だ。

「アクセルッ！！」

『はいなの！！』

ヒュンッ

一瞬でティーダの眼前に移動し、左腕を突き出す。
しかしティーダはギリギリのところでバリアを発動し、俺の攻撃を受け止めた。
しかも意外と硬い。
俺は即座に右腕を振り上げる。

「ちょッ！それ使わないんじゃ！？」

「バリアを破壊するだけだ！クラン！！」

『ぶち抜くの！！』

ガショーンッ
ズガンッッッッ！！！！

振り下ろした右腕から、とんでもない速さの杭が飛び出す。
バリアはものの見事に破壊された。
ティーダは破壊された衝撃なのか、身体のバランスを崩す。

「隙あり！」

俺はティーダの腕を掴み引き寄せる。
このまま右拳を腹部に入れて気絶させるつもりだ。
俺は大きく右腕を振りかぶった。
ティーダは「しまった！？」って表情をしている。

「これでラストォ！」

後に俺は思う。
どうして俺は右手で殴ったんだろうと。
どうして俺は、デバイスの状態に気づかなかったのだろうと。

「はあああ！！」

「避けられなッ！！」

『ヒャッハーーーー！！！ぶち貫くの！！！！』

「「え（は）？」」

ガションッ
ズガンッッッッ！！！！

「ちょ…」

「ぐあッ…あ…」

「ティ、ティーダーーーーーーーーー！！！！」

モロ腹部にパイルバンカーを喰らったティーダは、ゆっくりと背中から落ちていった。
落ちていく時の「あ…」って表情。

天に向けるように突き出す右腕。
ちょっと涙目。
まるでビルから落ちた人を見た気分だ。

『ふう～、さいっこーなの！！』

「……」

『ますたー？どうかしたの？』

いや、お前がどうした。
そんなキャラじゃなかったよな？
人に撃つなって言ったのお前だよな？
率先して撃ってるお前は何なの？バカなの？死ぬの？
とりあえず…

「ティーダ・ランスターに敬ｒ「おい」……随分ファンキーなヘアースタイルだな、親父…」

振り向くと親父がいた。
オールバックだった髪は逆立って、額には血管が量産されている。
親父はスーパーサイヤ人だったらしい。

「音耶…お前という奴は……」

「俺が……悪いのか？そうだ、クラン先生がやったんだ！俺は悪くねぇ！俺は悪くねぇ！！」

殺されるなら、せめて一花咲かせて死のうぞ。

「言いたいのはそれだけか…？」

「クリリンのことかあああああ！！！！」

次の瞬間、俺は宙を舞っていた。

「ティーダ、すまん」

「ははは…」

1時間後。

母さんの治療を受けたティーダは無事復活した。

俺は親父にフルボッコ。

まさか親父が虚空瞬動を使えるなんてな。

「おらクラン。てめえも謝れ」

『ごめんなさいなの。ついハイになっちゃって…』

「ははは…」

ティーダは笑っているが、やっぱり痛そうだ。
本当に申し訳ないことをしたな。
…あれ？そういえば俺悪くなくね？

「ティーダ、俺の駄デバイスが本当に悪い事をしたな」

『駄デバイス！？』

「ははは…」

「お詫びといっちゃなんだが、困ったことがあったら力になるからよ」

「ははは…」

ん？
なんかおかしいな。

「ティーダ？」

「ははは…」

「食べ物を噛む場所は？」

「ははは…」

「母は？」

「ははは…」

やべ、バグった。

ティーダはこの後、ミッドの病院へ搬送されたそうな。

ちなみにイガグリｖｓＢの勝負は、引き分けだったらしい。

とりあえずイガグリには罰として、１ヶ月ブリーフ生活を言い渡した。

ざまーみろ。

～ミッドのとある病院～

ガラッ

「おにいちゃん、大丈夫？」

「ああ、ティアか。もう大丈夫だよ」

「ほんと？よかったぁ。おにいちゃん、ずっと笑ってるから怖かったんだよ？」

「はは、ごめん。でも、もうなんともないから」

「そっか。そうだ、おにいちゃん」

「ん？」

「おにいちゃんに買ってもらった、ぬいぐるみの名前決まったよ」

「へえ、なんて名前なんだい？」

「うん、クイール！」

「クイールか、可愛い名前だね。……ん？クイール……クイール…杭ール…杭ッ！？あ、ああ…」

「おにいちゃん？」

「や、やめてくれ…そ、それ以上…！！」

「お、おにいちゃん…？」

「僕を…！！掘らないでえええええええええええええ！！！！」

「お、おにいちゃあああああああああああああん！！！！」

今日もミッドは平和だった（笑）

第１５話　最高だった日常（前書き）

どもども、二足歩行犬です。

今回は音耶の過去編です。

いままで音耶のアレな言動&行動。
それも今回で明らかになります。

長いので、２つに分けました。
しかし2話を一気に書くのは疲れました。

ほのぼの重視の今回。
最後はちょっとシリアスです。

くそ～
シリアスは苦手ぽ

寝不足で若干ハイになっている作者でした～。

第１５話　最高だった日常

「ふぅ、今日はやけに疲れた…」

時刻は１１時。
親父達との休みを終え、家に帰宅したのは先程。
両親はミッドへ帰り、イガグリと雪音は疲れたのか直ぐに寝てしまった。
俺は簡単な夕食をとり風呂へ入って、自室へと向かった。

机の上に1日置いてあった携帯が、ウルトラマンの胸のライトばりにピカっている。
確認するためにケータイを開くと、画面には雪音の寝顔が写っていた。
今日の疲れが一気に吹き飛ぶ。
雪音の寝顔はポーションや薬草が霞むほどの回復力を持っている。
まさに女神の歌声ならぬ、女神の寝顔。
そんな神々しい待ち受けに、メールが2件来ているというメッセージが映し出されていた。
俺は確認のため受信履歴を開く。

―――――――
Ｆｒｏｍ　海堂海斗
ｓｂ　（´・ω・`）

音耶ぁ～
なんで今日は休みだったんじゃ～

ワシは寂しいと死んじゃう・・・
寂しさを紛らわすために、今日はエロ本を抱いて寝ることにするんじゃ・・・

―――――――

……なんだ、迷惑メールか。
送り主には感謝の気持ちを籠めて、兄貴動画を送ってやろう。
さて、次は…

―――――――

Ｆｒｏｍ　エセ関西人
ｓｂ　今日はどないしたん？

なんや今日はどないしたん？
風邪か？

まあ。それはさておき。
明日みんなで遊ぶんやけど、よかったら来いひん？
来れるんやったらメールしてなぁ。

―――――――

……。

カチカチッ

―――――――

Ｔｏ　エセ関西人
ｓｂ　無題

明日は行けない。
悪いな。

――――――――

パタンッ

「……知り合いから心配されるなんて、久しぶりだな」

閉じた携帯を机に置き、ベットに横たわる。
カーテンの隙間から射す月の光が部屋を照らす。

なんか最近、あいつらとの距離が縮まってきたよな…。

――音耶ぁ～――

――今日はどないしたん？――

――はぁ…アリサでいいわよ――

――わたしはライダーかな？――

――音耶、起きてる？――

――音耶君っ！――

――祐！――

ッ！？

……ああ、わかってる。

友達なんていらないよな。

あいつらとの付き合いも知り合いとしてだ。

これ以上先には進まない。

友達にはならない…。

俺の友達…いや、親友はあいつらだけだから。

だから……友達…なん・・て・・・。

――夢を見ていた――

――これは前世の記憶――

――俺が俺だった時の記憶――

――俺が俺でいれた時の記憶――

～～～～～～～～～

「祐！早く起きなさい！！」

眠気を吹っ飛ばす甲高い声が聞こえる。
常人ならきっと怒り狂うほどの大声だ。
しかし毎日聞いてる俺には、既にフィルターが架かっている。
この程度じゃ、ベットから飛び起きるほどでもない。
ま、俺は優雅に睡眠を貪らせてもらうよ。

次の瞬間、俺は自分でもビックリするような声を出すのであった。

ドゴッッ！！！！

「ッひ！？ぎゃあああああああああああああッ！！！！！」

とんでもない衝撃…というよりも鈍痛が額を襲った。
まるでサイと頭突き対決したような痛みだ。

「っいってえな！！何すんだよ！？」

「あら、起きてるじゃない」

上体を起こし、この痛みを与えた奴に文句を言う。
視線の先には、六法全書を片手に佇んだ美少女。
って、おい！！

六法全書はいかんだろ!?
俺を殺す気か!?

「弁護士目指してるんだもん。六法全書は必需品よ」

「だからって殴るのはダメだろ…。俺の頭が凹んだらどうする?」

「あら、反対から殴れば直るんじゃない?」

「俺の頭は、そんな愉快な構造はしていない」

「はいはい。どうでもいいからさっさと支度なさい」

少女はそういうと、部屋を出て行った。
俺は溜息を吐いて、学校へ行く支度を始めた。

「おう、祐。って、どうした?デコが赤いぞ」

「…そこの六法ウーマンに聞いてくれ…」

「六法？ああ、美希か」

家の玄関先に立っていた大男と挨拶を交わす。
こいつは大貴。
１つ年上の幼馴染だ。
愛称は大（だい）。
俺は大さんと呼んでいる。

「祐、おっは～」

「鈴か、おはよ」

「今日も美希と朝からラブラブだねぇ～」

「冗談は髪型だけにしろ」

俺の言葉に頬を膨らますこいつは、鈴。
同い年の幼馴染だ。
特徴はパイナップルヘアーと明るい性格。
からかうと面白い元気っ娘だ。

「で？だれが六法ウーマンですって？」

「お前以外に誰がいる。六法全書なんか携帯しやがって」

「だっ弁ｇ「あ～、はいはい。そうでしたね～」……なんかムカつ

く」

六法全書を携帯しているこいつは、妹の美希。
双子の妹だ。
弁護士を目指している才色兼備、文武両道な完璧美少女。
妹ながら実に誇らしいぞ、うん。
俺？
普通の高１ですよ～。
ちょっと人付き合いが苦手な。

「さあ、早く行きましょ」

「だな。遅刻はいかんからな」

「大さんは、あいかわらず真面目だな」

「だって大だも～ん」

「お前達も高校生になったんだから、しっかりな。ほら、皆行くぞ」

「「「は～い」」」

――これが俺の生活――
――幼馴染達との日々――
――最高に幸せだった日常――
――こんな毎日が続けばいいって、俺は願っていた――
――けど・・・――

――それは唐突に訪れた――

～～～～～～～～

「ジャッジャジャ～～ン！！！」

「いきなりどうした？」

土曜日。
俺たちは当たり前のように今日も遊んでいた。
いや、これが俺たちの普通なんだ。
幼馴染４人で遊ぶ。
これは俺たちにとって当たり前の日常。
今日は大さんの部屋に集まっていた。
で、ほのぼのと駄弁ってる時、鈴が突然騒ぎ始めた。

「鈴、どうかしたの？」

「見てよこれ！！福引で当てちゃった！！」

鈴はポケットから紙を取り出し、俺たちに見せ付けてくる。

なになに、『商店街感謝祭!!福引大会2等賞』
なんじゃこれ?

「だ~か~ら~、福引で当てたの!!日帰り温泉旅行だって!!」

「ほ~、やるな鈴」

「でしょでしょ~?」

「へえ、良かったじゃない」

「うん!!それで皆で行かない!?」

「そうだな。皆で温泉行こうぜ」

「そうね。最近肩こりが酷いし」

「ババくさいぞ美kすまんすまん!俺が悪かった!」

「大さんも喰らっとけよ、六法アタック。俺の苦しみが良くわかるから」

「あれは洒落にならんだろ…」

「で、皆行くよね?」

「当たり前だ」

「そうね」

「俺も温泉に入りたいしな」

「それじゃ、明日の9時に駅前集合ね！！」

「皆遅れるなよ」

「祐が一番心配だな」

「私に任せなさい！祐は気絶させてでも起こすから」

「それは起こすって言うのか…？」

明日が楽しみだな。

久々の遠出だし、きっといい思い出になるだろ。

――久しぶりの遠出――

――幼馴染達との旅行に、俺は凄く心が弾んでいた――

――これからも、こうやって楽しい日々が続いていくんだ――

――けど…この旅行が、俺の人生の分岐点だなんて思いもしなかった――

～～～～～～～～～～

カポーンッ

「あ〜あ〜〜〜、いい湯だぁ〜〜」

「親父くさいぞ、祐」

「しょうがないだろ〜〜、気持ちいいんだからぁ〜〜」

「ま、確かにわかるがな」

俺たちが温泉に着いたのは、つい先程。
まずは温泉ってことで、さっそく温泉に入りにきた。
で、現在は入浴中である。
しかしまぁ、極楽ですなぁ〜。

「祐、久々に勝負しないか?」

「おっ、俺に勝負を挑むのか?俺のは凶暴だぜ〜?」

「ふっ、若造が。洗練された相棒を見せてやろう」

「なら、いざ尋常に…」

「「決闘！！！！」」

俺たちは勢い良く立ち上がり、己の魂を見せ付ける。

なッ！？大さんの相棒は化け物か！？

「ほ～、祐の息子も成長したようだな」

「毎日鍛錬を欠かさないからな。そういう大さんのは核兵器だな…」

「ハハハッ、これが強者よ！ウィルソンは無敵だ！」

「名前付けてんのかよ…」

「相棒だからな。どれ、祐の息子にも名前をつけてやろう」

「威厳のある名前で頼むよ。信長とか」

「ん～～～、よし！ジョニーだ！」

「ジョニーか…。うん、いいな」

「だろ？改めてよろしくな、ジョニー！」

「ジョニー、これからもよろしくな！！」

2人して笑っていると、誰かが肩を叩いてきた。

振り返るとそこには、おっさんがいた。

「お前達は何をやっている…」

「せ、先生!?」

「ん?大さんの先生?」

「ああ、担任の畑先生だ」

「どうも、大さんの幼馴染の祐です。よろしくです、畑さん」

「ああ、知ってるよ。いつも大貴が話してるからな」

畑さんはそう言って、湯船へと腰を下ろす。
俺たちも教師の前で決闘は続けられないので、先生の横へ腰を下ろした。

「それにしても、先生はどうしてここに?」

「家族旅行だよ。昨日から来ていてな」

「へ〜、畑さん家族思いですね」

「女房がな、怖くて…」

「「あ〜、ご愁傷様です」」

ドンマイです、畑さん。
俺と大さんは静かに合掌した。

「それはそうと、お前達も旅行か?」

「日帰りですけどね。幼馴染が福引当てて」

「あ～、なるほど。じゃあ４人で来たのか」

「ん？なんで人数知ってるんですか？」

「お前達４人は、いつも一緒だからなぁ～。先生の間でも有名だぞ。幼馴染４人組ってな」

「やだ、照れちゃう」

「気持ち悪いぞ、祐」

その後、俺たちは３人で少しの時間談笑して、風呂から去った。

「２人共おっそ～い！」

「まったくよ」

集合場所だった旅館の前に行くと、２人は既に待っていた。

しかも、ちょっと怒ってる。

「悪いな、ちょっと先生に会って」

「先生？学校の先生がいたの？」

「ああ、畑さんっていって、面白い人だったよ」

「へ～。そういえば男湯うるさかったぞ～」

まじか。

どうやら決闘の声が聞こえていたらしい。

「まさか、全部聞こえてたか…？」

「ん～と、ジョニーがどうのこうのとか、毎日鍛錬してる～とか。それくらいしか聞こえてなかったよ？」

「お、おお…。ならいいんだ」

あっぶね～。

全部聞こえてたら、きっと六法アタックが飛んできてたよ。

下品なッ！！とか言って。

「で、結局何話してたのよ？」

「息子の話だ」

「あ、ちょ、大さん！」

「？？息子？…息子…毎日鍛錬…浴場……ッ～！？へ、変態ッ！！！！／／／」

ズゴッッッ！！！！！

「ぐはぁッ！！！！！」

なんで…俺だけ…。

「さっきは酷い目にあったぞ、まったく」

「アンタが悪いんでしょ！！」

「まあ、無事で何よりだ」

気絶した俺を大さんが介抱してくれたみたいだ。

無事ではないんだけどな。

復活した俺を引き連れ、幼馴染組は土産屋を転々と周っていた。

「ん～、パパとママのお土産どうしようかな～？」

鈴は食べ物コーナーで頭を捻っていた。
どうやら両親に土産を買っていくらしい。
大さんは何故か、木刀を見て「うんうん」と頷いている。
訳がわからんよ。

「祐、お父さん達のお土産何にする？」

「ん～。この能面は？」

「却下。本当に祐は変な物が好きねぇ」

「イカしてるだろ、これ」

能面を被り、土産に悩んでる鈴の下へ向かう。
そっと、肩に手を置く。

「ん？だ～れ～～っ！！！？？？きゃあああああああああああああああ！！！！！！！」

ドゴッ！！

「いったぁあああああ！！！！」

土産で殴るなよ…、商品だぞ…。
つうか木箱いてぇ…。

「は～～～っ、旅行も終わりかぁ～～」

駐車場の脇にある展望台で、鈴が大きく背伸びする。
そう、俺たちの旅行はそろそろ終わりなのだ。
今はバスの到着を待っている。

「それにしても、キレイね」

「ああ、そうだな」

俺たちは横一列になって、展望台から見える景色を眺めている。
ここから見える景色は、まさに絶景だった。
山一面を覆う紅葉。
夕日が眩しい空。
山の間を縫う様に流れる川。
本当にキレイな景色に、俺は心奪われた。

「ねえ…」

「どうした、鈴？」

「また、皆でこんな景色が見れるかな？」

「ああ、また見れるさ、きっと」

「大ちゃん…」

「そうね、また４人で来ましょ」

「美希…」

「俺たちなら、どこだって行けるさ。俺たち４人なら…」

「祐……ぷっ、ちょっとクサイ台詞」

言うな。

俺だって恥ずかしいんだ…。

「でも、そうだね！きっとまた来れる！ううん…もっと素敵な場所も行けるかもね！！私達４人なら！！」

「そうだな。俺達に不可能はない！！」

「大、意味わかんないわよ、それ。でも…確かに私達なら何でもできそうね…」

「ああ、俺達４人は最高の幼馴染だからな。これからもきっと、楽しい事が待ってる！」

「祐、だからクサイ台詞だって」

「……うるせ」

「あ～～！祐が照れてる～～！！」

「うっせえ！」

「「ははははっ！！」」

本当に最高だよ、俺たちは。

「そうだ、記念撮影しようよ！！」

バスがそろそろ到着する時、鈴がそんなことを言い出した。

記念撮影か、確かにいいな。

「誰かカメラ持ってた？」

「俺は持ってきてないぞ。祐は？」

「同じく」

「私も持ってきてな～い」

「私もよ。って、記念撮影できないじゃない！？」

まったく…そんなに騒ぐなよ、マイシスター。
今の携帯にはカメラ機能ってのがあるんだぜ？

「あ……べ、別に忘れてた訳じゃないわよ！！」

「はいはい、そーですね。んじゃ、誰かに撮ってもらうか」

隣で騒ぐ美希をスルーして、誰かいないか捜す。
おっ、いい人がいた！

「畑さ～～～ん！！」

俺の声に気づいたのか、畑さんは一緒にいた家族と思わしき人物と話して、こちらに駆け寄ってきた。

「また会ったな。何か用か？」

「これ。シャッター押して欲しいんだけど」

俺が携帯を渡すと、畑さんは「お安い御用だ」と言って、携帯を受け取った。

「さて、お前ら並べ～」

「は～い！美希と祐は真ん中ね～～！」

「ちょ、ちょっと！押さないでよ鈴っ」

「俺は祐の隣だな」

「祐、祐！美希に抱きついちゃえ～！」

「え！？祐！やったら…」

「お～い、そろそろいくぞ～」

「祐、一気にガバーッとやってしまえ！」

「祐、本当にやったら…」

「いくぞ～、ハイ…」

「ふむ、それもまた一興なり～ってね」グイッ

「きゃっ、ちょ、祐！」

「…チーズ！」

パシャッ

「おっけーだ。皆よく撮れてるぞ～」

畑さんは俺に携帯を手渡してくる。
見てみると、確かに良く撮れていた。

「祐、後で皆に送ってね～」

「ああ、任せろ」

お、バスもちょうど到着したようだな。
俺たちは畑さんにお礼を言って、バスに向かおうとした。

ガッ！！

「……何故、肩を掴むのですか？美希さん…？」

「あ、アンタって奴は～～～～／／／」

「うん、調子に乗りすぎました」

「覚悟は？」

「い、痛くしないで…ね？」

「却下」

ドゴッッッッ！！！！！

俺はこの日初めて、空を飛んだ。
夕日が眩しいぜ、ちくしょ～。

「あ～、今日は楽しかったな？」

「そうだな。俺も初めて空を飛んだよ」

「あれは祐が悪いんだからねッ！！」

「すんませんでしたー」

「くぅ～、なんかムカつく～」

バスの中。

帰るのに2時間ほどかかるバスの中も、喋っていると退屈ではない。

席順は男女別々。

俺たちの座席の後ろには女子組が座っている。
2人とも身を乗り出して危ないじゃないか。
ちゃんと座りなさい。

「ねえねえ！ポッキー食べる！？」

「サンキュー」

「俺も貰う。それと鈴、少し静かにしろ」

「え～～！？だって、あそこの人も騒いでるよ！」

鈴が指差す先には、1人の学生服を着た少年が携帯片手に騒いでいた。

「寝ぼけてたから仕方ないじゃろ！というか、だれかバス違うって教えて欲しかったんじゃ！！……え？教えた？…ワシはそんなん聞いてないんじゃ～！！」

「……どうやら乗るバスを間違えたみたいだな」

「あれって修学旅行生だよね？」

「普通間違えるかしら？」

「アホな奴もいたもんだな」

俺たちは惨めな学生に合掌した。
なんつうか、ドンマイ。

――このまま家に帰って、俺たちの旅行は終わるはずだった――

――しかし、この時の俺は思ってもいなかった――

――まさか、あんな事が起きるなんて――

「ふぁ～あっ……ねむ…」

「何だ？祐はお寝む時間か？」

「あほ。ただ、ちょっと疲れてな」

「今日は楽しかったもんね～。私もはしゃいじゃった」

「そうね。私も疲れたわ…」

「皆、明日遅刻なんて許さないからな」

「へいへい。わかってま」

大の忠告に軽口で応えようとした時だった。

ズドンッッッッ！！！！！！！！

突然、大きな衝撃が身体を襲う。

「なッ！！？？」

席から放り出される身体。

この時、俺は理解した。

バスが何かにぶつかったんだ。

ここは崖に面した道路。

ッ！？

――気づくのが遅すぎた――

――俺は座席に叩きつけられ、その衝撃で足が動かなかった――

――視界に映ったのは、鈴と美希を守るように抱きつく大さん――

――必死に俺に向かって手を伸ばす美希――

――俺も皆を守らないと――

俺は美希に向かって精一杯手を伸ばした。

「祐ううううううぅぅぅぅぅ！！！！！」

「美希いいいい

第１６話　俺が俺であるために（前書き）

さて後編です。

では、どうぞ～

第１６話　俺が俺であるために

――楽しい旅行だったはずが、１つの事故で台無しになった――

――いい思い出が…最悪の思い出へ――

――この事故が俺を変えた――

――俺が俺でなくなる……最悪の目覚め――

……声が聞こえる…。

……何故か懐かしいと感じる声…。

……誰だ？…。

……姿が見えない…。

……ああ…俺が目を瞑っているからか…。

「ん……父さん…母さん…？…」

「っ！？…ゆ、祐！！」

「祐！！良かった…本当に！」

目を開けると、驚いた表情をしている両親がいた。
母さんは泣きながら抱きついてくる。
父さんは片手で顔を隠して泣いてるようだ。
父さんの泣くところなんて、かなりレアだな。
というか、母さん。
抱きしめすぎじゃない？
身体がヤバイくらい痛いんだけど…。

「祐っ、祐っ、祐！！」

「母さん…ちょっと、痛いんだけど…」

「あっ！？ごめんなさいっ、大丈夫だった！？」

「ああ、大丈夫だけど…」

「祐、今先生を呼ぶからな…」

先生？
あ、ここ病院だったのか。

道理で消毒液臭いと思った。
あれ?なんで俺は病院なんかにいるんだ?
さっきまでみんなと……。

「か、母さん…」

「どうしたの?」

思い出した…。
確か帰りのバスで事故に…。
思い出した瞬間、身体の震えと強烈な吐き気が襲ってきた。
声は裏返り、身体から妙な汗が流れてくる。

「み、…みんなは?」

「ッ!?あ、あ…うぅ…ぅぅ…」

どうして泣くんだよ母さん?
みんなはどうしたんだよ。
答えてくれよ…。

「父さん…」

「くッ…みんなは…」

父さんは悔しそうな顔をしながら、拳を握りしめている。
おいおい…。
なんだよ、その反応…。
みんなはどうしたんだよッ!?

「だ、大さんは!?美希は何処だよッ!?鈴もなんでいないんだよ!!!??」

「祐……皆は…」

「みんなは何だよッ!?何処にいるんだよ!!!??」

「みんなは……亡くなったよ…」

みんなが亡くなった…?
みんなが死んだってことか?
父さん…冗談はやめろよ…。
悪質な冗談だぞ…。

「父さんッ!!冗談はやめろよッ!!みんなは何処だよッ!!!!!」

「祐ッ!!」

「離せよ母さん!!頼むから嘘だって言えよッ!!なあ、父さん!!!!」

「嘘でこんな事が言えるか…ッ!……みんな…死んでしまったんだよ!…くぅぅ…」

ははは…。
ああ、嘘じゃないんだ…。
みんな…死んだんだ…。

――みんなの死を実感した瞬間、目の前が真っ白になった――

――自分でも何を考えていたのか、よく分からない――

――ただ、両親を追い出して泣き続けた事は覚えている――

――この日、俺の中の何かが壊れた気がした――

「……」

何時間泣いていたんだろう…。

両親が何かを言って帰ったが、それさえも覚えていない。
月明かりが射す病室で、俺は人形のようにただ座っていた。
そんな時、俺の視界にある物が映った。
ベットの横に配置された台の上に置いてある携帯。
紛れもなく俺のだった。

「……壊れてなかったんだな…」

携帯を手に取り、ゆっくりと開く。
画面に映っていたものを見た瞬間、形容しがたい感情が溢れてきた。
画面には、夕日と紅葉に彩られた山を背景に、幸せそうな顔を浮かべる俺達。
中央には、美希を抱き寄せピースをする俺。
俺に抱き寄せられ驚いたのか、困惑した表情を見せる美希。
美希に寄りかかるようにして、満面の笑みを浮かべている鈴。
俺の頭に手を乗せて、豪快な笑みを浮かべている大さん。

「ははっ…美希の奴、面白い顔だな…。鈴は幸せそうな顔をしてる…。大さんは…相変わらず豪快な笑みだな…。…俺……幸せ…ぞう〝…だ……う〝あぁ…みんな〝……どうしで……なんでぇ…」

大さん…
みんなのまとめ役で、優しい兄貴分。

鈴…
いつも明るく、俺達の大切な盛り上げ役。

美希…
厳しいけど、結構兄想いな大切な妹。

みんな大切な幼馴染と妹だった。
世界一番と言っていいほどの友達と妹。
俺の人生では決して欠かせないピース。
なのに…。

「なんで…俺だけ残して……みんな死ぬんだよぉ…」

俺の全てと言っても過言ではない3人。
みんながいなくなったら、俺はどうすればいいんだよ…。

俺は携帯を抱きしめながら、何時間も泣き続けた。

～～～～～～～～～～～～～～～

俺が目覚めてから1ヶ月が過ぎた。
あの日以降、俺は涙を流さない。
いや、流せなくなった。
悲しい気持ちの後には、恐怖が待っていたから。

みんながいない生活。
みんなに会えない日常。
みんなと送れない人生。

それが堪らなく怖かった。
自分でも何故こんなに怯えるのかわからない。

ひとりでだって学校へも行ける。
ひとりでだって生活もできる。
ひとりでだって何かできる。

けど、理解できない恐怖が俺を襲ってくる。

なぜ怖がる？
みんないなくても生活はできるだろ。

なんで震えが止まらない？
怖いことなんか1つもないのに。

まるで身体の感覚を失ったような恐怖が、俺の毎日を支配していた。

――この時から、俺の心は狂っていたのかもしれない――

――俺は理解できない自分が怖かった――

～～～～～～～～～～

目覚めてから2ヶ月が経った。

あの時の事故でわかったことがある。
あのバスの乗客は2人以外、全員亡くなったようだ。
事故の原因はトラックがバスに衝突したこと。
トラックの運転手は居眠り運転をしていたらしい。
その話を聞いた瞬間、思わず笑ってしまった。
居眠り運転？
そんなことで俺の大切な人は死んだのか？
呆れて笑いしか出てこねえよ。

そしてもうひとつ。
先日、畑さんが見舞いに来てくれた。
畑さんは泣いてた。

とても悔しそうに。
「なんでも力になるから、何かあったら相談してくれ」
と言ってくれた。
その言葉は素直に嬉しかった。

最近では恐怖感も消えた。
ただ…恐怖感がなくなると、次に待っていたのは絶望感。
毎日がつまらなく。
毎日が色の失ったモノクロの世界。
刺激がなく無気力な生活。
いや、色彩感覚がおかしくなった訳ではない。
ただ、全てが意味のないものに見えるだけだ。

俺は最近の日課である瞑想を行う。

前にやったゲームで、俺に似た状況があった。
仲間達との楽しい修学旅行のはずが、バスの事故に巻き込まれるという話だ。
その中で想いが世界を作った、というのがあった。
最後は皆生き残ってハッピーエンド。
結構おもしろい作品だった。

だから、俺が想えば皆生き返るかもしれない。
そんなことを思っていた。

――俺は狂っていた――

――こんなのゲームの中だけのことだって分かっている――

――けど、そんな希望に縋らないと俺はきっと壊れていた――

～～～～～～～～～～

目覚めから3ヶ月経った、この日。
思わぬ来訪者が来た。

ガラッ

「おっす！――――、見舞いに来てやったぞ！！」

見かけない男子が病室へと現れた。

「……誰？」

「え？…っあ、すんません！！間違えましたあああああ！！！」

バタンッ

どうやら間違いだったらしい。

と、隣の病室から騒がしい声が聞こえた。

『お～～すっ！――――、来てやったぞ！』

『なんじゃ、来てくれたんか！』

『しっかし、ここ遠いな～。おかげで小遣いスッカラカンだぜ』

『――――聞いてよ。こいつ、部屋間違えたんだぜ！』

『言うなよ！？……しかし、まあ。――――、元気そうでよかったぜ。相変わらず虫並みの生命力だな』

『ワシは人間じゃ！！まあ、心配してくれとったのは感謝するんじゃ。持つべきものは友達じゃな！！』

『じゃあ、大事な友達にお小遣いくれ』

『却下じゃ』

……友達か…。

俺は最近の日課である読書を始めた。

瞑想？
ああ、もう意味がないってわかったよ。
というか、最初から分かってたかもな。
本当に何してんだか、俺は。

――希望も何もない――

――俺はただ、この無意味な生活を送る――

――この後、退院が決まったのは直ぐだった――

――俺は普通の生活に戻る――

――そして、退院後――

――俺は急速に自分を見失うことになる――

～～～～～～～～～

今日から学校への復帰だ。
職員室に挨拶に行くと、様々な教師が声をかけてくれた。

「大丈夫か？」
「身体はもういいの？」
「つらいと思うけど頑張れ」
「いつでも相談に乗るからな」

どいつもこいつも同情、同情。
そんなに俺が可哀想か？
そんなに俺が惨めか？
ふざけんな、クソやろう。

教室でも同じだった。
どいつもこいつもかけてくるのは同情、同情。
どうしてそんな目で俺を見る。
どうしてかけてくる言葉が全部同情なんだ。
そんな…哀れんだ視線で俺を見るな。

学校生活が落ち着いた頃。
俺は畑さんに呼び出された。

「なんですか？」

「祐君。君はこれからどうするつもりだ？」

「どうするって…何がですか？」

「……君は前を向いて歩く気があるか？」

「……」

「今の君は見ていて危なっかしい。まだあいつらのことを引きずっているだろ？」

「…当たり前ですよ。そんな簡単に割り切れないですから」

「ああ、確かにそうだ。じゃあ君は、このまま亡き人に縛り付けられているつもりか？」

「…あいつらが死んだってのは、もう受け止めてます。ただ、あいつらのいない生活が奇妙なほど怖いんですよ」

「怖い…か。なあ、私からひとつ提案があるのだが…」

「提案？なんですか？」

「友達を作ってみてはどうだ？」

「…友達……。つまり、あいつらが抜けた穴に代用品を使えってことですか？」

「まあ、言い方は悪いがそんな感じだ。君はあいつらとの日常が無くなったことに怖がっている。なら、友達を作って楽しい日々を送れば、きっと恐怖もなくなると思う。それにあいつらの事を忘れろなんて言わない。ただ、君には今を生きて欲しいんだ」

「…頑張ってみます」

友達を作れば、この恐怖が消えるのか？
友達を作れば、俺の世界に色が戻るのか？
友達を作れば、また楽しい日々を送れるのか？

――この日、俺に希望の光が射した――

――俺は前を向いて進めるのか？――

――大切な人達に顔向けできるような人間になれるのか？――

友達を作る…。
やるしかないよな…。

「でさぁ、そこでモンスターが…」

「あのさっ」

「ん？どうかした？」

「あ、あの…」

どうして身体が震える。
なんで声が思うように出ない。
今を生きるんだろ？
前を向いて進むんだろ？

「ん？大丈夫か？」

「あ……大丈夫だ…」

「そっか、ならいいや。でさ、続きなんだけど…」

できなかった。
前は普通に話しかけることができたのに。
何故だ？
なんで怖かったんだ？
意味がわかんねぇよ…。

「通算２４回…全滅か…」

今日もダメだった。
畑さんの助言から１週間。
俺はできるだけ友達を増やそうと努力した。
けどダメだった。
なぜか話掛けようとすると、震えが止まらなくなる。
友達になろうとすると、恐怖が俺を襲う。

でも、１つわかった事がある。
いや、理解した。
俺が恐れているものを。

――俺は理解できなかった恐怖を知る事ができた――

――自分の中に恐怖を理解した俺は――

――もう今までの俺をやめた――

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

2年後

黄咲峠。

かつて大切な人を失った場所に、俺は来ていた。

その場所には小さな地蔵があり、多くの花束と供え物がしてある。

俺は持参した花束を供えると、手を合わせて黙祷した。

数秒後、瞼を開いて友人を妹に言葉を送る。

「久しぶりだな、元気にやってるか？」

「俺は元気にやってるぞ。まあ、毎日つまらねえけどな」

「今日で俺も高校卒業だ。就職先も決まったし、一応これからも生

きてはいけるよ」

「まあ、俺は生きてる心地がしねえけどな。…お前らはきっと今の俺を見たら、怒り狂うだろうな」

「中途半端に生きて、今を生きようとはせず、過去の事に縛りつけられている。最悪だろ？」

俺はポケットからタバコを取り出し、火をつける。

「……俺さ、自分が何に対して怖いのか理解したよ」

「俺は、お前達が死んだのがトラウマになってたんだろうな。対人恐怖症ならぬ友人恐怖症だよ」

「笑えるだろ？大切な人を無くすのが、凄く怖いんだ」

「でも、一応人付き合いはできるぞ。知り合いってとこまでなら。けど、それ以上の関係を望むと身体が拒否反応を起こしちまう。きっとあの絶望感をもう味わいたくないって、心が俺にストップを掛けてるんだと思う」

「だから俺は、人に嫌われるような人間を目指してる。こんな面倒くさい身体なんだ。相手が近づいてきて、それを裏切るのもなんだしな」

「それなら最初から嫌な人間だと思わせる。相手が近づこうとしないように。相手が傷つかないように」

「おかげで俺の評価はボロボロ。毒舌、人でなし、不良、ドS、鬼

畜。ああ、変人とかも言われたことあるぞ。ははは」

「どうだ？今の俺相当狂ってるだろ。自分でも分かってるんだ」

「けどさ、相手が傷つかないためにも。自分が傷つかないためにも。これが１番だと思うんだ」

タバコの吸殻を携帯灰皿にしまい、俺は腰を上げる。

「どうしようもない弱虫野郎の、独りよがりだってのも分かってる。だから俺が逝ったら、とことん殴ってくれ。とことん説教してくれ。それでまた、一緒に遊ぼう」

「ふう、話過ぎたかな？そろそろ行くわ」

「あ、最後に１つ」

――またな、俺の最初で最後の親友達。またな、俺の最愛の妹――

～～～～～～～～～

「……ちゃん…」

ん？声が聞こえる。
もう朝か？

「ん～～～……おはよう、雪音」

「…おにいちゃん……大丈夫？」

俺は心配そうに見つめる雪音を撫でてやった。
上目遣いの雪音マジカワユス。

「ちょっと怖い夢を見ただけだ。今、朝食の支度をするから先降りてな」

「……うん」

雪音はトテトテと部屋を出て行った。
まったく仕草ひとつひとつがなんて可愛いんだ。
ああ、雪音カワユス。

「ん？メールか…」

机に置いといた携帯が「マジで早く見てくれよ！！もう時間がないんだよ！！活動時間が限界なんだよ！！」といった感じで、俺にアピールしている。

「まったく、ワガママな携帯だ」

携帯を開くと、受信が一件来ていた。
とりあえず確認のためメールを開く。

―――――――――
Ｆｒｏｍ　エセ関西人
ｓｂ　そうかぁ（´・ω・、）
―――――――――

そっかぁ、これへんのかぁ。

分かったわ。
じゃあまた今度あそぼうなぁ。

それじゃ、また月曜日に　ノシ

―――――――――

「……本当にわるいな」

ふう、やっぱり近づきすぎたな…。
雪音や紫音、親父や母さんのおかげで、俺の考えは少しは変わって

きたけど…。
いや、変わったんじゃない。
きっと甘くなったんだ。
だから俺はあいつらに近づきすぎた。

「きっと、今まで以上に傷つけるだろうな…」

けど、あいつらに関わる＝管理局に関わるって事になる。
死亡率がグンッとアップだ。

俺は大切な人を失うのが怖い。
って、それは当たり前のことか。
けど、俺は次失ったらマジで壊れちまう。
だから増やさなくていい。
大切な人は家族だけで十分だ。

――本当に悪いな、俺は自己中だから。俺はお前達と距離を置くことにするよ――

「さて、妹（みき）にあまり与えられなかった愛情を、妹（ゆきね）に存分を与えてきますか」

――もし俺が俺に戻れる日があるなら、それは……――

第１６話　俺が俺であるために（後書き）

お疲れ様でした。

つまんないシリアスをよんで頂いてありがとうございます（笑）

そろそろ序章も終盤。

どんどん頑張りたいです！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0912z/

魔法少女とかマジ笑える

2011年12月28日08時49分発行